山ざくら

第27号　平成8年11月

関東氷上郷友会

おもわず新しい

NEXTA

“包装文化を創造するネクスタグループ”

ネクスタ株式会社

本　　社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京支店	111	東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F	Tel 03-3861-2331
大阪支店	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-939-1281
名古屋営業所	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
九州営業所	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ ラッピイ株式会社

本　　社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京工場	121	東京都足立区中央本町5-22-12	Tel 03-3849-6611
千葉工場	270-02	千葉県東葛飾郡関宿町台町2192	Tel 0471-96-1721
名古屋工場	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
関西工場	669-13	兵庫県三田市テクノパーク2-2	Tel 0795-68-5500
福井工場	919-04	福井県坂井郡春江町江留下相田63-66	Tel 0776-51-5886
福岡工場	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ パッケイ株式会社

本　　社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
栃木工場	349-13	栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938	Tel 0282-62-3321
兵庫工場	675-11	兵庫県加古郡稲美町蛸草1438-1	Tel 0794-95-0257

山ざくら

第27号

山ざる　第27号　目次

〈表紙〉常岡幹彦画・朝霧の里（丹波）
〈口絵写真〉①三尾山・徳田八郎衛／②③柏原町大新屋・④柏原八幡神社・渡邊隆男
草取り歌……山南町史より　4
ご挨拶……村上末吉　5／新役員候補決まる……5

≪関東氷上郷友会創立一〇〇周年記念大会特集≫
椿山荘に二五〇余人が集う……6
百周年記念大会に出席して……鶴田ゆき子・塩見みつゑ　10
発起人名簿……12／パーティ・スナップ……14／平成八年度祝寿者のご紹介……24

≪ふるさと随想≫
古里賛歌（その2）・中国人と日本人の里心……渡邊隆男　25
「かやばら、かしわら、かいばら」・三種の本から……大野善三　30
丹波雑感……梅田重二　35／野球少年の頃・望郷断想……木内実喜夫　37
「おじゃみ」の唄……佐藤菊子　38／ふるさとって何だろう……鴻谷正博　40
二つのふるさと……伊藤富士子　42／「郷土研究」耳よりな話……徳田八郎衛　44
故郷を離れて四十年……井本　馨　45

≪近況・エッセイ≫
定年退職・静岡生活との別れ……坂本重雄　47／続・焼きもの雑感……生田清弘　50

ＰＨＰ文化フォーラム「埴生の宿」……吉住自由造　54
ヨーロッパ汽車の旅……松山　裕　55
いまだから言える丹波育ちの告白……藤原知徳　57
私のライフワーク……可部美智子　59
実践「ヘルシー朝食」について……井本義一　60
楽しく動いてダイエット……植木十和子　62
コーラスは不老長寿の特効薬！……飯田光雄　64
騙し、騙されて……足立正美　64
だれにもできる無財の七施……堀井隆川　65
戯れに歌を作りて入選す……余田　功　67
古書店めぐり……本城英明　69／不思議な気分……井徳正吾　70
異常接近　……池田　忍　71
〈短歌〉……大野すゞ子　74／〈俳句〉……余田　功・徳田八郎衛　74
丹波を撮る……75／丹波通信（昭和八年の丹波新聞）……小田晋作　76
ふるさとの民話と伝説（澄まずの池）……和田　猛　78
ふるさとの祭り（柏原厄除祭）……徳田八郎衛　81・黒崎　宏　82
会員の本・紹介……84／同窓生交歓……88

《インフォメーション》展覧会／出版記念会／訃報……86
会計報告……94／丹波の動き……96
協賛広告……101／会員名簿……115／編集後記……160

草取り歌

―山南町史より―

○ 人のことなら言わんがよかろ　みだれ髪なら結うがよかろ

○ 今年はじめて田の草取れば　手からこぼれるなぎの根が

○ 思いこんだら泥田の水も　飲めば甘露の味がする

○ 夏は木のかげ寒中こたつ　はなれともない殿のそば

○ 便りないとは思うてくれな　心大願中山へ

○ お伊勢さまのよな御繁昌なとこに　なぜに宮川橋がない

○ 歌はよいもんじゃ仕事が出来て　話は悪いもんじゃ手がとまる

ご挨拶　郷友会101年を迎えて

会長
村上末吉

郷友会一〇〇年は大きな輝きと
感動を残して余韻嫋々
会員皆様のご協力に対しては
ただただ　感涙あるのみ

霞む丹波の美しい山や川を
後にして集いしもの
互いに励まし　慰め合って
会を愛する心は皆同じ

今年は一〇一年
世代交代によって一新し
「山ざる」と共に深い友情で
楽しい会となるよう　夢を託す

新役員候補決まる

去る九月十一日に行われた理事会で、任期満了に伴う役員改選にあたり、次の方々を新役員として推薦することを決め、来たる十一月二十三日の総会で選任されることになった。新役員候補者は次のとおり（五十音順・敬称略）

会　長　渡邊隆男
副会長　木村つた江　常岡幹彦　坂上勝朗
顧　問　足立三治　上山顕　梶原清　佐々木盛雄　村上末吉
監　事　足立和巳　萩野武
常任理事　足立謙悟　足立静雄　池田忍　大野善三　小田富士夫
木呂子恵美子　鶴田ゆき子　宮野近
理　事　芦田重秋　足立勲平　岡吉明　小川晴通　粕谷進　高見嘉都司
田中寛　千種倫幸　村上昇　吉住重造（以上留任の役員）

〈新任〉
理　事　定立吉雄　岡林逸男　片岡クミ子　岸本勲　久保良雄　坂本重雄
高見秀史　谷口浩章　千葉淳子　徳田八郎衛　仲一聡　西川宣孝
広瀬安伸　細川倫夫　細見利明　本城英明　前田武彦　増田攻

なお、退任の役員は次の方々です。ご苦労様でした。
足立かをる　足立誠一　秋元多美子　安達陽一　大木正徳　岡田一男
小山年博　谷垣正雄　田中篤郎　出町京子　田英夫　波多洋三
藤田正雄　細見綾子　堀井隆川　前田和市　村上善英　安原三智子
若森敏郎

創立100周年記念大会

椿山荘に250余人が集う

創立百年を迎えた関東氷上郷友会は、平成七年十一月十八日、東京目白の椿山荘において記念総会・祝賀会を開いた。

この日は初冬のおだやかな好天に恵まれ、受付開始午前十時三十分を待ちかねたように続々と会員が詰めかけ、さしも広い椿山荘鳳凰の間も、百年を祝う人々の熱気であふれ返った。

出席者は、来賓としてお迎えした、兵庫県丹波県民局長岩崎拓治氏、柏原町長谷口務氏ら郷里の各界の方々、それに満八十歳以上の先達会員の方々をはじめ、会員二百二十一名を合わせて二百五十八名をかぞえた。

長びく不況で、どれだけの方々が集まっていただけるかと、実行委員会では気をもんだこともあった。フタを開けてみると、それも委員達の取り越し苦労にすぎず、会員諸兄姉の郷里郷友への情愛が、いかに強いものであるかを、いまさらながら思い知らされたことであった。

定刻十一時。坂上理事の開会の辞で記念総会と祝寿会が挙行された。総会は来年度に迎える役員改選の件を諮り、候補者選任につき理事会一任を全会一致で採択。続いて祝寿会では、当年満八十歳を迎えられた田口正男氏に村上会長から祝詞と花束が贈られた。

田口氏からは「この佳き日に傘寿を祝っていただける幸せをこころに刻み、ますます元気な日々を送りたい」旨の謝辞

があり、温かい拍手のうちに記念総会・祝寿会を閉じた。

十一時二十分。創立百周年記念式典並びに祝賀会の開幕である。これより司会は大賀昭彦氏にお願いした。

大賀氏は、会員の大賀勝恵（旧姓秋月）さんの夫君で、多忙なお仕事の合間をぬって難事を引き受けてくださった。

室内暗転。特設スクリーンに懐かしい丹波の野山、佐治川（氷の川）の流れが映し出され、一瞬氷をうったような静寂が鳳凰の間をつつむ。続いて、ステージ中央にスポットが当てられ、金屏風を背にした吉住重造実行委員長の姿が浮かび上がる。盛んな拍手のなかに、世紀の祭典の開会宣言が行われた。会場の雰囲気は、ここでグッと盛りあがる。

次に村上会長のあいさつ、来賓のあいさつ、祝電披露と進み、式典のハイライト「祝舞・長唄鶴亀」へと移る。

祝辞は兵庫県丹波県民局長岩崎拓治氏、柏原町長谷口務氏、衆議院議員谷洋一氏、柏陵同窓会長植田憲雄氏から頂戴した。

祝舞は舞踊歴五十年。西崎流幹部として後進の指導に東奔西走されている西崎祥さん（本名出町京子＝柏原町出身）の出演。磨きあげたプロの芸に場内は堪能した。

これより宴会に。幕開けは菰かぶりの鏡割りである。ステージにしつらえられた、その名もゆかしい「松竹梅」の菰かぶりのまわりに、梶原清氏（元参議院議員）、足立良平氏（参議院議員）、萩野政一氏（春日町長）、藤原一郎氏（大阪氷上郡友会長）が陣取り、威勢よく木槌を一閃。

乾杯は足立順治氏（旧幸世村・明治三十五年生）にリードをお願いした。ダンディーなスーツに痩身を包んで、颯爽とステージに立たれ、力強い発声で杯を乾される氏のお姿に明治の人は鍛え方が違うと感じ入る。

これより会食に入る。頃合いを見はからって司会の大賀さんが、ビデオ・カメラを従えて、ほどよく酔いのまわった場内へ、インタビューに出かける。不意のマイクの来訪に戸惑い顔の人も、大賀さんの絶妙な話術にひかれて、つい口が軽くなる。

宴もたけなわとなると、お目当てのお楽しみ抽選会がはじまる。一等ビデオデッキにはじまり、炊飯器、コードレスアイロン、マホー瓶ポット、山芋、黒豆、新巻鮭などなど盛り沢山な景品に加えて、兵庫県から頂いた立杭焼五点が一場に花を添えた。これはただの抽選ではもったいないと、オークションにかけられ、一万数千円の売り上げを記録する。ほかに兵庫県東京事務所から神戸ホテルオークラペア一泊券も大人気で、当選した人には会場の羨望の眼が集中した。

いろいろな出会いを楽しんでいるうちに、無情の時は容赦なく流れて、別れの頃合いが近づく。

大詰め。中じめは、全来賓の方々の音頭で三本じめ。十四時十分。終宴宣言があって、めでたく百周年記念の祭典はお

開きとなる。帰りには、会員有志の心のこもった贈り物で中味のつまった福袋が、参加者全員に配られ、百年を祝うにふさわしい日は暮れたのであった。

次の回からは、当会にとっての新たな世紀がはじまる。次に二百周年を祝う頃には、世の中どう変わっているか、とても想像もつかないが、今回椿山荘に集ってくれた人達は、おそらく全員、草葉の陰からの参加となるだろう。そう考えると、百年という時日の重みがひとしお感じられる。限りある人生の中で、郷友会の〝集い〟は毎年開かれている。つぎの百周年にはどうあがいても出席できないのだから、一年一年を大事と心得、まめに会へ足を運んで頂けることを、こころから念願したい。

終わりに、本記念大会のために遠路多忙をいとわずご来臨賜ったご来賓各位、当日不参加にもかかわらず快くご芳志をお寄せ頂いた会員各位、当日万障繰り合わせて出席し、会を成立させ盛りあげてくださった会員各位、当日の受付や福袋引き渡し、会場案内など裏方の仕事にご奉仕頂いた、猿友会をはじめ、実行委員の家族の方々、そして、足かけ二年に及ぶ準備に精根傾け、会を成功に導いてくれた実行委員各位に、深甚なる敬意と感謝を捧げる。

〈坂上勝朗・記〉

来賓・祝寿・招待者名（順不同・敬称略）

◎ご来賓（十三名＝同伴を含む）

兵庫県民局長　岩崎拓治、柏原町長　谷口務、春日町長　萩野政一、衆議院議員　谷洋一、参議院議員　足立良平、前参議院議員　梶原清・矢寸子、兵庫県東京事務所長　竹田正、柏陵同窓会長　植田憲雄、大阪氷上郡友会長　藤原一郎、丹波新聞社長　小田知尊・すみ子、神戸新聞東京支社長　仲谷昌也

◎祝寿ご招待（一名）

田口正男

◎ご招待（二十三名＝同伴を含む）

足立三治、足立順治、足立誠一、秋山一男・恵美子、石倉軍二、上山顕、小川晴通・涼子、萩野一雄、久下梅次、小寺確郎・喜代子、佐々木盛雄、清水正男・貞子、須原逸郎、東郷茂、東田実、久安敏夫・敏、山田淑子・田中耐子

景品寄贈者御芳名（五十音順・敬称略）

芦田　重秋　りんごゴフレット　四〇個
足立かをる　パンティーストッキング　一〇枚
足立　和己　日高昆布　一〇個
北海道トロロ昆布　一〇個

綾木　健　壁掛け時計　七個
安達　陽一　ごみっこQ　二〇〇個
池畑豪士郎　手摘み煎茶　三〇個
上田　譲　屏風時計　一個
植木　一夫　テレホンカード　五枚
〃　タオル・シーツセット　三個
大野　義昭　ドイツワイン　三本
岡田　一雄　エスクワイヤウィスキー　三本
萩野　武　ヨクモック　五〇個
加賀山次郎　六合ハム商品券　二枚
梶原　清　お菓子　二〇個
岸田　勇　ベルギーマット　二〇枚
岸本　真輔　テレホンカード　二〇枚
木村つた江　ロイスダールクッキー　一〇個
久保　春雄　入浴剤（日本の名湯）　一二袋
久保　豊　ゴルフボール　半打
近藤　哲夫　玄関マット　一枚
坂上　勝朗　商品券・ビール券・お米券　各一枚
坂本　重雄　伊賀越醤油　六〇本
直田　正　新巻鮭　五本
〃　静岡茶　五個
〃　クロス・ボールペン　一個
赤対　哲郎　Jリーグ乾電池セット　五組
（広瀬安伸氏と連名で）　乾電池四本セット　五〇組
勢　正彦　インドネシア人形　一個
高見嘉都司　ラジオ付きライト　一〇個
高見　秀史　笹倉鉄平ラベルワイン　二本
谷口　浩章　ゴルフボール　二打
鶴田　宏　明治ミルクチョコレート　二五〇枚
徳田直三郎　ゼブラシャーボ　一本
〃　セラミックボールペン　五本
仲　一聰　草加せんべい　三個
中居　篤子　椎茸　一五個
橋本　真二　落花生　二個
氷上高等学校　オリジナル醤油　一〇本
兵庫県知事　丹波立杭焼　五個
兵庫県東京事務所　ホテルオークラ宿泊券　一組
広瀬　安伸　Jリーグ乾電池セット　五組
（赤対哲郎氏と連名で）　乾電池四本セット　五〇組
堀井　隆川　スライド写真アルバム　一〇冊
宮野　近　テレホンカード　一〇枚
森田　宏　焼のり詰合せ　六個
吉住　重造　文明堂カステラ　一〇個

○関東氷上郷友会寄贈

ビデオデッキ	一台	炊飯器	二個
コードレスアイロン	三個	マホービンポット	四個
山芋2kg箱入り	二〇個	黒豆ビン詰二個入	四個
黒豆五百グラム袋入三〇袋		アザミ菜漬け	一〇〇袋
おかき箱入り	一〇個		

◉寄付者ご芳名

木村つた江殿	一〇、〇〇〇円
永井　勇殿	一〇、〇〇〇円
松江　勝殿	一〇、〇〇〇円
波多　洋三殿	八、〇〇〇円
原田　尚人殿	七、〇〇〇円
井上　五郎殿	五、〇〇〇円
芦田　坦殿	四、〇〇〇円
小寺　確郎殿	三、〇〇〇円
高橋世志子殿	三、〇〇〇円
東田　実殿	三、〇〇〇円
山口　和久殿	三、〇〇〇円
木寺　昭三殿	二、〇〇〇円
酒井明朗・悦子殿	二、〇〇〇円
笹倉　郁子殿	二、〇〇〇円
塩見みつゑ殿	一、〇〇〇円
東郷　茂殿	一、〇〇〇円
和田　信雄殿	一、〇〇〇円

百周年記念大会に出席して

鶴田　ゆき子（市島町）

関東氷上郷友会は、百周年を迎え昨年秋の十一月十八日椿山荘で記念大会を開催。天候にも恵まれ多数の出席者で盛大そのものだった。その盛況の中にあって、ふと百年前に、この会を築いた大先輩の方々は百年後のことなんぞ考えもされなかったのではないか？　ましてや今日のありように変質していくことも……。

昭和三十四年五月、結婚して川崎に住むことになったので夫と共に、自由が丘の今は亡き伯父を訪ねたことがあった。その時「君たちはまだ若いから興味がないかも知れないが、東京にはこんな会があるんだョ」と、今思えば『山ざる』誌らしきものを手に話された。各界で活躍の立派な人々の集まりであるとも聞いた。丹波から出てきたばかりだった私の心の中は、「実家恋しや」の思いはあっても「丹波懐かし」にまで進化していなかったので、遠い話だった。これが関東氷

上郷友会の存在を知った最初だった。

その後、夫の転勤で数回の転居のあと、現住所に落ち着いてしばらくたった頃、総会の案内状が届いた。丁度子育ても終わり、子供につながったつき合いも一段落した時期で一度のぞいて見たくなった。会場は原宿の東郷記念館だったと思うが、出席したものの何やら自分が場違いのところへ入り込んだようでひどく緊張した。それから何年かたった。

三度目は、八十八周年を迎えるについて記念大会の準備会に誘われて浅草の「麦とろ」に出席。以後少しずつ会の手伝いをし今日に至っている。

会での語らいの中で、楽しみながら知らず知らずの内に多くを学んだ。次の百年の開幕にあたり、会の弥栄を祈念して「バンザーイ」

塩見　みつゑ（市島町）

郷友会の百周年記念大会おめでとうございました。大会の案内をいただき、今年こそは出席させていただきたいと待ちに待っておりました。

雲一つない好天に恵まれ、四十七年ぶりに会える友を思い出しながら急ぎ足で椿山荘へ向かいました。

初対面の方々の中、市島町の方に声をかけていただき、また同窓の友にも会うことができ、何からお話をしてよろしいのやら胸がいっぱいになり、感無量の一日となりました。

これもひとえに役員の方々や郷友の皆さまのお陰と深く感謝申し上げます。

伝統ある郷友会の発展と皆々様の御健康を心よりお祈り申し上げます。

同郷だから
だれとでも
気軽に
語り合える
郷友の集い

ことしもぜひ
ご出席ください。

◆とき　平成8年11月23日（土・祭日）正午より
◆ところ　千代田区九段下・九段会館
◆会費　六〇〇〇円（当日受付にてお支払い下さい）
◆問合せ　関東氷上郷友会事務局
（☎03－3293－0707・坂上）

発起人の方々のご協力に感謝申し上げます。

百周年記念大会の発起人名簿は二十五号にも掲載しましたが、その後新たに加わってくださった方、中途辞退の方、ご逝去された方など異動がありましたので、記念大会当日現在のものを、ここに改めて掲載しました。ご協力をこころから感謝申し上げます。

関東氷上郷友会百周年記念大会・発起人名簿

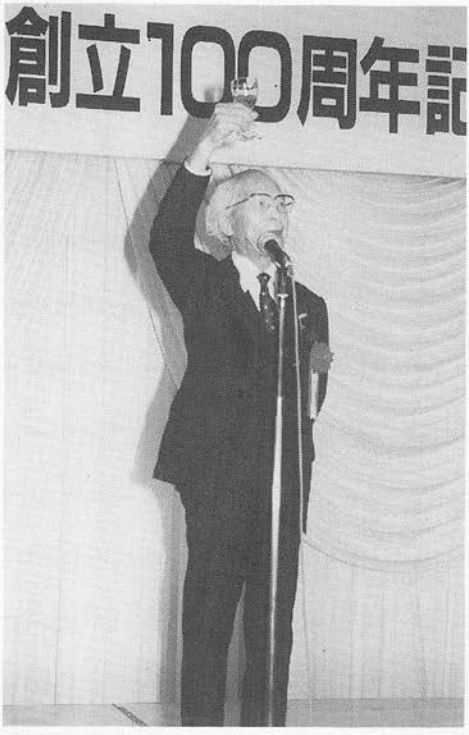
安達健一郎　足立　明子　足立かをる　足立　和巳　足立　勲平　足立　敬子　足立　謙悟　足立　静雄
足立　真一　足立多鶴子　足立　忠司　足立　昌彦　足立　勝　足立美都子　足立　吉雄　青木　修
秋山　一男　秋山　康男　芦田　重秋　芦田　坦　芦田　昌保　葦田　冬子　天野　清子　綾木　健
荒木　泰雄　井上　庸子　井田　悦子　井本　馨　井本　義一　飯田　光雄　生田　清弘　池田　忍
池田弥栄子　石川美代子　石倉　軍二　石田　修三　磯畑　脩　稲次　淑子　上田　脩　上田　雄彦
上田　譲　上野　重喜　上村　愛子　植木　一夫　臼井小五郎　打田　宏志　榎本　康子　小笠　勝啓
小川　晴通　小田富士夫　小野智恵子　大垣　忠男　大木　千里　大木　正徳　大木戸しず子　大地富美子
大槻作治郎　大西　泰子　大野すゞ子　大野　義昭　大野　善三　岡　吉明　岡林　逸男　岡山　充
荻野晴一郎　荻野　泰次　荻野　武　荻野　哲男　荻野美穂子　可部美智子　加賀山次郎　影山　朱實
梶原　清　片岡クミ子　神野　妙子　木下　清史　木村つた江　木呂子恵美子　岸田　勇　岸本　真輔
北川　義博　北山　素純　久下　梅次　久下　善生　久保　知義　久保　春雄　久保　豊　久保　良雄
小糸　イキ　小杉　武生　小谷　崇　小中　克巳　小林　和子　古倉　克實　近藤　勇夫　近藤　勇

近藤　田治　近藤　哲夫　権田　京子　佐藤　菊子　斎藤美寿子　斎藤　陽子　坂上　勝朗　坂上　豊
坂本　重雄　酒井　明朗　笹倉　強　沢田みさを　塩見みつゑ　志村　勝郎　清水　展代　篠原よね子
下中　昭男　正呂地群治　須原　逸郎　椙田　廣子　直田　正　鈴木　和栄　勢川　正彦　勢　武彦
田口　正男　田中　茂雄　田中登喜子　田中　篤郎　田中　昌子　田中三喜男　田中　寛　田辺　泰久
田辺　龍平　高井　静　高尾　久子　高橋　通也　高橋世志子　高橋　順江　高見嘉都司　高見修次郎
高見　孝男　高見　秀史　高見　幸男　竹内　茂子　竹内　光子　竹中紀代子　竹中　祥子　谷垣　尚
谷垣　宏造　谷口　捷　谷口　浩章　檀　和深　千種　倫幸　常岡　昭　常岡　幹彦　鶴田ゆき子
出町　京子　寺岸喜美子　田　敏夫　田　英夫　十倉　博　土井　雄三　徳義　通夫　徳田直三郎
徳桝　紘逸　中居　篤子　中野　周子　中村　正之　中山　昇　仲　一聡　永井　勇　永井希代子
永井　均　西尾　久之　西垣　秀正　西田みどり　西畑　健一　西安二三夫　新田　浩迪　野村　醇
野村　節三　能勢　徹　葉山たづ子　生原　富子　橋爪　忠　橋本　真二　畑　光　畑　雅樹
樋口ふみ子　広内　康邦　広沢　克江　広瀬すがの　広瀬　安伸　婦木　一男　藤田　和彦　藤田　千治
藤田　正雄　船越　祥郎　細川　倫夫　細木　敦子　細見　次郎　細見　利明　細見　尚史　堀井　隆川
本城　英明　本田　靖彦　前田　和秀　前田　和市　増井　攻　松下　文雄　丸川健三郎　三浦　和子
三觜　洋子　三宅　良夫　水谷　正人　水船　隆昌　宮野　近　村上　末吉　村上　昇　村上　久夫
村上　善英　室井　利代　森下千壽子　森田　清子　森田　宏　矢尾鉄太郎　矢本　博一　安田　功
安原三智子　保尾　明　山口　敏之　山中　人美　山本　清士　山本　紀子　山本　裕子　横溝　初子
吉住　重造　義積　保　依藤　俊平　依藤　廣次　和久　頼生　和田　信雄　若森　敏郎　渡辺　隆男

以上二百四十名

100周年記念大会

パーティ スナップ

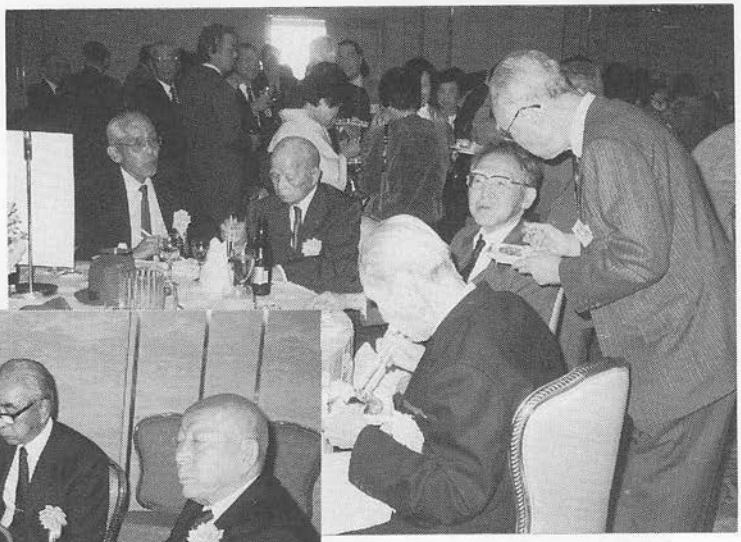


氷上郷友会 創立100周年記念大会

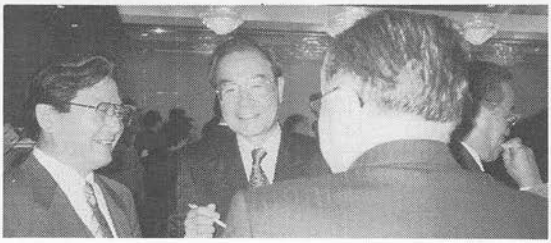
立100周年記念大会

友会 創立100周年記念

氷上郷友会 創立100周年記念大会



関東氷上郷友会 創立100周年記念大会



関東氷上郷友会

95 11 18

関東水上部友会 創立100周年記念大会

平成8年度 祝寿者のご紹介

編集部では、今年度に傘寿のお祝いを受けられる大正五年生まれの方五名に対しアンケート形式で次の項目のお尋ねをし、三名の方から回答を得られたのでご紹介する。

①生年月日　②ご出身地　③上京の年月日　④上京の動機　⑤これまでに最も印象に残ることは　⑥祝寿を迎えられてひと言。

木村　つた江　様

①大正5年8月13日　②市島町（旧鴨庄村）岩戸
③昭和6年12月上旬　④東京に憧れ知人の紹介で
⑤数年前に、心の友に出会い、80歳の節目に二冊目の本を出し子供達にお祝いの会を開いてもらった。
⑥先のことはあまり考えないで、一日一日を大切にして、楽しく生きていきたい。

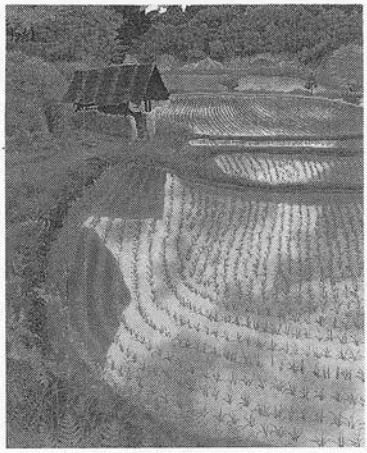
近藤　勇　様

①大正5年6月28日　②市島町（旧鴨庄村）喜多
③昭和17年9月8日　④就職のため
⑤北支従軍5年間の日々（昭和12年～17年）
昭和20年5月26日の東京空襲による被災
⑥青春時代は戦地にあり苦難の歳月であったが、やっと安らかな日々を迎え毎日を感謝で過ごしている。

吉住　自由造　様

①大正5年12月27日　②春日町（旧大路村）中山
③昭和26年5月1日　④仕事と文化的な魅力で
⑤得意の時も失意の時も、私を支え励まして下さった多くの善意の方々が忘れられない。
⑥八十歳といっても特別の感慨はない。人生の通過点にすぎない。〝もう八十まだ八十のやその春〟

ふるさと随想



笹川秀昭「映空」
（青垣2001年日本画展 佳作）

古里賛歌（その2）

―中国人と日本人の里心―

渡邊隆男（氷上町）

外国を歩いていて、あなたは中国人か韓国人かと問われることがある。我々にも欧米人がみな同じに見えるのだからしかたがないが、なぜかいやな気がするものだ。じょうだんじゃない俺は日本人だぞと、胸張りたくもなるものだ。

ところが、こういった母国への愛着は、世界中どの国の人間もみな同じだという。

俺は江戸っ子だぞ、信州っ子だ、丹波だ、薩摩だと、採れた畑を誇るのにも似た感情である。愛国心ではないそれは、民族意識のようなもの、これがいわゆる〝里心〟なのだ。

◇

欧米人から見れば、日本、韓国、中国は、文化のルーツも人の顔かたちも同じだから、人間の性（さが）も同じだと思うだろう。我々東洋人同士でさえそう思い込むきらいがある。ところが実はこの三民族、それぞれに大ちがいなのである。

東洋人から見れば、欧米の白人種、南半球の黒人種など、それぞれに同じ民族のように見えるのだが、一歩踏み込むと、

それぞれは大ちがいなのである。アングロサクソン、ゲルマン、ユダヤ、等々、民族の性のちがいには驚くべきものがある。それは必ずしも国家意識などというものではない。

◇

民族のエゴか宗教の過信か、為政者の虚勢か、民族間に利害得失の戦争が数千年間もくり返されて、国境線が引かれ、国家がつくられてきた。戦争は一度やったらコリゴリするはずなのだが、いまだにどこかでドンパチやっている。痛い目を知らない為政者の無責任な屁理屈ほど危険なものはない。またそれに付和雷同する大衆の愚も度しがたいものがある。

イデオロギーの時代が去り、今や世界は経済戦争の時代に入ったというのだが、もとより戦争というものは大昔から経済的不均衡ないしは宗教的侵略行為に起因するものだ。

人間そのものは数千年来、なにも変わっていない。人と人と、男と女との関わりも感覚も、喜怒哀楽の情も本質的には変わらない。変わったものは科学技術の進歩による文化文明である。人間まで進化したと思うのは大きな錯覚である。

一方、科学技術は日進月歩であり、それが幾何級数的に加速する。とくに昨今の技術革新はめざましく、世は早くもマルチメディア時代に突入した。インターネットがボタン一つで世界の情報に直結し、衛星放送が五〇〇ものチャンネルを提供する。いまや世界は日ましに狭くなっているのだ。

国家意識が薄れていくのは自明の理である。EC経済連合にも見えるように、国境のゲートもいずれなくなるだろう。いずれにせよ国家というものは、よく考えてみると摩訶ふしぎなものである。いわばヤクザの縄張りみたいなものだ。そのうち二十世紀の遺物になるのではなかろうか。

国境がなくなり国家が崩れ去るとどうなるのか。もともと国家は民族が核となり、その離合集散によってできたものである。オリンピックでも見るように、国の数は年を追って増え続けている。国家はいずれ〝民族〟に回帰するのではなかろうか。民族は文化や言語や宗教や生活様式の伝統を共有する同族意識によって形成されたものだから、これはなくなることはない。血統というか、遺伝子的な絆があるからだ。

何千年も文明が交流したにもかかわらず、民族はあまり交配していない。地続きのヨーロッパにしても、アメリカ大陸の白人、黒人種にしても、中国四十余の異民族にしても、ほとんど混血していないのはなぜだろうか。地球上の寒冷地と亜熱帯と熱帯域と、乾湿さまざまな気候風土の環境が、さまざまの民族を育んだのだが、人類にもまた、鳥の帰巣本能にも似た〝里心〟というか、根強い回帰性があるようだ。

◇

日本民族と中国民族ほど、同じ文化を分けながら、民族の性の異なる例を他に知らない。親しく交われば交わるほど、

私にとって中国は、近くて、世界でいちばん遠い国なのだ。

日本列島は、南北寒暖の差もほどよく、陽光にもめぐまれた肥沃なアルカリ性土壌である。海をめぐらす山野の四季の美、山海の珍味は、世界にも比類がない。そんな環境下にヤマト民族は育まれた。快い四季のうつろいを愛でながら、大自然の懐に抱かれて育った。純朴温厚で繊細、柔和で従順、器用かつ勤勉で物見高いから、何につけてもたちまち消化吸収する。信じやすく、短気で少々軽薄なのが玉に傷か。

中国大陸は、北は極寒、南は亜熱帯、西は広大な砂漠である。酸性土壌で作物が育ちにくい上に、ときには大河が恐龍のごとく暴れるのだ。北からはロシアの侵攻におびえ、打ち続く内乱に翻弄される。苛酷な自然と内憂外患の逆境にあって、いかに身を守り生きのびるかが、中国民族数千年来の生活であった。だから中国人は恐ろしく強靱な意志をもつ民族である。一見鷹揚に見えても相容れない。慎重かつ着実、時間をかけても完全を目ざす。深慮遠謀、いかなる苦難にもたじろがない、恐るべき持続力と耐久力とを持つ民族である。

自然環境と共存した日本民族と、それを常に敵視した中国民族との性(さが)の隔絶は、同じ文化を継承しながらも、それをことごとく異質に昇華させたのである。日本民族はいわば女性的文化を、中国民族は男性的文化を構成してきたようだ。

◇

歴史学者、津田左右吉先生が、病床で私に言い残されたことがある。「日本は中国、韓国や西欧からさまざまな文化をむさぼり吸収してきたのだが、いったい日本が世界に誇りうる美術があると思いますか。実は一つだけあるのです。それは平安朝の、あの典雅な古筆〝かな〟の美しさです。あの筆跡に見る優雅なデリカシーなのです。あの精神美こそ日本人が誇れるものだということを記憶しておきたまえ」と。

澄みきって、たおやかで、よどみなく、リズミカルに、歯切れよい節度をつくりながらどこまでも暢達する。あの平安古筆のもつ繊細かつ典雅な感性は、中国人にはない。

生涯かけて中国の書美術に心酔した西川寧先生が、私に諭された話題も紹介しよう。「俳句という、いかにも日本的な詩がある。十七文字の制約のなかで苦吟するのだが、感情を表現しつくせないから最小公約数的な言葉を組んで情趣をほのめかす。人はその余韻をさまざまに解して楽しむわけだが、中国人はその曖昧さを理解しようとしないどころか我慢がならないのです。漢詩を見たまえ、韻をふみながらも情感をいかに正確に表現するかに腐心するのだ。だから他人の勝手な解釈を許さない」「ワビとかサビというもの、あれも中国人には理解できない。だいたい日本人にだってよくわかっちゃいないんじゃないか。中国人はトコトン理解しなければわかった(明白(ミンパイ))とはいわないのだが、日本人は何でもすぐに相槌

を打つ。困ったものです」「焼きあがった陶器を見て、日本人なら、火加減で変形したり釉薬がおもしろく垂れる景色を、これもまたいいと喜ぶのだが、中国人は、いささかでも意図どおりに上がっていないと、たちまち割って捨てるのだ」「私は趙之謙（清代書法の名家）にほれ込んで、生涯かけて追ったが遂に勝てなかった。なぜかと考えた末に思いあたった。それは自分が日本人だったということだ」と。

東洋学者、栗田直躬先生のご忠告も紹介しておこう。「中国人と決して駆引きすべきではない、必ず負けるからだ。中国人は君たちが思っているほど甘くはない。たとえば一メートル四方ほどの綿入れ布一枚と二本の紐さえあれば、山中、河原、どこでも平気で野宿できる民族なのだ。決して物を粗末にしない。使える限り使って捨てない。路端の夜店を見たまえ、コルクの栓まで売っていて、それをまた買う者もいるのだ」「中国人のケンカを見たことがあるかね。この二人はもう生涯絶交だなと思っていると、数日後には何もなかったように親しくしているものだ。日本人に歯の立つ民族ではない。そんな国とよくも戦争したもんだ」「中国人は徹底した合理主義だから、よほどでないと物を買いかえない。だから技術が発達しない。日本人は新製品が出るとすぐにとびつく。だから科学が発達した。どっちもどっちだ」と。

◇

私はこれまでの三十余年間、書画の出版の関係で、台北、香港、上海、北京などを頻りに訪れて、多くの文人に接した。友人が芋づる式に増え、連日のように酒宴に招かれてさまざまな話題に分け入った、楽しい思い出はつきない。

何かと理由をつけて、例の乾杯を頻繁にやるのだが、下戸もまた形だけでも必ず杯を上げる。各自酒量に応じた飲み方があるのだ。ただし決して手酌はやらず、必ず相手をさそって飲み交わす。酒のいける人を海量（ハイリャン）という。ハイリャンだとおだてられてつい深酒をする。全員一人ずつに乾杯を求めると十二人いれば十一杯、返杯がくるからさらに十一杯、ときには一斉にやるから紹興酒の一人一本ぐらいはたちまち飲んでしまう。だから打ちとけるのも早い。席上イカレた中国人をまだ見たことがない。我方では何人イカレたことか。担いで帰り道、日本人の人のよさ?を何度反省したことだろう。

酒飲みにも位（くらい）があるという。①酒聖、②酒仙、③酒豪、④酒鬼、⑤酒乞、⑥酒乱、⑦酒狂、⑧酒叭、の八階級である。

読んで字の如しだが、酒鬼は自分は飲まないで人にむり強いする者。酒乞はもっと飲ませろとせがむ者。酒叭はふぬけになって吠えたてる者をいうのだそうである。

また中国には文人の条件が七つあったという。①詩をつくり、②書をかき、③画をかき、④酒をたしなみ、⑤琴を弾き、⑥詩を吟じ、⑦舞をまう。唐の時代まではみなやったという

のだが、いまは頭の四つだけで認めよう、とか。ちなみに中国の政治家は、みな文人だったという。かつての文人たちは、三三五五集まっては酒をくみ交し、詩書画をつくって楽しんだ。素裸の美女が飛天の薄絹をまとい、琴の音に歌い舞った。羽衣が風になびくさまを〝風柳＝流〟と言い出したとか。

何につけても半端ではない。それが中国民族なのである。

◇

中国人の〝里心〟にはまた格別のものがある。広大な大陸、きびしい大自然であればなお、郷里への執着は強い。生まれ育った土地だけが安住の里なのである。同郷人と聞くだけで、あの用心深くガードの堅い中国人も、たちまち手放しで信頼するのだ。だから中国人社会は、それが異国の住む華僑であればなおのこと、同郷の絆で結ばれるのが安泰なのである。

中国人はまた、郷土の料理が好きだ。いちばんうまいと思うのである。だからたとえば上海料理店に招かれたら、招待主は上海人であり、四川料理店であればまず間違いなく四川省の人だと思ってよい。日本人が招く側の場合も、主客の出身地を聞いて店を選ぶと、ことのほか喜ばれるものである。そんな習慣から、我々日本人が日本料理店に招かれることはあっても、我々が中国人を日本料理店に招くのはさけた方がよい。生ものと淡白な味は中国人の口に合わないからである。

また中国人は誰しも、異郷に死すとも郷里に葬られることを切望する。それが適わぬときには、郷里の方角に向けて墓標を立てる。そしていつの日かの帰郷を待ち続けるのだ。

中国には古来、望郷の詩歌のいかに多いことか。故郷に錦を飾って帰るといった演劇もまた少なくないのである。

◇

日本人は、中国人ほどのこだわりはないにしても、古里を想う心に変わりはないはずだ。〝諦観〟という言葉がある。やまと民族には、いさぎよくあきらめて執着しないという性（さが）があるようだ。何につけても常に前向きなのだ。「男子志を立てて郷関を出ず、学もし成るなくんば死すとも帰らじ……人間到る処に青山あり」という詩があった。学というものは際限がなく、成るものではない。だから死んでも帰れない。作者は月性（げっしょう）、つまり日本人のつくった漢詩？なのである。

中国民族は何につけてもしたたかである。踏み込むほどに舌を巻くばかりである。だからやはり私は、日本に生まれてよかったと思う。日本は世界でいちばん気さくな国だから。住むならやはり丹波がいい。何の変哲もないからいい。

十六年余を丹波で育ち、もはや五十二年も東京に住んでいるのに、いまだに山家の性（さが）が直らない。お里言葉も忘れない。

海外に出て、ふと日本を思うとき、いつも浮かぶのは丹波の山河である。子供のころの古里である。二度と再び住むことのない、霧に包まれたあの朝坂村のたたずまいである。

「かやばら、かしわら、かいばら」・三種の本から

大野善三（柏原町）

「柏原」を「かいばら」と読む人は、兵庫県氷上郡出身者以外には、極めて少ない。殆どの人は、「かしはら」か「かしわばら」と読む。同じ兵庫県出身者でも、阪神一帯の神戸や姫路出身者には、「かいばら」の存在さえ知らない人が多い。たまに「ああ、福知山線の駅にありましたね。知ってます。『かいばら』と読むんだそうですね」と反応して下さる人に出会うことはある。思わずにっこりしたくなる。

考えてみれば、「柏」を「かい」と読むほうが無理である。漢和辞典をみる。「かしわ」の音で引くと「柏」がでてくる。俗字として「栢」を当てることもあると示してある。慣用音としては、「びゃく」と読む。漢音は「はく」、呉音は「ひゃく」。字義は「このてがしわ」だが、和義は「かしわ」であり、ブナ科の落葉高木とある。字源の一部に、「我が国の古書にまた『かえ』を訓じる。『不レ變　かえぬ』の略訓で、常緑木の総称。種類が多くおのおの和名がある」と註書がしてある。ここへきて、初めて「最初は『かえばら』と読んでいたのが、そのうちに『かいばら』に変化したのかも知れない」と思えるようになる。

小田急の沿線に、「栢山」という駅がある。「かやま」と読んでいる。しかし、漢和辞典によると、「かや」に当たる漢字で「栢」はない。あくまでも、「柏」の俗字なのである。とすると、「栢山」は「かしわやま」と呼ぶのが正しい使い方なのだろうか？　私は長い間、「かいばら」は本来、「栢原」と記述していたのが、いつの間にか「百」の上の一が消失して「柏原」になったんだと勝手に解釈していた。それは間違いだったようである。しかし、浅学非才の私が、あれやこれや思い巡らしていても仕方がない。現に、日本にはとても読めない地名が山のようにある。読み方が簡単なようで、予想に反した読み方の地名も少なくない。「かいばら」もその一つとしておこう。

「かいばら」の地名に最初に疑問を起こさせたのは、一〇年程前に読んだ、近松門左衛門の浄瑠璃『大經師昔歴』であっ

た。その頃、柏原に帰郷して散歩していたとき、「おさん茂平衛の茂平衛の里」の立て札を見た。私の子供の頃にはない立て札であった。「おさん茂平衛といえば、歌舞伎にあった筈だが、それが柏原に関係しているとは、本当……？」と思い、早速、その浄瑠璃本を読んだところ、まさに柏原という地名が出てきた。

ご存知のように、この外題の筋はこうである。京都四条烏丸に店を構える表具師の大經師、以春方では暦を売る商売が繁盛している。正月のある日、女房のおさんの母親が訪れ、以春には内密に金の融通を頼む。おさんは、気の優しい手代の茂平衛に頼み、茂平衛はこっそり以春の判を盗用して工面しようとする。これが、主手代の助右衛門に見つかり、茂平衛は主人の以春の前に引き出され折檻される。そこへ、普段から茂平衛を密かに恋いこがれていた下女の玉が、これは実は伯父に要りようがあって、私が茂平衛さんに頼んだことで、茂平衛さんには全く罪がありません、と身代わりを買ってでる。主人の以春は以前からこの玉に気があって、茂平衛の身代わりをしようとする態度に大いに嫉妬して、茂平衛を一室に監禁させる。その夜、おさんは玉の侠気に感謝して下女部屋を訪ね、礼の言葉を述べる。その時玉が、実はご主人の以春さまは始終わたしを付け回し口説き、部屋へ忍び込もうとしている、今晩も来るかも知れない、と告げる。そこで、おさんは玉に頼んで、今夜一晩、あなたの寝間を私に貸して下さいと頼む。一方、茂平衛は普段から玉にいろいろと懸想の言葉をかけられ、何やかやと便利をして呉れていたのに、全くそれに応えずにいたことを悔い、真夜中、監禁部屋を抜け出て玉の寝間に滑り込んで満足させようと実行する。ことを達した途端、表で「御主人のお帰り」の声。寝間の二人は、相手がおさんであり、茂平衛であることを知り、動転する。助右衛門の手で、事実が暴かれ、玉は二人を仲介したという咎で伯父の家に引き取られ、おさん茂平衛の二人は都落ちする。その先が、茂平衛の里、柏原である。都落ちする際、おさんは両親との別れを惜しむ。その最後に、おさんと茂平衛が嘆きあって、こう言う。

「そなたと肌ふれ寝たは定形は生まれ変わっても、この悪名は削られぬ。そなたはいこう狼狽が来たそうなと、恥しめられて茂平衛も、アッアそうぢゃ、ハア、あれ三条通の車の音夜明というて程もない。行先あてどはなけれども私在所、丹波の柏原まで落ちて見るばかり。サア、暇乞いなされませ…」。

（岩波書店版『日本古典文学体系四九』）

この私の在所、丹波の「柏原」に、「かやばら」とルビがふってある。この浄瑠璃が書かれた一七一五年頃は、「かやばら」と言ったとみえる。「柏原」を「かやばら」と発音したのか、「かやばら」に「柏原」の字を当てたのかは判らな

い。とにかく「かいばら」とは言っていない。

もう一〇年も前になる。『芦田均日記』が岩波書店から出版された。私はツンドクの癖があって、早速、購入したが、読んだのは第一巻の一部だけである。芦田均氏は我が母校、柏原崇広小学校および柏原中学校の出身者で、政治家では最も出世した先輩である。昭和二三年三月、社会党の片山哲内閣が総辞職した後を受けて、民主、社会、国民共同三党連立の芦田内閣が成立した。その初夏だったか、夏だったか、芦田均総理は母校を訪れた。当時の中学校校長植木孝之助先生は芦田総理と同級生で、大変な感激の中に、総理を母校に導いた。我々在校生は校門の前に列を作り、万歳だったか、拍手だったかは忘れたが、大いに歓迎した。全国に学校は数多あるが、総理を出した学校はそんなに多くない筈である。その数少ない小・中学校に学んだことを、今も私は誇りに思っている。そんな思いがあって、『芦田均日記』を購入した。残念ながら、芦田連立内閣は昭和電工疑獄事件に巻き込まれ、半年ほどで瓦解した。昭電疑獄事件は最後は芦田均氏にまで及び、検察に事情聴取をされた。ある日のニュース映画で、「いまの心境は?」という記者の質問に答えて、芦田氏は「天気晴朗にして波静か。つまり、今日の天気のように晴々している」と、無罪を強調して雲一つない青空を指差して答えていたのが、今も記憶に残っている。

芦田氏は政界での実績に関しては、必ずしも成功者であったとは言えないが、戦前戦後を通じて、リベラリストの思想を貫いた政治家の一人として評価されている。その生涯を記録した『最後のリベラリスト・芦田均』という伝記も刊行されている。

『芦田均日記』の解題の中に、こんな氏の文章がある。

「日本には危険思想と称する特殊な熟字がある。外国には……思想そのものを罰しようといふ法律はない。……推ふに立憲政治は常に反対派のあることを予想する政治である。従って立憲政治の向上は反対派に対する寛恕の精神から始まる」

「日本に迫ってゐる危機は外敵の侮よりも内部からの崩壊である。世間には今にも外敵が日本に攻寄せて日本を占領するが如き説をなすものがあるが、これは自分自らの影に驚く腰抜け武士である。日本程に資源のない、人間許り多い、治め難い国を、多大の危険を冒して攻め取ろう等といふ物好は世界に滅多とない。病根は寧ろ日本の内部にある」。

これが、戦雲ようやく急ならんとしていた昭和一四年、『丹波青年』という雑誌に載せられていた文章である。今ならさほど新しい視点ではないが、大政翼賛の号令が発令されようとしていた当時の文章としては、意味の大きいものと評価したい。リベラリストの名が付せられる所以である。

芦田氏は京都府の出身であるが、『芦田均日記』に、氏の経歴がこう紹介してある。

「均は、郷里の大内小学校（のちの六人部村小学校）を卒業後、隣村の兵庫県氷上郡柏原町にある崇広高等小学校に進学。柏原町小谷方に下宿しながら柏原中学校を卒業する」と。この柏原町に「かしわら」とルビが振ってある。近い関係だと思っていた芦田氏が一度に遠くに行ってしまったように感じる。やはり、柏原を「かいばら」と読んで呉れるひとは少ないようである。

最近、司馬遼太郎の『燃えよ剣』を読んだ。新撰組副長、土方歳三の半生を描いた傑作である。三〇年ほど前、『竜馬がゆく』という、同じ司馬氏の作品を読んだことがある。当時、この歴史小説がＮＨＫの日曜の大河ドラマで放映されていたのを観て、「なんでこんなに面白くないのだろう？　一体、原作はどんな小説なんだろう？」という疑問から読んだのだった。そうすると、なんと、その面白いこと。幕末の動乱が手にとるように展開されているではないか。天衣無縫の坂本竜馬が、幕藩体制を無視して気宇壮大な将来の政治プログラムを描き、それを一つ一つ説得してゆく、そのキャラクターに熱中した覚えがある。つまり、ＮＨＫの番組は、竜馬とおりょうの男女関係に力点があって、原作者が述べようとした歴史観を殆ど削ぎ取って、柔弱このうえもない作品に堕してしまっていたのである。大衆に判りやすくしようとする演出意識がしばしば起こす、テレビの最も陥りやすい堕落である。

その『竜馬がゆく』が新聞に連載されていた殆ど同時期に、『燃えよ剣』は他の雑誌に連載されていたという。その著作エネルギーたるや、物凄い。よくも、この二本の大作が同時に書き進められたものだと、大作家に対して生意気ながら、感心する。ただ、この小説を読んでいると、実は作者は嬉々として著述を進めていたように感じる。土方歳三は、竜馬とは性格も、考え方も、将来展望も、人との付き合い方も正反対である。北辰一刀流という当時の代表的な剣術を身につけていた坂本竜馬は生涯、殆ど人を切っていないのに対して、天然理心流という武州日野の田舎流派で腕を磨いた土方歳三は、生涯を喧嘩師に徹し、人を切ることを天命と思い込んでいた。一方は手詰まりの幕藩体制の改革に夢を膨らませ、他方は、既に時代遅れの体制の中でどんな思想にも傾かず専心、旧来の武士倫理に殉じた。両者の歩んだ道は、天地程にも違う。だが、同じ動乱期に、それぞれ自分の信ずるところを貫き通し、それを他人に任せず自らが実行して果てるという、壮烈さは同じである。そして、両方の小説とも、約三〇〇年間に亘って、練りに練って強くなった幕藩体制が、時間とと

もにその成熟度を増し、そのことが却って体制を脆くしてしまったということを説いている。体制には宿命的にそのような性格があることを、作者は感受していたように思う。その歴史観を二人の人格を通してダイナミックに展開し、読者を歴史の事実の中に誘い込み、様々に読者の思考を刺激して充実感を与えてくれる。まさに、歴史小説の醍醐味である。

『燃えよ剣』の中に、蛤御門の戦いが描かれている。ご存知の通り、禁門の変と言われているように、長州藩が御所に攻め入り、できれば天皇を自陣にお移し申して、尊皇攘夷の天下を取ろうという策略を、会津藩や薩摩藩などが連合して打ち破るという戦いであった。その時の幕府の代表は、京都守護職の会津藩であったが、その配下に三〇余りの藩が参加している。その中に、柏原藩も含まれていた。

小説には、こう書いてある。

「幕府（京都守護職）は、会津、薩摩の二大藩を主力として、ほかに、大垣、彦根、桑名、備中浅尾、越前福井、同丸岡、同鯖江、丹後宮津、大和郡山、津、熊本、久留米、膳所、小田原、伊予松山、丹波綾部、同柏原、同篠山、同園部、同福知山、同亀山、土佐、近江仁正寺、但馬出石、鳥取、岡山など三十余藩の兵を動かしている。兵力は四万。」

この四万の中に、柏原からの武士も参加していたのである。

柏原藩は昔から由緒ある藩だとは聞いているが、歴史的な場で活動したという記述は、不勉強のせいでもあるが、これまで見たことがない。「麻の如くに乱れつる……」という校歌を聞いても、それは戦国時代の織田信長の戦歴であって、その後の歴史には、織田藩はさっぱり登場しない。考古学の中の史実のように、歴史に動きが感じられないというのが、正直な柏原藩に対する私の感想である。

それが、司馬遼太郎の小説に出てきたのである。幕府軍全体の中での動きだから、柏原藩の細かい戦闘場面はイメージできない。しかし、歴史の展開の中で、動静があったことは認められる。嬉しい思いで、柏原の文字を眺めた。しかも、「柏原」には「かいばら」のルビがある。少なくとも、幕末には「かいばら」の地名で呼ばれたのだということが判った。小説は歴史学ではないので、正確さを欠くとも言われるが、司馬氏の資料の渉猟ぶりと、その正確さについてのこだわりはつとに有名である。いずれにしても、「柏原」を「かいばら」と読む書に遭遇したことに、大いに喜びを感じた。

丹波雑感

梅田重二（山南町）

明治三十三年（一九〇〇年）生まれ、九十六歳の養母が一人で生活出来なくなり、本年四月に山南町野坂の福祉施設に入所させて戴いた。その手続きや診療のため、二月より愛車を駆って毎月丹波に帰っている。行程一五〇〇キロである。グルグル廻って、見たまま、感じたままを書いてみたい。

山南仁王駅と消えた佐治川

夜中に横浜を出れば、明け方に山南仁王駅につく。清潔な洗面所で有り難い。少年の頃、「出会い、出会い」と言っていた所で、篠山川と佐治川が出合って、いつも霧が立ち込めメルヘンチックである。

お盆は禁漁であって、魚がそれを知っているのか、群をなして悠々と泳いでいた。それをワイワイと眺めに行ったものだ。ところが、「佐治川」が加古川となっている。地図で確かめたが「佐治川」の名は忽然と消えている。牧山川もない。五、六種類の地図の内、一種類だけ懐かしい「佐治川」の名があった。鳥取に名石の採れる「佐治川」があって、そちらは健在であった。

消えた美しい名の村々

何を今更、時代錯誤の馬鹿なこと、と言われるかも知れないが、町の誕生で、美しい村々の名が消えてしまった。足立君の神楽村、臼井君の幸世村、横山君や笹倉君の小川村等である。神楽（しぐら）・幸世（さちよ）・小川（おがわ）・何と美しい響きではないか。小川町（おがわちょう）と呼んだら町工場の廃液が流れていそうだ。小川村と言ったら水車が廻り丸木橋のある風景ではないか。

人情は消えていなかった

老母の用足しで梶村の或る人を訪ねた。昔と違って人通りが少ない。散髪屋も消えている。自転車の老人を止め、訪ね先を聞いた。「多分、あの家だから付いてきなさい」と自転車を猛スピードにして先導して戴いた。自動車が自転車に案内されたのは初めてである。

『公共の宿（西日本編）』や『るるぶ』によって宿を選んでいる。八千代町のエーゼルささゆりや香寺町休養センター、時には氷上町新庄のモニカに泊まる。

家内が、八千代町や加美町の、平屋（ひらや）でありながら屋根が幾層にも重なった民家を見て、羨ましそうに感嘆の声をあげる。丹波にも大きな家はあるよ、と青垣町に足を延ばす。台風の

余波で悪天候。大名草のとある民家で、若主人らしい人に青垣町一番の大きな家はどこかと尋ねた。「私は七年前に他県から養子に来たので、はっきり判らない。今おばあちゃんを呼んでくる」と妻女、おばあちゃん、遂にはおじいさんまで一家総出で、町長の家だ、いや議長の家だと結局纏まらない。横浜ナンバーの車でやってきて「大きな家が見たい」ということが、余程怪訝であったのだろう。

青垣町から生野町に抜ける。地図に反して、何と隘い道であろうか。悪天候と悪路で、「あまごの家」を見過ごしたのが残念である。土産購入に播磨屋本店に寄りたく、やってきたのである。生野駅から川沿いに行くと、鉄筋の大きな工場である。日曜のことで閉まっていた。グルグルと車でやっていると「モシモシ」と声を掛けられた。「随分と迷っておられるようですが、どこに行かれるのか」と言う。播磨屋の売店に行きたいと言うと、萱葺き三棟の売店に案内された。敷地優に一千坪、観光バスが続々とやってくる。ゾロゾロと一列に並んで購入する。売子さん六人では忙し過ぎる。

消えていった戦前の風習

戦前と現在で、丹波の人口が、どうなっているのか、不幸にして知らない。若者が減っていることは、紛れもない事実であろう。全国的な傾向であるが、スーパーやコンビニの出現で商店も廃れていく。

少年の頃、楽しかったお祭りでの御神輿や、御太鼓が練り歩くことも出来ないであろう。柏原市や和田市で、人のラッシュも起きないだろう。まして、マスメディアの時代、丹波猿楽や浄瑠璃の復活を願っても無理な話であろう。

健康保険のなかった時代、「頼母子講」が相互扶助の役目を見事に果たしていた。

山国ゆえに海の幸は贅沢と、一年に一度だけ、村中挙げて鯖寿しや酢蛸を食べた。その日以外は食べなかった。

精神面も含めて、今の時代が良いか、戦前が良いか、戦中派後期の私には判らない。しかし、清らかで美しい「丹波の

村」に生まれ育った私としては、人を愛し労り、先祖を敬う気持は、いつまでも持ち続けたいと願っている。

野球少年のころ ―望郷断想―

木内　実喜夫（氷上町）

「六三制　野球ばかり　強くなり」

昭和二十二年に新制中学ができ、新一年生に入学したのが僕たち昭和九年生まれです。校舎も運動場も小学校の借物、教科書も揃っていませんでした。世の中も衣食住すべてが不足していました。

それなのに、野球だけは盛んでした。大人も子供も日本中、野球に明け暮れているようでした。校庭はもちろん、町中の小さな広場や石ころだらけの川原でも、三角ベース野球の場所取りに走りまわるほどでした。

ボールは軟式テニスのボールなら最高、手製の布巻きデコボコボールもありました。バットは木の棒を削ったもの、グラブは布の端切れを自分で縫ったもので、とてもグラブとは見えない代物、でも大切な宝物でした。

宝物といえば、雑誌「野球少年」は貴重な野球情報誌でした。毎号の表紙は有名選手の雄姿が水彩で描かれていました。今も覚えているのは、法政大学のエース関根潤三さんの颯爽たる投球姿です。

当時成松の町では、お盆の時期に郡内の野球チームのトーナメントが開かれていました。甲賀山のふもとに広がる小学校の校庭が球場で、町民や近隣の町村からの大勢の観客で賑わい、お祭りさわぎのようでした。今も続いているのでしょうか。

参加チームはほとんどが町村の代表で、選手は青年団を中心に、学校の先生や魚屋、薬局のおじさんたち同好者の集まりでした。どのチームにも一、二人の人気選手がいて、一挙手、一投足にひときわ大きな拍手や笑いが湧き起こったものです。

試合の合間には、バックネットのてっぺんに取り付けられたスピーカーから当時の流行歌がボリュームいっぱいに鳴っていました。歌のほとんどが美空ひばりの歌でした。そのせいか、今でも若いころのひばりの歌を聞くと、あのにぎやかな野球大会を思い出します。

この校庭に隣接する東洋電機成松工場の構内を会場に、博覧会が開かれました。昭和二十四、五年の頃だったでしょうか。そのころ全国各地で「復興博」とか「平和博」と称する大小の博覧会がブームでした。

成松の博覧会が何という名称だったか覚えていませんが、特設ステージでは、連日漫才や踊りの興業があり、日高澄子と宝塚歌劇団の数人のショーも見ました。また、いろいろの展示が並んでおり、子供心にはとても華やかな催物でした。

展示の一角に野球のコーナーがあり、当時巨人の川上哲治と並ぶプロ野球の大選手、阪神タイガース藤村富美男のユニホームやバットなど野球道具が陳列されていました。

何度も舐めるように眺めていた時、係のおじさんが薄いクリーム色のユニホームを着せてくれました。まさに天にも昇る心地でした。でも、大きいこと、僕のからだが三、四人はスッポリ入るようでした。あまり大きくて、胸のTigersの文字も皺になって見えません。バットは例の物干竿で胸までありました。グラブは使い古されたものだったのか、皮が硬くなった縦長の手袋型のものでした。

こんなこともあって、ますます阪神ファンになりました。一リーグ時代の阪神は夢のある強いチームでした。

後年、川上さんには二、三回仕事でお世話になりましたが、昭和三十六年のことは忘れられません。監督として初優勝の年です。年末に巨人軍の多摩川グランドで出演交渉をしたのですが、「球団からもいわれているから出演はするが、質問によっては答えられないよ、それでよければ」。まさに「哲のカーテン」の始まりでした。番組が終わって、司会役の榎本健一さんが「川上さんには参った。やはり、しゃべってくれなかったね」とこぼしていました。

その後、監督を辞められ「NHK少年野球教室」で出会った時は、にこやかに、優しく指導されており、V9までの監督稼業がいかに大変なことだったか改めて感じた次第です。

三つ子の魂百まで。野球少年のころの阪神タイガースの打順や守備位置、背番号などは今もそらんじています。

それにしても最近の阪神は何とかならないものでしょうか。スポーツも多種多様になり、プロ野球の醍醐味も薄れてきているのでしょうが……。それだけに、敗戦で貧しくても、底抜けに明るかった、あの輝くような野球少年のころが夢のようです。

「おじゃみ」の唄

佐藤菊子（氷上町）

緑の山々に抱かれた丹波の里に、私は誕生しました。その頃の社会は幼児期・学童期を通して戦争、そして敗戦という激動の日々でした。

戦後は大阪に、やがて結婚、夫の転勤で岐阜に住み、つい

でここ東京都国立市へと移り住みました。ここはどの地よりも長く二十六年目になり、第二の故郷となりました。

ここ国立市は、「文教都市」・「住宅地」といった、おしゃれで静かな都会的なイメージと、山こそありませんが、畑・果樹園・水田など田園風景も兼ね備えた、丹波の生活を懐かしく思い出させてくれる情景がそこここに残っています。田圃の畔道などを散歩して野草を持ち帰り、庭の隅に植えたりして楽しんだりしてます。

桜の頃、大学通りでフラワーアレンジメントのクループと

古くからこの地に住んでいる人達は、銀座等に行くことを「東京に行く」と言われます。「えっ！　ここは東京なのに」と他から来た者は一瞬思ってしまいますが、交通も今のように便利ではなかったころを知る人達にとって「銀座」や「新宿」は憧れの地『東京』だったようです。ましてや東京以外に住む者にとって『東京』は遥か遠い憧れの地であったのかも知れません。

ご承知のように、五十数年前の丹波の地は厳しい戦時下にありました。「欲しがりません勝つまでは」の軍国少女だった私たちにも素朴な楽しみがありました。「まりつき」「おじゃみ（おてだま）」などは代表的な遊びでした。これらは『遊びうた』が付いていることが多いのですが、その歌の言葉の意味が良く分からないものが結構ありました。私たちはそんなことにはお構いなく耳で聞き覚えたままを、口を揃えて歌い、技を競い合いました。

お心あたりの方もあろうかと思いますが、歌の言葉の意味が良く分からないものの一つを（多分聞き覚えの不正確なものだと思いますが）次に記してみます。

おん　さかさか　あかさかどう
よつやのどう
よつや　あかさか　こうじまち
かいどう　ずっといったなら
おかごで　いくのは　いくらでしょ
もちと　まからんか　まからんでしょ
てんから　わくのは　てんのみず
したから　わくのは　しみずとゆう
ひいや　ふうや　みいや　ようや……
ここのつ　かえして　おしろのさ

丹波で歌っていた頃は、さっぱりわからなかった「よつや」「あかさか」「こうじまち」が東京に来てみて、なんと「四ッ谷」「赤坂」「麹町」の地名であることが初めてわかったのです。そうならば、この歌のあらかたの意味は分かってきます。

この歌は言葉からして「東京弁」であり、古い言葉で歌われているところから戦前からのもののように思われますが、どのようにしてこの歌が山深い丹波の地にもたらされたのか、また、その頃の人々はどんな思いでこの歌を口ずさんだのでしょう。……『東京』に、それとも『お江戸』に思いを馳せて歌ったのでしょうか。

ふるさとって何だろう

鴻谷　正博（青垣町）

昨年十月、久しぶりに訪れたフランクフルト中央駅から、ベルギーの友人に待合せの電話をした時のことでした。

「ドイツ側のアーヘン駅で待っています」――。アーヘン?、はて、どこか遠くで聞いたような気がする。そうだ、たしか高校一年の地理の時間、大槻隆先生の「はい、地図を開いて。あーへん町がここにある……」というあのくだりだ。楽しい授業のハイライトシーンが三十年の時間と遥かなる空間を飛び越え蘇ってきました。

教育というのは根が深いものだということをつくづく考えさせられました。青年期の諸問題について何かと相談させていただいた気鋭の由良琢郎先生、古き良きワセダを彷彿する荻野辰雄先生など、故郷といえば、高校時代の懐かしい恩師の姿に想いを馳せることが屢々です。

さて、その本当にあったアーヘンですが、ルール工業地帯の鉄鋼都市なので京浜臨海部のようなゴチャゴチャしたイメージを抱いていたところ、この目で感慨をもって眺めた印象は、洗練された大変美しい都市でした。駅のスタイルは欧州特有

の終着駅のそれではなく、JR駅のような階上プラットホーム型だったのが意外でした。先年、ロンドンに駐在していた頃、何度となくドイツを訪れてはいたのですが、いつも航空機利用のトンボ返りのため、アーヘンの存在に気付かなかった次第です。

フランクフルトの休日、想うは見果てぬ青春の夢……

ところで、私にとって、今年ほど故郷を意識することはありません。毎夜、テレビで幼友達の勇姿を目にすることができるからです。キョーちゃんこと、近鉄バッファローズ監督佐々木恭介君は昭和二十四年、佐治町中町の佐々木理髪店の長男として生まれました。快活な性格により、佐治保育園の頃から人気者でした。原っぱで石を投げて鳥を落としたり、池で小魚を釣っていてウナギを釣りあげるなど、人の出来ないことをいろいろとやってのける少年でもありました。足が速かったり、相撲が滅法強かったのも印象的ですが、本人の名誉のために敢えて付言しますと、勉強も良く出来たと思います。

バットを振るようになったのは小学三年の頃からと記憶しています。とにかく打球の鋭さ、ボールを遠くへ飛ばす力は天性のものがあり、何度も度肝を抜かれたものでした。青垣中から本格的に野球に取組み、柏原高での強打者ぶりは県下で知られ、東京の大学からも誘いがあったようですが、進路として富士鉄広畑を選びました。そして都市対抗優勝、橋戸賞受賞と素質が一気に花開き、社会人四年目、ドラフト一位で近鉄に入団しました。天才的打撃職人・張本勲選手と競って首位打者を獲得したり、近鉄初優勝、連覇に貢献したことなど、その後の活躍は多くの皆さんのご存じのとおりです。

昨年末、近鉄監督に就任するというニュースを目にした折

は、キョーちゃんの実力、統率力が高く評価された結果でしょうが、本当に自分のことのように歓喜しました。長嶋、王、野村、上田、星野、藤田平、東尾など他の監督を引合いに出すまでもなく、野球王国日本でプロの監督になるというのは大変稀有なことです。選手の頃は自分自身の成績を気にすれば済んだわけですが、監督の場合は全試合の勝敗の責任を負い、気苦労の連続かと思います。「よっしゃー」というのが流行語になるなど、前年最下位チームを率い、本当に良くやっていると思います。キョーちゃんが一年も長く監督を続け、名監督の仲間入りが出来るよう、郷友の皆様の熱烈なご声援をお願い致します。

丹波の黒牛・有田喜一先生、後継者として一層の活躍が期待されていた西山敬次郎先生（「鴻谷君、今度一杯やろうか」「あーいいですね。何杯でも、ぜひ……」という約束も果たせぬままでした）――。いずれも故人となられ、中央に郷里の代表がいないのは些か寂しい気もします。

しかしながら、政治、経済至上の時代から、平和で成熟の時代を満喫する現在日本で、わが郷里が世に送り出した代表が、豊かさの関与するスポーツのプロ野球監督というのは、時代の先端をいっていて、なかなか洒落ていると思うのですが、いかがでしょうか。

いや、やはり強がりかな……。

二つのふるさと

伊藤　富士子（氷上町）

「ふるさと」それは優しく、あたたかい、響きを持っています。私は今、丹波にはほど遠い、みちのく仙台に住んでおります。もう二十年余りが過ぎてしまいました。ビルと欅並木の美しい街です。丹波で過ごした年月よりも長くなりました。五年ぐらい前だったでしょうか、『山ざる』誌が送られてきました。会員の方の活躍の様子、丹波の出来事、郷友会のこと等、耳にすることがなかっただけに大変に懐かしく拝見いたしました。また表紙を飾るほのぼのとした絵にしばし丹波の風景を重ね合わせ、あついものがこみ上げてきたのを覚えております。

私の生まれ育った氷上町（葛野町）も山や川、田園のひろがる、のどかな美しい山村です。高校卒業までの十八年間、この自然と生活を共にしました。小学校五年生の夏、終戦を迎えるという大変な時代でした。その当時は学校では野山を開墾して芋作り、雨の日に教科書をひろげるという晴耕雨読の日々でした。B29が澄みきった青い空に吸い込まれるように、山のかなたに飛んでいったのを今も記憶にあります。物

不足の中、我慢を強いられながらよく働き、よく学び？だったように思います。それもはるか昔のこととなりました。

郷里を離れたのは、柏原高校卒業その春のこと、東京での学生生活を始めました。田舎娘の私には都会での生活に馴むにはいろいろと戸惑いもありました。それからというもの現在に至るまで丹波に帰り住むこともなく、四十年余りが過ぎてしまいました。ふり返ってみますと悲喜こもごもの日々が足早にかけぬけて行ったような思いが致します。夫の転勤で

大阪、博多、仙台と南から北へと大移動したものです。丹波とは遠くなるばかりで「ふるさとは遠きにありて想うもの」を実感する日々となりました。大阪は親しみやすく、元気づけられる街、博多は美しい空と海、博多弁の心地よいひびき、九州人の明るさ、そして仙台、その土地、土地でのすべての出会いが新鮮でした。今もその時の思いは大切にしております。ここ宮城も丹波と同じように自然に恵まれ、二年前、鬼首（オニコウベ）というところに出かけた時のこと、梅雨の最中、丹波によく似た風景に出会い「山間の　梅雨の雨ふる宿にして　遠くに白き　雨柱見る」こんな拙い歌をよんだものです。両親が亡くなってからは、丹波に帰る機会もなく墓参りに丹波入りする位で、毎年の帰郷もままならずですが、帰る度に村の様子も少しづつ変わり、ペンションやゴルフ場ができ、県外の車も行き交い、また民家も新しく建て替えられ住む人の世代も変わり時の流れを感じてしまいます。

でも私が朝な夕なに眺めていた高倉という山は今も変わらず、切り立った岩や古木が墨絵のように美しい姿を見せてくれています。

背戸に立ってこの山を眺めながら、姉や妹や弟たちと語らう時が本当にふるさとに帰ってきたのだなあと思うときです。

若かりし頃はふるさとに対してあまり気にもとめず、出身地を聞かれても「兵庫よ」とか「宝塚の近く」とか淡々と言っ

ていたものです。還暦を過ぎた今、「ふるさと」という文字や言葉が目につくようになったのは年のせいでしょうか、それとも丹波氷上が遠いせいでしょうか。生まれ育ったふるさと丹波、そして移り住んだ大阪や博多や仙台を、もう一つのふるさととして、この「二つのふるさと」をこれからも心の友として大切にしてゆきたいと思っております。

すばらしい絵に飾られた『山ざる』誌をふるさと共々私の宝物の一つとして、また心のよりどころとなりますことを念じております。

「郷土研究」耳よりな話

徳田　八郎衛（柏原町）

皆さん、郷土の歴史や文化財に関する書籍をお持ちですか？出版元は概して神戸新聞社、場合によっては柏原の中井書店といった小さな本屋さんです。関東はもちろんのこと、大阪や神戸の大型書店でも見付けるのは難しい。何しろ毎週一〇〇〇点余りの書籍が刊行される今日、すぐ売れていく本でないと「土地一坪、金一升」の貴重な店頭に置いてくれません。もちろん地方史を専門とする書店も僅かながら神田界隈にありますが、たいていが古本屋です。

だから「産地直送」で入手される方はともかく、一般には帰郷して書店へ脚を運ばない限り、この種の本にお目にかかれないのです。とはいえ、慌ただしい帰郷の際に書店へのんびり立寄れないし、寄れても置いてあるのは漫画、雑誌、ビデオばかりという店が少なくありません。こんな障害を乗り越えないと巡り合えぬ郷土研究の本です。一読して「まずまず」と思ったら是非買ってあげて下さい。何しろ発行部数が少ないので価格は割高ですが、採算ギリギリの出版です。

読破したが書庫が満杯で置けない方は、関東氷上郷友会懇親会へお持ち下さい。出席者は、もともと郷里への関心が強い方々です。プレミア付きとはいかぬまでも、誰かが引き取って下さるでしょう。早目に事務局に知らせ、丹波産稀本（？）の広告を懇親会案内状の隅に記載してもらえれば、なお結構。流通機構の発達した今日、黒豆や山芋は郷友会や県人会へ行かなくても買えますが、先述のとおり地方出版物は入手し難いので喜ばれ、会の活性化にも繋がるでしょう。

そして書庫に余裕があれば、絶版となるまでしばらくお持ち下さい。絶対数が少ないだけに年とともに値打ちが出るも

のもあり、優れた著作だと発売価格以上で取引きされます。逆にベストセラーズなどは沢山出回り、公立図書館にも十分備わっているので、古本となると初版でもない限り二束三文で哀れなものです。それが何より証拠には、この五月末にスーパー丹南店主催の古書・中古レコード掘出し市チラシに載った価格表の一部を御覧下さい。

松井拳堂「丹波史年表」　五、〇〇〇円
松井拳堂「丹波人物史」　六、二〇〇円
朽木史郎「篠山城石垣符号の研究」　一二、〇〇〇円
朽本史郎「古城のほとり―兵庫城跡紀行―」　二、五〇〇円
近藤健二（柏原）「一無政府主義者の回想」　三、八〇〇円
「田健治郎伝（柏原）」　昭九　二八、〇〇〇円
深尾須磨子「丹波の牧歌」　昭一〇　一三、〇〇〇円
「大西滝治郎（青垣）」　昭三二　八、〇〇〇円
杉本捷雄「丹波のやきもの」　昭三八　一二、〇〇〇円
島田清「高源寺と弘厳和尚」　昭三九　六、〇〇〇円
上村六郎「丹波布縞帳」　昭三九　一三〇、〇〇〇円
中西通「古丹波」　昭四六　六、〇〇〇円
「丹波戦国史」湿跡・函汚れ　昭四八　三〇、〇〇〇円
兵教委「兵庫県の民謡」　昭五一　五、〇〇〇円
兵教委「兵庫県の民族芸能」　昭五六　六、〇〇〇円
「篠山町百年史」　昭五八　一五、〇〇〇円
小松忠雄他編「氷上郡の文化財」平一　一〇、〇〇〇円

すべての書籍が一〇年で倍以上に高騰したわけではないから、利殖のつもりでお買いなさいとは薦めませんが、いかに良書とはいえ「丹波戦国史」が、しかも湿ったり汚れたりしたのが二〇年で三万円になるとは私も想像しませんでした。同じ頃に出た「日本沈没」のようには売れなくても、古書となるや負けないほどの値打ちが出るというのは皮肉なものです。あの宮沢賢治も、生前出版できたのは二作だけ、それも自費出版だったとか。人は「棺を蓋って事定まる」が、本も「絶版となって事定まる」のでしょうか。

〈新刊書のお知らせ〉

中野拓郎ほか「丹波の祭と民族芸能」
神戸新聞総合出版センター発行、一、三〇〇円

故郷を離れて四十年

井本　馨（春日町）

過ぎてしまえば早いもの、歌の文句じゃないが、年月の過ぎるのは真に早いものである。

思い起こせば今から四十一年前、昭和三十年に柏原高校七回卒業生として卒業致しました。最初から小生は大学進学の

予定はなく就職を希望しておりましたが、近年同様、当時も非常な就職難の時代でした。特に田舎の高校出の勤め先はなかなか見つからず大変困りました。その年の七月までは家にいて百姓を手伝っておりました。都会に親戚縁者も少なく、ようやく友人の家の知り合いの人の世話で今の会社に入りました。

あの頃の交通機関は、大阪へ出るのに福知山線で三時間余りかけて、田舎を後にしたのを思い出します。田舎者で一人で家を離れた経験のない小生は、ホームシックにずいぶん悩みました。都会へ出てあの頃は田舎で食べたことのない、夜泣きラーメンとソフトクリームをよく食べました。なぜか、ラーメン屋の吹くチャルメラの音が妙に淋しく聞こえ、その都度田舎を思い出していました。

会社の仕事は、当初は材木関係で肉体労働が主でしたが、百姓をしていたのでそれは苦になりませんでした。あれから会社の営業品目も時代と共に、いろいろ変化し現在に至っております。その間、入社して一年大阪勤務し、東京へ転勤して三十九年間、それから名古屋へ転勤して十一年になります。名古屋へは単身赴任です。

社会情勢により、今でこそ小生のいる会社でも、盆休み、正月休みを各々一週間もとれるようになりましたが、当時は、盆休み三日、正月休み四日でした。日曜日も仕事したのを思い出します。東京勤務の当時は正月休みには、年末三十日まで仕事をして、夜行で帰郷の途につき、三十一日昼過ぎ家に着き、疲れてそのまま寝てしまい、元旦朝、親に起こされたのを思い出します。また正月明けで会社へ行く時も、三日午後、家を出て大阪からやはり夜行で東京へ向かいました。

新幹線が開通し、福知山線も汽車から軌道車電車へと発展しました。今日なら東京―大阪―田舎まで五時間余りで帰れるようになっております。また道路もいろいろでき、山奥の田舎に春日インターができるとは予想もしないことでした。工場があちこちにでき、田舎もずいぶん変わりました。百姓仕事も機械化で楽になりました。工場で働きながら百姓仕事をしているのが大部分のようです。牛を使って鋤・鍬で耕した百姓仕事は昔の話となりました。今でこそ車も一家に一、二台あり誰もが運転しますが、四十年前にはまさか自分も車を買い自ら運転するとは思いもしませんでした。いろいろなことの変わりようには目を見張ります。

この春、我々七回生の還暦同窓会があり出席致しました。四十年ぶりの友達もいて、お互いの変わりように共に笑いました。また全然変わっていない人もいましたが、楽しい一日を過ごしました。

日頃は名古屋にいる関係で、関東氷上郷友会の皆様とは疎遠になりがちで申し訳なく思います。

近況・エッセイ

小林隆之「幻想の壁（華）」
（青垣2001年日本画展 大賞・文部大臣奨励賞）

定年退職・静岡生活との別れ

坂本重雄（柏原町）

一九九六年三月末、静岡大学を定年により退職し、三十二年にわたる静岡での生活に別れを告げた。四月から東京都の八王子市に転居し、少しずつ都内での生活に慣れようとしている。八月の残暑のなかで、慌ただしかったこの一年間と、富士山を近くに眺めて過ごした三十二年間の生活を懐かしんでいる。

一、静岡の気候と風土

一九六四年、東京オリンピック開催、新幹線開通の年、日本列島が最大の歴史的変化を遂げたといわれるこの年、妻と生後間もない長女を伴って静岡大学へ赴任した。当初は東京での生活と比較して不満をもらしていたが、高度経済成長期に入り、次第に静岡の土地に暮らす利便、特に富士山と駿河湾を近くに望み、自然と風土に恵まれ、人情に厚い土地柄にとけこみ、四人の娘が育ち、三人は結婚し、三人の孫が成長している。

週四日は出かける研究室へは、自動車で七分、徒歩で三〇

分余り、新幹線の静岡駅まで車で一〇分である。生活時間のゆとりが地域や周辺の人間関係を豊かにし、生活を楽しむ習慣が身について、伊豆、山梨、富士山麓、浜名湖など、車を用いての旅行、合宿を重ねてきた。こういう生活ともお別れかと思うと、家族や知人たちと誘い合ってあちこちの見物に出かけていく。

二、テニスを楽しむ

三十八歳のとき、体調に不安を抱き健康対策からテニスを復活した。大学テニス部の練習に参加し静岡県の硬式テニス選手権（四十五歳以上壮年の部）で優勝して以降、六十歳近くまで公式試合に出場し、全日本都市対抗テニス大会にも県代表で五回参加している。学生硬庭部の顧問、静岡市テニス協会の理事、副会長を務め、年中、週二回平均テニスを楽しんでいる。静岡を去るとテニスが続けられるのかというのが最大の悩みである。静岡最後の年の記念にと、第八回全国健康福祉祭島根大会（ねんりんピックしまね、俗称「としより国体」）のテニス交流大会（十月二十一―二十四日）に県代表として出場した。都道府県、政令都市の計六三チーム（全二〇種目六十歳以上計五千人）が松江、出雲市に参集した。テニス試合はベスト8まで残ったが優勝チーム横浜市に敗れた。帰途、倉敷の大原美術館に立ち寄りマチスの絵に感銘をうけた。

三、住宅、転居の準備

住みよい静岡の地も定年退職となると、次の勤務先は東京地区に求めざるを得ず、八王子市での住宅設計、転居準備を定年二年前から開始した。書斎と書庫を最小限必要とする注文住宅のため、都内の工務店での打ち合わせに随分と時間をかけた。阪神大震災の経験から基礎工事と耐震建築工法などを特に依頼する。蔵書のうち、単行本、雑誌の三分の一以上を処分し、図書館、資料室、個人に寄贈し引きとってもらう。十一月初旬から図書や一部の家財を運び、三月末に全てを引っ越した。高齢期になっての転居は重労働と覚悟していたが、あとの片づけも大変なことである。

四、「高齢者介護」ほか研究のまとめ

最近の八年間、文部省科研費の交付を得て高齢者問題を学内十数名の協力で共同研究を行ってきた。愛知、長野、静岡の高齢者介護を現地調査した二冊目の研究成果の出版を企画する（『高齢者介護の政策課題』勁草書房A5判三六〇頁）。研究室の同僚たちから贈呈される『退官記念論文集』（静岡大学法経研究四四巻四号A5判六五七頁執筆者二十一名）に掲載される「略年譜・著作目録」（二五頁）の作成は三〇年

間の業績リストで作成に時間がかかる。退官記念事業会の厚意で『大学キャンパス三〇年』（B6判三一六頁）という私の随筆小品集が出版されたが、この編集はほとんど自分でやってみた。いずれも定年退職を記念して同僚たちが企画してくれた。

五、最終講義、退官記念パーティなど

二月一日、定年退職前の最終講義「社会法学三〇年」を行う（労働法律旬報一三八〇号一九九六年三月下旬号に掲載される）。同僚や卒業生、現役学生らの多くが参加され、少し緊張気味であった。この後三月を中心に四月初旬にかけて、学部教職員同僚による退官記念パーティ、ゼミ卒業生による送別会、大学からの永年勤続表彰、名誉教授の称号授与、そしてテニス関係団体の送別パーティなど二〇回をこえるパーティが開催され、同伴で出席した妻とともに定年退職の祝賀に感謝した。

近年、私立大学への再就職のため国立大学の定年をまたずに早期退職する同僚が増えている。私の場合、学部長など管理職を経験し大学改革の節目に在職した事情からなるべく定年を全うしたいと考えていた。そのため同僚や卒業生に余計な苦労をかけたが、今後の私の人生にとっては良かったと思う。

六、東京での通勤、八王子の野外散策

四月から、専修大学の法学部において社会保障法の講座を担当している。八王子の自宅から神田、九段下まで電車で通勤しているが久々の体験で楽しくもあるが、二部授業の帰りは、東京のサラリーマン族の苦労の一端を味わっている。まず慣れることが大切と、静岡の生活との比較などしておれず、一年間位は東京の生活、暮らしに身を委ねるしかない。週末は八王子市内、周辺を散策し、自然や史跡などをめぐりゆっくり歩いている。退職と転居で得られた余暇を大切にしたい。残暑のなか「終戦の日」を迎える頃はいつも、戦前期日本の歴史書が読みたくなる。引っ越し作業のとき再発見した原田熊雄述『西園寺公と政局第一―八巻、別巻』（岩波書店刊、昭和二五年）をこの夏休み中に、読んでみたいと思う。

いつも楽しく拝見させて貰っている『山ざる』から思いがけず寄稿のお誘いを頂きました。見本帖やカタログを一杯詰め込んだ重いトランク片手にいろんな国々を廻っていた若かりし日の想い出などを拙い筆で綴らせて頂きます。

続・焼きもの雑感

生田清弘（柏原町）

今回は私が見聞きした個性豊かな特徴ある陶芸家を紹介しよう。

焼きものに限らず作品にはそれぞれの作家の個性がよく滲みでているが、だからこそ面白くもあり、また楽しく、人の心をひきつけるのである。そして、その表現の度合いが時には強烈な印象を与えて、作品を見るだけで作者が誰であるか一目でわかるようになる。

いささか古い話だが、昭和五十九（一九八四）年の東急本店において、備前の浦上善次さんの個展が開かれた。これは店の開業五十年を記念した催事であったが、浦上さんの古希を祝うものでもあった。

浦上さんは、陶芸を西村春湖先生に、彫塑を北村先生に、また木彫を内藤伸先生について学ばれた経歴の作家で、独創的な感覚と見事な彫刻的造形美がいずれの作品にも強く表れ全体を際だたせていて、備前の伝統の中でも異色の存在だと感銘をうけたものだ。

展示された作品はロクロ物のほか、布袋香合や獅子香炉に代表されるいわゆる細工物も多く誠に多彩であった。月布袋や天拝獅子などを見ていると、その造形の妙、豊かな表情、焼き上がりの色合いが渾然一体となって感動的だ。思わず触ってみたくなる作品である。

備前の長い歴史の中で、細工物が登場するのは茶道が栄え、茶陶が盛んに焼かれた桃山時代といわれる。当時盛んであった細工物も、現在三百窯を超える備前にあって、ごく僅かな存在となり、浦上さんはロクロ、細工物を共にこなす貴重な作家なのである。

かつて広島を訪れたある日、通りすがりに東広島市西条にある木村芳郎さんの太祖窯を訪ねたが、お逢いできたのは好運であった。木村さんの作品に初めて出逢ったのは日本橋・三越であったと思う。その目の覚めるような鮮やかなブルーの焼きものが実に印象的であった。あとでわかったことだが、彼の作品の殆どがブルー釉薬を使ったもので、陶芸界では「碧釉の木村」といわれるほど有名だ。

作品をみるうちに、ブルーの色彩の爽やかさだけでなく、波や海を表現したものの多いことに気づく。瀬戸内海を見て育ち、陶芸を志す前には、ソ連、ヨーロッパ、中・南・北アメリカ、北アフリカなどを旅したというから、すっかり魅了された地中海やエーゲ海、カリブ海などの印象的な景色と色彩と、瀬戸内海の美しい姿を重ね合わせ、自らの取り組むべ

き作品のモチーフとして海を選んだことは容易に理解できる。広大な海の神秘的な表現とも、また深遠な宇宙空間ともイメージできる作品は、見る人に深い感動を与えずにはおかない。

木村さんの得意技の一つに「躍箆（おどりべら）」というのがある。これは生地に繊細なへらの痕跡をリズミカルに刻みつけていく技法だが、心に残る作品だと思う。

私の同窓に河合紀（ただし）という異才がいる。彼は「赤絵の卯之助」とか、「押葉文様の卯之助」と呼ばれた有名な河合卯之助先生の長男で、常に現状に飽き足らず、より新しい作品、新しい分野の開拓に精力的に幅広く取り組んでいる作家である。これも親譲りというべきか。

昭和六十三（一九八八）年に卯之助先生の登り窯が築窯六十年を迎え、登り窯還暦記念ということで窯の見学と同時に、卯之助・紀親子展が自宅で開かれた。卯之助先生が京都五条と向日町に居を移して「向日窯」と名付けたこの窯は、京式登り窯としては小さく三間からできているが、その頃は寄り合い窯が一般的であったというから、個人陶芸家の築窯はどんなに大変だったことか。紀氏によれば、煙公害に関する府の指導で焚けなくなってから二十余年（当時）、今日残存している登り窯は極めて少なくなり、直ぐに使える形では京都府下では唯一のものという。この世界にも公害問題が及び、時の流れを痛感した次第である。このような状況で、紀氏は仕事場である陶房を山科の清水焼団地内に移していたが、最近になって住居も移転したとの知らせをうけた。彼の窯は裏千家家元より「篁（たかむら）窯」の窯銘を受けている。

さて、作品のことだが、平成元（一九八九）年、日本橋・高島屋での作品展を見て驚いた。「今回は還暦も過ぎ若返った気分で安土桃山時代に思いを馳せ、金色銀彩の手法を深めた」というだけに、誠に色鮮やかな作品群に圧倒されたからだ。それぞれの作品の造形の素晴らしさとともに、配色が爽やかでセンスの良さがうかがわれ、時の過ぎるのを忘れさせてくれる楽しいものだった。

近年、中国をはじめアジア諸国に度々出かけ作陶活動を続けている彼だが、回を重ねるごとに作品の変化を感じているのはひとり私だけではあるまい。これも彼の情熱と旺盛な研究心の証であろう。紀氏は北京の中央工芸美術学院の客員教授を務め、中国の新石器時代から伝わる「黒陶」の技術を活かした作品も完成させている。土は山東省黒陶鎮のものを使い、独特のツヤ出しや焼成法などを数年がかりで研究した成果である。

彼の作陶範囲は広く、陶額、陶彫、陶壁や陶画などにも及び、最近になって、「陶画から帯の文様が生まれました。鳥、花、魚、蝶が伝統の織物で自在に表現され、われながらいか

すと、ちょっとご案内申しあげます」との案内状が届いたので早速見にいくと、彼特有の陶画が見事に西陣織に織り込まれ、その図柄といい、色彩といい大変ユニークな帯が並んでいた。年頃の女性には特によく似合うのではないかと思った。彼が意欲的に取り組んでいる分野に陶壁がある。昭和三十（一九五五）年に建築分野に陶芸作品の導入をはかってから今日まで四十年余の間に、実に様々な空間で、様々なデザインの作品を手がけている。自らの言葉を借りれば、「戦後早くから始めた陶芸で建築空間を飾る仕事も年々数を増し既に五百点を大きく越えた。それは官公庁の、ホテルの、事務棟のロビーであったり、食堂の壁面であったり、エレベーターホールや庭園と様々な空間を与えられて、それぞれの場所のあり方を教えられながらの仕事であった」と述懐している。彼の体付きからうける印象は豪放磊落、にもかかわらず緻密さを要求される仕事である。なぜなら、「土という不安定要素の多い素材を使い、出来上がりの色合いを整えながら、建築という枠組みの中で、ミリ単位の細密さを実現し一つの芸術作品として開花させなければならない」からである。

「関西の備前、関東の益子」といわれる益子は栃木県にある。嘉永六年（一八五三年）に大塚啓三郎氏が益子で初めて焼きものを作ったといわれている。今から一四三年前のことである。それが昭和を迎えて、柳宗悦氏等の提唱による民芸運動と、有名な陶芸家・浜田庄司氏を中心とする作陶活動によって、益子焼きの名声は「民芸の益子」として国の内外に広まっていった。やがて益子にも他でみられるように、本来の伝統を継承しながらも一方では新進の作家によって新しい試みが積み重ねられ、その結果、作陶思想や作品の多様化が進み、この傾向は、陶芸を志す人々の活発な交流や国際化の波とともに加速していった。

数々の陶芸家の中でも、第一人者はやはり今年、人間国宝に推薦された民芸陶器（縄文象嵌）の島岡達三先生である。私が初めて先生の窯を訪ねたのは、かれこれ二十年近く前のことであろうか。浜田邸の隣に窯があって、思いがけず窯出しにめぐりあい、大勢のお弟子さんの中に外国人も見かけて奇異に感じたことを覚えている。先生は昭和四十（一九六五）年前後には、特に海外活動を盛んに行われ、アメリカ、カナダ各地での個展や陶芸指導をはじめ、アメリカでの大学夏期講座や、オーストラリア政府の招きによる文化交流、さらにはヨーロッパ各地を回るなど広く国際交流に務められたので、今から思えば外国人の弟子入りも決して不思議ではない。先生は復員後、浜田庄司さんの門に入られたが、その浜田さんは、一九二〇年、二十六歳の時にイギリスに渡り、バーナード・リーチ氏と作陶生活を共にし、その後、リーチ氏も度々来日するなど親交を深めた間柄なのである。

島岡先生の作品は、人間国宝・浜田庄司さんの民芸精神を発展させ、独自の縄文象嵌技法を開発したことで内外によく知られている。組紐を器面に転がして押痕をつくり、化粧土を埋めていく方法であるが、組紐の着想は先生の父君が組紐の名人であったからだろう。私は先生の作品の中でも特に塩釉縄文象嵌というのが好きだが、色合いも良く仕上がりも上品で落着きがあり、みる目がない私ごときがこのように言えば誠に失礼だが、まさに島岡芸術の極致と言うべきものだと思う。

バーナード・リーチといえば、陶郷丹波（立杭）の市野茂良さんという働き盛りの、丹波を代表する作家と深い関係である。市野さんには二、三度お目にかかっているが、いずれも阪急や三越での個展の時だった。市野さんの父君は丹窓（丹窓窯）といい、戦後丹波焼きの復興に貢献され、また筒描で有名な陶芸家である。市野茂良さんは、昭和四十（一九六九）年にバーナード・リーチ氏の招きにより渡英して研修を積みながら、フランスで作陶指導を行ったほか、ロンドンをはじめ各地で作品展を開くなど約三年半の留学を経験した。市野さんによれば、「英国の留学を通じ、その中世陶器より注瓶（ピッチャー）、スリップ文様、塩釉などの技法を学ぶ貴重な体験と思考の機会を得て、私にとって何物にもかえ難いことであった」と。

民芸運動の柳宗悦と浜田庄司、浜田とバーナード・リーチと市野さんというように考えてくると、これらの出逢いやつながりは得難いことであり、こうした背景のもと、丹波に新風を起こし、現代生活に活かせる新しい丹波焼の器をめざして、日夜意欲的に精進している市野さんの姿には全く敬服するのである。

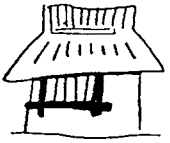
個性的な作例のひとつにスリップ模様があるが、これは土が生乾きのときに櫛目を入れて羽状斑を現わした独特の技法で、器面を飾る文様は平行線を描き大変美しい。また白丹波と称する白釉を使った作品があり、これの窯変ものは簡明で、しかも何とも言い難い深い味合いがある。塩釉の片口や鉢物などは食卓を飾るにふさわしい、美しくて楽しい器だと思う。

平成六（一九九四）年、日本橋・三越での個展の際、市野さんご夫妻にお逢いし、しばしの間歓談したが、その人柄の性であろうか、同じ丹波ということもあってか、身近な親しみが湧き、いつの間にか話題が今田町や柏原のことにも及び、多忙の中迷惑をかけたのではないかと反省している。

昨年は作陶三十周年に当たり、梅田・阪急で記念の個展を開かれた。

PHP文化フォーラム「埴生の宿」

吉住　自由造（春日町）



私は三年前、喜寿を迎えたのを機に会社を退社しました。幸い健康に恵まれ、まだ働けそうなので、商売のような営利目的の仕事ではなく、実用的でないものがいい。そうして思いついたのが、文化同好会「埴生の宿」でした。

私はPHP研究所の社会活動本部のご承認を得て、平成六年一月一日に「PHP文化フォーラム埴生の宿」を発足いたしました。

埴生の宿の原題はHome, Sweet, Homeで英国の作曲家ビショップが作曲したもので、全世界に知られた名歌曲です。

埴生の宿は「土で造った貧しい小屋、みすぼらしい家」という意味ですが、この邦訳の歌詞は「貧しい小屋に住んでいるが、自然の美しさが我が家を飾っている」という意味が込められています。

私は現代の科学技術万能、消費文化が爛熟期に入り、さまざまな憂慮すべき事態が起こり、人間性が喪失されつつあるような気がしてなりません。今こそ人間本来の姿に立ち返り、原点に戻って、貧しくとも、自然を愛し、心豊かな、楽しい生活を心掛けねばと思い、「埴生の宿」と名付けました。

この会の目的

文化を探求し、会員相互の親睦を図る。

この会の活動内容

(1) 書道、絵画、彫刻等の美術作品を鑑賞および試行。
(2) 文字、演劇、音楽等の芸術作品の鑑賞および試行。
(3) 文化に関わる講演会、研究会、見学会等への参加
(4) 文化的遺産、歴史遺跡の探訪。
(5) スポーツその他文化事業への参加と鑑賞。
(6) PHPが推進する思いやり運動への参加。

この会は文化活動に深い理解と情熱を有する文化人であることを入会の条件にしています。

この会は不偏不党、政治、思想などに関係なく、常に公平、中立の立場にあり、これらを本会に持ち込むことを禁止します。この会を商売に利用したり、利益誘導行為は禁じています。

現在の会員は、男性二十四名、女性十六名の四十名です。会員には、医師、イラストレーター、オペラ歌手、写真家、

書道家、彫刻家、陶芸家、弁護士、漫画家などのプロフェッショナル。学校理事長、会社社長や幹部の方々。主婦で趣味豊かな文化人によって構成されています。

この会は各種の文化行事への参加と、本会独自の企画、実践をしています。月報「埴生の宿だより」を発行して、会員の動静、会員の文化活動の報告、文化に関する寄稿等を発表しています。

PHPとは〝Peace and Happiness Prosperity〟の頭文字で「物心両面の調和ある、豊かさによって、平和と幸福をもたらそう」という意味が込められています。

私たちの信条

一、素直な心でみんなに学びましょう
一、素直な心で考え、話し合いましょう
一、素直な心で行動しましょう

五つの誓い

一、すすんで人の話を聞く心を養いましょう
一、人に甘えず、自主的に考え、自力で行動しましょう
一、公私のけじめ、時間のけじめをつけましょう
一、お互いの約束事は必ず守りましょう
一、人に親切にし、思いやりの心をもって互いに許し合いましょう

ヨーロッパ汽車の旅

松山　裕（東京都）

今回、思いがけず『山ざる』編集部から寄稿の依頼をいただきました。私は実は氷上出身ではなく、いわば二世です。父（松山幸逸）が、長年氷上郷友会のお世話になり、また『山ざる』の初代の編集担当者でしたので、そのご縁で会員に加えさせていただいております。

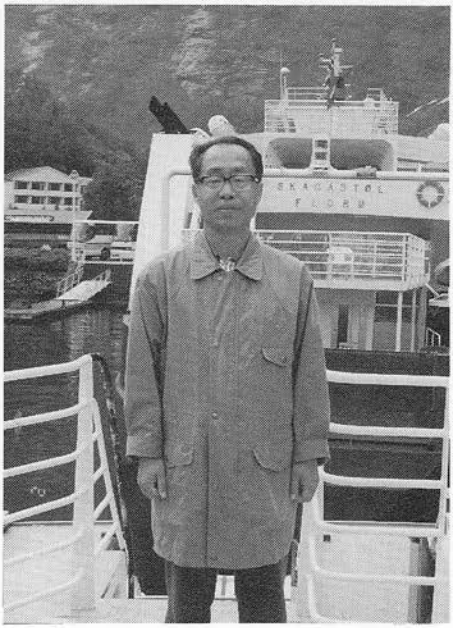
というわけで、私の近況と最近の私の海外旅行の話を書かせていただきます。

私は昭和五年生まれで、現在六十六歳になります。六年前定年で会社を退職し、現在は技術コンサルタント事務所所長という肩書きを勝手につけて、技術関係（工業計測と制御）の執筆活動や、時たま頼まれるコンサルタント的な仕事をしております。

技術記事や技術書の執筆は、正直なところ、経済的にはあまり引き合う仕事ではありません。多くの時間と費用（調査費や参考文献の購入費等）をかけても、収入としては僅かなものです。しかし、自分の書いたものが本になって書店の棚に並び、それなりの評価を受けることは喜びであり、いわば

生き甲斐になります。いままで個人名での著書は四冊出版し、今後も数冊書くことを予定しています。

定年退職後は毎年一、二回ヨーロッパやアメリカへ旅行しています。この旅行は、大体いつも右記の執筆活動に関連した展示会・学会などの調査と各地の観光を兼ねています。これらの旅行は、一度妻を案内してヨーロッパへ行った時以外はすべて単身です。ホテルは必要最小限しか予約せず、いわば気ままに各地を廻ります。ヨーロッパ内の移動は鉄道がある所はすべて鉄道を使い、飛行機は使いません。鉄道は多少



時間はかかりますが、スケジュールが自由にとれ、かついかにも旅行しているという気分が味わえます。時間に余裕のある人にはおすすめします。

では、最近の旅行のなかで、一番長かった一昨年のヨーロッパ旅行について簡単に書いてみます。

一昨年は五月末から約一か月、フランス・ドイツと北欧を廻りました。ヨーロッパ内の移動に使ったのは、ユーレールパスだけでした（鉄道がない所で、バスに乗ったことはありますが）。ユーレールパスは、御存知の方が多いと思いますが、ヨーロッパの大部分の国で、特急を含め一等車乗り放題の切符です。一か月間でおよそ九万円ですから安いものです。

この時の旅行では、まずアムステルダムに入り、あとパリ三泊、ついでTGV（フランスの新幹線）でリヨンへ行き、そのあとストラスブールを経てフランクフルトへ。ここはこの時の仕事上の主な目的地だったので六泊しました。次いでハンブルグ・コペンハーゲン・夜行列車各一泊を経てストックホルムへ。この間は列車でと連絡船に二回乗ります。ストックホルム一泊後、また夜行列車で北上して北極圏のキルーナへ入りました。ここでは沈まない太陽や夏の雪（一時かなり降りました）を体験したり、世界最大の地下の鉄鉱山などを見学しました。

次に汽車でノルウェーのナルビックという港町に出ました。

ここは第二次世界大戦で、ドイツ軍と連合軍の激戦があった所で、その時の記録が戦争博物館に残っています。ナルビックの駅はヨーロッパ最北の駅であり、ここで鉄道を使って北緯六八度二六分の地に到着したという証明書をもらいました(有料)。あとはノルウェーを南下してノルウェーの京都ともいえるトロンハイムに一泊、さらに南下してオスロに入り、翌日はノルウェー第二の都市ベルゲンへ行きフィヨルドと旧ハンザ同盟都市としてのベルゲンを観光しました。あとオスロに戻りましたが、もろ観光シーズンに入りホテルがとりにくかったので二泊で切り上げ、南下してスウェーデン第二の都市ヨーテボリに入り、ここから飛行機で日本に戻りました。

この全行程は約七〇〇〇キロ、一部のバス区間以外はすべてユーレールパスを使ったので交通費の追加は僅かでした。

なお、写真はベルゲン近くのフィヨルドの船上でとったものです。

この時の旅行は、あちこち歩き廻ったので足の豆がひどくなり閉口したり、夜行寝台が全然とれず二回座席車で夜明かしたりなどありましたが、いろいろな体験ができ楽しい旅でした。

いまだから言える
丹波育ちの告白

藤原知徳(氷上町)

今年春まだ浅いころ中国へ旅をした。

北京から曲阜まで特急の夜行列車に乗った。成田を飛び立ったのが昼前である。何故か、その朝、トイレに入ったが催さなかった。飛行機はパキスタン航空。イスラム圏だからアルコールは出ない。機内食もたいしたものでない。持ち込みのウィスキーを呑んで過ごした。北京へ着いたら、もう日は暮れていた。夕食は、ご多分に漏れず北京ダックの店に入った。美味かった。鱈腹食べた。

汽車は寝台列車である。日本の列車と比較するのはよくない。ウトウトしたかと思うと大地震である。目が覚める。疲れているから「どうでもなれ」と、またウトウトする。大地震と思ったのは、列車が駅で停車したり、発車したときの揺れである。窓の外がほんのり明るくなってきたころ、漸くあのほうが催してきたのである。列車内のトイレは平素から嫌いだが仕方がない。心を決めて出かけてみると、軍服姿のよ

うな乗務員の若い女性が便所の前の椅子に腰かけている。門番？　である。こちらがトイレに入るとガチャーンと鍵を掛ける。さぞかし綺麗なトイレと思われるかも知れないがトンデモない。汚いこと、汚いこと、ついに便座に坐ることはできなかった。我慢するのはつらいものである。

曲阜について朝飯にホテルに入った。そこで用足しをしようとしたが、便座がベットリである。丁度、その日は同ホテルに投宿することにしていたので無理をいってルームトイレでやっと満足した。

むかし、丹波のトイレも悲しかった。

子供の頃、洋式トイレは知らない。トイレットペーパーなんて知るよしもない。農家の個室の隅には小さな箱が置いてあった。中には「押し切り」で切った藁が揃えてある。後始末のペーパー代わりである。それが新聞紙となりチリ紙に変わっていった。

田植えのときには、あちらの田圃、こちらの田圃で、早乙女の「立ション」いや「中腰ション」というのかな？　よく見たものである。珍しくも恥ずかしくもなかった。私が新米記者のとき、息子が戦死した近所の親しい小母さんが氷上町から靖国神社へ参拝に上京してきた。ボクは日本橋の三越に案内した。そのころ三越の男子トイレは長い溝で朝顔はなかった。小母さんは女性トイレに入ったと思っていたのに、ボクの立ションの横にきて、向きを反対にキモノの裾を少し引き上げ中腰でジャーツとやりはじめた。アーッ!!　ボクは恥ずかしいやら……声もでなかった。

中国のトイレに個室のドアはない。台湾のトイレはドアの下がまるみえである。……というボクも洋式トイレの使い方を知らなかった。上でしゃがみ込んだことがある。それも中国の現代の農村ではなかったろうか？

ネパールのカトマンズのホテルでは、背が低いのでどうしても朝顔まで届かずに困ったことがある。ネパールは英国の影響でホテルの設計が背の高いイギリス人の身長に合わせてある。子供用には台が置いてあった。

最後に、農村のメキシコ人たちは伝統？　を守っていて面白い。日本の海外途上国援助金で、部落ごとに共同トイレが造られている。だが、あまり使われていない。彼女たちは新築のトイレのかげで隠れて用を済ませている。それを家畜の豚や鶏がつついたり、喰ったりしているのだから、動物の飼育にもさまざまな人間模様があるものである。失礼……。

私のライフワーク

可部　美智子（柏原町）

前日に焚き上げた窯はまだ熱い。窯の蓋を少し切ると熱風が吹き出して来る。皿やら壷の蔭に微笑みを返してくれる人形。時には少々泣き顔の子もいる。期待と怖れの交錯した中で窯出しを待つ。

私と「俑」との出会いは、上野の博物館で中国の出土品の展観があり、その時に見た「舞楽人」がきっかけとなった。群雄割拠の中国のあの時代にいろいろな悲しみ、悩みを押しかくしつつ、楚々として楽しそうに踊るその姿に、今にも音楽が聞こえてきそうな生々しさに息を飲んだ。

「俑」とは、古代中国の副葬品として墳墓に埋められ、主人の死後の世界の護衛のため、殉死に代わり人形（ひとがた）を作り埋めた。出土する装身具、食器等にその時代を物語るものとしてその貢献度は高い。しかし、見るものの心を凍りつかせるものがあるのも事実で、私はこの「俑」たちを何とか死の世界から、現在の地上の世界に踊り出させてはと考えた。黄泉の暗黒から陽の当たる場所へのいざない、人々の心に温かさ、優しさとぬくもりを呼びかけることができたらと、急かれる思いで創った。意外に反響があり、以来二十年創り続けている。初めは美術館を歩き必死に写した。その後は日本の神話、民話、童話から題材をとったり、普段見聞する子供達の情景を、また万葉集、古今集の世界へと創作範囲を拡げていった。現在は子供の情景に魅せられ、いかに「子供」を表現出来るか努力の真只中にいる。何といっても最後に目鼻を入れる時は、その子の動きが止まってしまったり、急に生き生きと話しかけて来たり、悲喜交々きびしい瞬間といえる。成形、乾燥、素焼、施釉、焼成の工程を経て、一二五〇度の火の中より誕生するのである。窯に向い「どうぞ、良いお顔で生まれて来てね」と祈る。十七年前、四十五歳でお釈迦様の遺言の教えである「大般涅槃経（だいはつねはんきょう）」を説く方に、相まみえる幸せを得た。そして、その御教えの正覚に生かされ、御仏の「真理（みち）」の一端を会得させて頂くべく努めている昨今である。人類、地球、宇宙を救う大乗利他のみ心を作品の中に練りこみ、人々に幸せを少しでも分けることができるなら……と。

もし私が邪念の中で制作したらと思うと怖い。小手先の技では、人の心は納得させられないし、感動を呼ぶことは到底不可能である。

私は窯出しした作品に一つ一つ、一人一人に声をかける。「ごくろうさま、今後とも宜しくね」とあちらこちらと散ら

上宮太子（聖徳太子の幼名）

ばっていく子等に、お願いをし、エールをおくる。大袈裟かもしれないが、「行った先でその方の人生の伴として、幸せを差し上げてね」と祈る。その時、私の子供達は上目づかいに微笑み返してくれる。

私と「俑」との出会いが、なぜか先祖の期待と、その徳力のお陰ではと思える時、身震いする程嬉しく、感謝の念が、また新たな制作へと向かう原動力となるのである。あの「俑」との出会いが、私に「ライフワーク」を授けて下さったのだと思う時、あの薄暗い美術館の一室のあの俑たちの風情が眼の奥で鮮明な映像となって迫ってくる。

（陶芸家）

実践「ヘルシー朝食」について

井本義一（柏原町）

一、受皿等……底の深いオードブル皿がよい。冷蔵庫内の最上段を左記の食品（単品）置き、専用にすると便利。

二、前記オードブル皿の一番下に盛る野菜類（前夜又は早朝に刻んでもらったものを密閉出来るタッパーウェア等に入れ、キチンと蓋をして冷蔵庫に格納）。自分の適量を前記の受け皿に出して、残りは明日以降分としてそれぞれ当日の朝取り出して盛りつける。

◇キャベツ　◇ニンジン　◇キュウリ

◇カイワレ大根　◇ピーマン

三、右記の野菜の上にのせるもの（毎朝、自分で考えて盛りつける。）

◇板チーズ……一枚を指で、ちぎり全面におく。

◇昆布（煮）まめ……スプーンで二杯を全面におく。

◇醤油漬にんにく……四～五個を全面におく。

◇らっきょ……四～五個を全面におく。

◇ビビンバ……箸で二つまみを全面におく。

◇ひじき豆……箸で二つまみを全面におく。

四、ふりかけるもの
◇ノンオイル（青じそ）ドレッシング……全面にかけ過ぎないようにさっとかける。
◇すりごま……黒ごまをごますり器で八〇回位、前記の盛りつけたもの全般にかかるように充分に擂ってかける。
◇かつおぶし……一パックか半パックを全面にかける。
以上を混ぜて食べる。
五、右記を食べながらのスープ
◇インスタントのコーンとポタージュスープを日替わりで。
六、最後の締めくくりとして温かい米飯で。
小さい子供用大の飯わんに二しゃもじ位を軽く、ゴマ昆布、昆布たくあん、梅干一ヶで食べ終える。

以上が足掛け十年、実践しつつ稿を改めること今回で六回目、親戚、親しい友人、同窓の諸君に配ってみたこともありました。
馬齢を重ねるに従い、量は多く食べられませんが、（それでも前記のもの全てで、かなりのボリュームになります。）一日三十品目以上摂取を目標として、朝食で前記の品目（いいことには特に高価の物もない。なお目が飛び出るほど高価の物も、そうでない物も胃に到達すれば皆同じ。）数を稼げば、昼食（勤務先の賄い食堂の日替わりメニューで）と、夕食時の酒の肴類に加えて、納豆、牛乳、鶏卵、果物等で充分目標数値オーバーとなります。

以下、健康情報過多時代の今日、重複するかも知れませんが、この拙文テーマについての考え方を自分なりに列記します。
(1) 良質の石油、石炭と同じで毎日毎朝の積み重ねで、特に朝食の充分（それは高価で美味ということでもありませんが、ある程度の満腹感は一日のやる気を生み出してくれる）が肝要であること。
(2) 早寝、早起きのくせづけ。私の場合、勤務が月曜から土曜までで、毎朝乗車駅まで出るのに、家を五時三十分に出るので、前夜は平均して九時前後に就寝し、他の家人（一人しかいないが）は、朝の四時前は当然のことながら就寝中で、シャワー、入浴、髭剃り等のあと、前述の盛りつけ作業をセルフサービスでやるので、とにもかくにも早起きしないとゆっくり食べられないのです。
(3) このささやかな私の実践では、ともすれば軽視されがちな快便を重視しています。
(4) ご承知のとおり、繊維食品は体内に吸収した塩分を体外に排出する作用を持っています。
(5) 朝から、かなりの満腹感でハッピー。毎朝食べられるあ

りがたさと、楽しみと。（例えばこの夏の時期、食前酒としてウィスキーグラス一杯の梅酒とか）

(6)その他、今年になって仕込んだ健康食品情報として、①野菜をはじめとする多種類の食品摂取は歯の健康上からもよいこと。②胡麻の中に「セサミン」という成分があって、これが悪玉コレステロールをやっつけて、善玉コレステロールを増やす働きをする。ビタミンAと一緒にとるとなおよい。③昆布（海藻）類は癌細胞をやっつける。

拙文の総括として、年がら年中、何がしかの家計支出の資金繰りに追い廻されている。しがない薄給人生、月給取り人生、頼みの綱は夫婦そろって健康こそ。また、高度成長時代の一先兵としての経験等を生かし、現職務を自分なりに満足感をもって完遂することこそ、何よりのストレス解消法なりと割り切っています。その上で、改めて毎度野菜を刻み続けてくれている妻に感謝の気持ちで一杯。

単純に回りくどく考えないで自分にとってよかれと信じたことは、即実行主義で、その上で古今東西にわたるあの名言を噛みしめています。

曰く「継続は力なり」

楽しく動いてダイエット

植木　十和子（山南町）

年齢とともにつきはじめたお腹の周りの脂肪が気になり、フィットネスクラブに入会した。

月・水はプールでの水中歩きとアクアビックスを九〇分、土・日のダイエットエクササイズは筋肉トレーニングと足にハイドロをつけ、手にハンドブイを持って水中を歩いたり、走ったり、跳んだりして九〇分の運動をする。水中で動き回るくらいのことは簡単なことのようであるが、足につけているハイドロに浮力があるので、なかなか思うようには出来ない。年齢や身長にも関係しているのだろうが、私の場合プールの浅いところはともかく、中心付近の深いところでは、首まで水がくるので、下腹に力を入れて踏ん張っても足がプールの底に着く前に浮き上がり、転びそうになることも度々である。そんなとき、若いつもりでいても体は正直なんだなぁーと思い知らされる。

七月七日は七夕スペシャルコースということで一二〇分間縄跳びをした。「大波小波」や「郵便屋さんおはがきが落ちました」など五〇年以上も前の子供の頃に遊んだ縄跳びその

ままである。初め縄跳びくらいと高をくくっていたが、「郵便屋さん」では二枚拾ったところで足がひっかかってしまった。全員（六人）跳びでは三〇回が目標だが、思ったより難しい。最初二〇回くらいまではともかく、二十五回を過ぎると歯を食いしばり、三十回過ぎるとヤレヤレと思った途端、足が動かなくなる。どうしてこれくらいのことが出来ないのだろう、ほんの二〇センチほど跳び上がるだけなのに情けなくなる。

ダイエットの基本は「楽しく動いて、楽しく食べること」ということで、箱根ハイキングに参加した時のことである。芦ノ湖から駒ヶ岳・神山・大涌谷へのコースで、歩く時間は四時間余りということであったので、これなら大丈夫だろうとダイエットコースの人たちと共に参加した。

ところが、歩き始めて間もなく、私たちが思っていたのとは大違いであることに気がついた。道は細くて急な上り坂のところもあり、一時間余り歩いた頃には膝がガクガクして、足が思うように動かないのである。痩せ我慢をして、平気そうな顔をしていても実際は足が痛くて、来たことを後悔しながら人の後についていった。

しかし、山頂に着いた時、太陽に青々と輝く駿河湾、相模湾、芦ノ湖の素晴らしい景色を一望して、「ワーッ、きれい！」と久しぶりに感動しました。広々とした景色に吸い込まれて今まで苦しかったことを一瞬忘れてしまった。しかし、おいしい空気を吸ってお弁当を食べた後は下山しなければならない。これはのぼりよりも足にこたえた。途中より神山への道をとり、また細い山道を登って行く。ストックを借りて何とか頂上まで到着。ボーッとして腰を下ろしている時、千葉のフィットネスクラブより参加された方が熱いお茶をくださった。そのお茶の美味しかったこと、今も忘れられない。

神山よりの下山は、足が痛いうえに道が悪くて、靴がツルツルと滑り、「こんな調子では大涌谷まで着けるだろうか」と、とても不安で心細かった。しかし、まだ私より後から来ている人もいるのだからと思うことによって自分自身を励まして歩いているうちに、どこからともなく硫黄の臭いが流れてきた時「助かった！」と本当に嬉しかった。

初めて参加したハイキングは苦しかったけれども、駒ヶ岳山頂からのすばらしい展望、箱根連山の夕焼け、人との出会いと暖かい思いやり等、忘れられないことが沢山あり、また次のハイキングにも参加したいと思っている。ただし、つい年を忘れ若い人たちと同じつもりで自分を過信するのは少し反省する必要がありそうだ。それにしても、「楽しく動いて、楽しく食べよう」がモットーでは、私のダイエットが成功する日はまだ遠い先のことかもしれない。

コーラスは不老長寿の特効薬！

飯田光雄（青垣町）

「人間は唯一の歌う動物である」などと言うと、小鳥や虫だって美しい声で歌っていると言う反論が聞こえてきそうですが、小鳥や虫の鳴き声は、あくまで本能的な営みで、人間が勝手に歌っていると感じているだけのようです。歌ったり、聴いたりして楽しむことが出来るのは、やはり人間に与えられた特権のようです。

柏原高校に入って初めてコーラスと出会い、その楽しさ素晴らしさを知り、大学でもグリークラブで青春時代の良い思い出を作ることが出来ました。社会に出ると仕事に追われる毎日で、三十数年間たまに学生時代の仲間と歌うぐらいで、すっかりコーラスから遠ざかっておりましたが、人生の終着駅が見え隠れする年齢になり、さてこれからどのように人生を楽しもうかと考えるようになり、またムクムクと頭を持ち上げてきたのが、合唱をやりたいという気持ちでした。現在の所に引っ越したのを機会に地元の合唱団に入ってサビついたのどをふるわせております。

専門的なことはわかりませんが、歌うということは大変健康に良いようです。腹式呼吸は脳を刺激し、まわりの音を聞きながら歌うことにより自律神経が刺激されるそうで老化防止には最高のようです。カラオケも一曲歌うと百メートルジョギングしたのと同じ効果があると言われています。

最近は暮れになると、あちこちで『第九』が演奏され初めての人でも気軽に参加出来るようになりました。皆様も第二の人生の黄金期を一コーラスに挑戦して若々しく過ごしてみませんか、多くの仲間と気持ちを合わせて曲を歌い上げるときは、まさに感動そのものです。いつの間にやら還暦も過ぎてしまいましたが、これからも末永くコーラスを楽しみたいと思っております。

騙し、騙されて

足立正美（青垣町）

今時、こんな話をしても信じてもらえるかどうか。

打った瞬間、カッーンと充分な手ごたえ、打球はレフト方向へライナー性の当たりで飛んだ。バットをほうり出し走り出そうとした背中に、「ファール」「ファール」「ファール」キャッチャーの大声に足を止めてしまった。実際にはボール

はラインぎりぎりでファールとなってころがった。きわどい球で、もし内側に入っていれば、長打となり劣勢を一気に挽回したかもしれない場面であった。その後の経過は忘れてしまったが、ダマサレタ！　という初めての経験と悔しさは、昭和二十四、五年の暑い夏の日の少年時代の出来事として今なお鮮明である。山深い青垣・小倉の純朴な胸に成松のグランドで、「生き馬の目を抜く」都会の生き方を学んだ。

時は移り、テレビ番組美術デザイナーとなってから、スタジオに、秋に桜の花を咲かせ、夏に凍りつく雪山を、江戸城から高層ビル、長屋からマンション、ありとあらゆる場面創り、時代はよりその時代らしく、地方色はよりその地方色を感じさせ、見えるように、まさに観る人の目を欺くことのため工夫し、各種のテクニックを駆使するのが職業となった。あの時のことが教訓となった理由ではない。というのも実生活では結構あの時出し抜かれたなあと思うことが少なくない。そのことを見抜ける知恵も、もう少し賢い生活術も身につかないまま定年を迎えてしまった。卒業してしばらくしてから昔の仲間やら元の職場から仕事の依頼が来始めた。「俺より若くて腕の良いのがいるぜ」と言っても、「是非に」と頼まれる。持って生まれた愚鈍で要領の悪い生き方もありのまま続けていれば、信用とか信頼というか強い力とか財産に変わるのかなと感じたりしている。しかしフリーの立場での仕事は並大抵ではない沢山の苦労を抱えることは目に見えている。衰えを隠すことが出来ない肉体と精神を、どのように騙して立ち向かえるのか、今大きな試練に直面している。

（元ＮＨＫ映像デザイン部）

だれにもできる無財の七施

堀　井　隆　川（山南町）

貧者の一灯という言葉がある。

ありあまる金持が楽々と出す布施よりも、貧者がまごころこめて出す僅かな喜捨の方が尊いということである。

そのもとは、阿闍世王（あじゃせおう）が、霊山にお帰りになる釈尊のために、その道すがら限りない灯をともして供養した。一方、王舎城の町に住んでいた貧しい老婆があり、この話を聞いて、せめて一灯でも献じて仏のいられる世に生まれた幸せを感謝しようとしたが、お金がない。そこで、自分の髪の毛を油屋へ売って油を少し買い、一灯を献じた。ところが、その夜大風が吹いて富者の灯は消えたが、不思議なことに、わずかばかりしかない老婆の一灯は消えなかった。そのことを貧者の一灯というのである。

要は真心の布施である。布施ということは、どんな人にも出来るのである。しようと思う心一つである。釈尊は、そこで金のないものにもできる「布施行」をお経に説かれている。

それが無財の七施である。

一、眼　施

目は心の窓である、と日蓮聖人もおっしゃっておられるが、眼を施すということである。目の玉をくりぬいて施すということでなく、やさしい目をして人を見ることである。法華経第二十五に「慈眼視衆生」とあるが、いつくしみにみちた眼のことである。

二、和顔悦色施

日蓮聖人が身延山におられたとき、一人の青年が何もなくて親に孝行が出来ぬというと、「親の顔を日に三度見てほほえめ。」と教えられたが、ニコニコと太陽のような顔をすることである。法華経に「衆生喜見如来」ということばがあるが喜びにあふれた、見ると明るさがわくような顔をすることだ。

三、言辞施

法華経に、言辞柔軟とあるがそれである。一言が人を殺しもし、一言が人を生かしもする。一時、オアシス運動というのがあったが、言辞施の一つである。

オ――おはよう、おやすみなさい

ア――ありがとう

シ――失礼します

ス――すみません

実行したいものである。

四、身　施

人に喜んでもらいたいと生きることである。三月、眼科へ入院中、Kさんの奥さん、Yさんの奥さん、娘さんが食事をはこんで下され、「これは魚ですよ、これは卵ですよ、これは野菜の〇〇ですよ」と説明までして下さった。私の入院中、お寺の境内を掃いて下さったり、お水をお供え下さった方があるが、これが、そのまま身施である。

五、心　施

たとえ財産がなくとも、「無財の七施」という施すものがあるんだよと教えられるのも心施の一つである。物の施しをしても相手が肩身の狭い思いをしたら、施しどころか罪悪である。施しをしても恩にきせる心があったら、心施とはいわれぬ。喜捨でなければならぬ。

六、床座施

安らぎをあたえること。電車や、バスで席をゆずることもその一つ。居心地のよさを与えるということは大事なことである。ここに来たら「安心」していられるし、何でも心おきなく話すことができるといった環境、そういう雰囲気を与え

ることである。

七、房舎施

思いやりのあたたかさ、心の軒を開放して、人に言えぬことなど相談にのってあげるのもその一つである。一夜の宿、雨やどりだけではない。難儀している人に心から安堵を与えることである。

とかく施しをすることはむずかしい、けれども仏教とは施しの行である。施しのできる人間になりたいものである。

戯れに歌を作りて入選す

余田　功（市島町）

昨年の六月に三十二年間勤務した住宅・都市整備公団を退職し、公団時代の大半は設計部門を歩いていた関係から、㈱日匠設計という建築設計事務所に代表取締役社長として迎えられた。まだこれから十年ぐらいは頑張りたいと思っている。

考えてみれば一生を建築界で過ごすことになる。よく、自分の作品が後世まで形として残るのだから羨ましい職業だと人に言われた。言われれば確かにそう思うし、密かに誇れる仕事も残っている。しかし、初めは特に好きで進んだ道ではない。小学校から高校まで好きな学科は国語と社会科であった。理科はあまり好きではなかったが、大学に進学するときには工学部を選んだ。確かな技術を身につけようと思ったのである。そしてたまたま入学できた大学に建築学科があったのである。自分の好きな文系とはあまりにも遠い電気学科や機械学科は選ばなかった。しかし、もしその大学に土木学科があったら土木技師になっていたかも知れない。

就職後は、自ら志望して、もっぱら構造設計に携わってきた。建築設計には大きく分けて意匠と構造との二つの分野がある。それぞれが専門化している。意匠はいわゆるデザインであり、芸術や人文科学の世界である。一方、構造は建築物の骨組みの設計であり、純粋に自然科学の世界である。構造を志望したのは、意匠を確かな技術とは思えなかったのである。すなわち、デザインのように優劣の根拠が曖昧で頼りないものに自分の一生を託す勇気がなかったのである。

若い時には構造だけやっていれば済んだが、職場での地位が上がってくると気ままは許されない。昭和五十七年に設計課長に任ぜられて建築全般を見るようになったが、構造より

も意匠の方がはるかに面白く、長年構造ばかりやっていたことがなんだか損をしていたような気がしたものである。大学進学時の工学部の選択と言い、若い頃の構造志望と言い、振り返って見れば自分の貧乏性が可笑しくもありまた情けなくも思う。

ある同級生から子息が大学の芸術学部を出て画家を目指していると聞いた。彼は、自分は好きな道に進まなかったので息子には好きなことをやらせてやりたいのだと付け加えた。貧乏性は私だけではなく、あるいは私達世代の多くが捕われていたのかも知れない。少し救われたような気がした。同時に、豊かな社会になったものだとの感慨を抱いた。

仕事の上では第二の人生を迎えて気持ちと時間の余裕ができた。これからは趣味の範囲で好きな道にも少しかかわってみようと思っている。

今年のゴールデンウィーク初日のことである。特に行楽の予定もなくて少し朝寝坊をし、起き抜けにテレビのチャンネルを廻していたらNHK衛星放送の短歌大会が目にとまった。視聴者から作品を募り、ファクシミリで送られてくるものを著名な歌人が選んでいるのである。いわゆる視聴者参加番組である。詠題は「燕」と「若葉」であった。

私は戯れに短歌を作っていた。特に作歌の勉強したわけでもなく、まったくの我流である。今までに作ったものを全部数えて五十首もあろうか。一応ワープロに打ち込んである。ただ、短歌を読むのは好きである。私が短歌に目を開かれたのは高校一年生のとき、国語乙の授業であった。真新しい教科書の最初のページは万葉集の

あかねさす紫野行き標野行き
　野守りは見ずや君が袖振る　　額田王

むらさきの匂へる妹を憎くあらば
　人妻ゆへに我恋ひめやも　　大海人皇子

であったことを覚えている。

たまたま自作五十首ほどの中に「燕」も「若葉」もあることを思い出した。戯れの戯れにファクシミリで送ってみた。五時間余の長時間番組であったが最後まで見ていた。番組の最後に、五人の選者が二〇首ずつ、一〇〇首選ばれたが、その中に、なんと！　私が送った作品が二首とも入った。思わず飛び上がった。最後の最後に入選一〇〇首の中から特選二〇首が選ばれたが、さすがに特選には入らなかった。

私の入選作は

積丹は海と山との会うところ
　霧の流れに海燕舞う　　（馬場あき子選）

かつて一度君に迫りしことのあり
　けやき若葉の美しき夜　　（岡井　隆選）

第一首は、北海道へ出張したときに足を延ばして観た風景

を詠んだものである。今にして思えば〈積丹は海と山との会ふところ霧の流れに海燕舞ふ〉と旧仮名づかいにした方がよかったかなと思っている。第二首については、「君とは誰だ、誰かとそんなことがあったのか」と訊問されるのであるが、そのつど次のように答えている。「しょせん文芸はフィクションの世界。殺人経験者でなければ推理小説を書けないということはあるまい」。

実は第一首もフィクションである。私は積丹半島へは行ったことがない。小樽郊外の鰊御殿を見下ろす岩山で見た風景と積丹のイメージをモンタージュしたものである。公団退職を機会にある俳句の会に入会した。毎月一回の句会を楽しみにしている。短歌に比べて俳句への関心は薄かったのに、なぜ短歌ではなくて俳句なのか、説明するのは難しい。誘ってくれる人がいた、それが一番大きな理由であろうか。

古書店めぐり

本城英明（氷上町）

「あなたの趣味は何ですか？」と質問されたときには、「古書店めぐりが私の趣味です。」と答えます。

趣味と言えるかどうかは別として、古書店めぐりをしていることは、事実です。

私は全く個人的に日本性格心理学史を研究している関係で、それに関連する本を探す目的で古書店めぐりをはじめました。いざ古書店を一軒、一軒のぞいてみますと、私が求めている分野以外の本の書名を見ているだけでも、実に多くの私の知らない世界がそこにはあることを、あらためて感じ取りました。それからというもの、今日はどんな本と出会えるのか、どんな世界と出会えるのかと楽しみになってきました。そのうちに古書店めぐりが習慣のようになってしまったのです。

私が古書店めぐりをするところは、神田書店街（主に専修大学駅前から三省堂書店の範囲）とJR高田馬場駅から地下鉄東西線早稲田駅までにある書店街です。

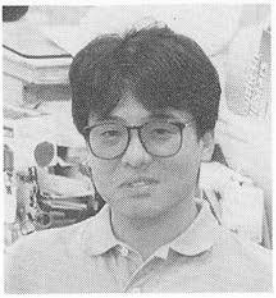
最近は新刊書の数が実に多く、価格も以前よりも上がっているので、日本性格心理学史関係の本をすべて私個人が購入するのは、私の経済上困難となりました。それでも、いつものコースをトコトコトコトコ二十年間歩いていますと、昭和五年以降昭和四十八年以前に出版された日本性格心理学史関係図書は、八〇パーセント近く揃えることが出来ました。さすがに神田・新宿書店街だと思いました。その他にも興味のある多数の本を購入しています。

私は、文筆家でもなければ、学者でもないので、本を読ん

だからといって、論文を書くのでもなければ、本を読んで何かを文章にまとめることもしません。にもかかわらず、小遣いの中から購入する本代を生み出し、手元にある本が増えるごとに、自宅の床が抜けるのではないかなどと思いながら、休日になると、ついつい神田・新宿の書店街へと足を向けてしまうのです。

不思議な気分

井　徳　正　吾（氷上町）



この原稿を書いているつい一週間程前、アトランタオリンピックに沸くニューヨークから、仕事を終えて帰ってきました。

ニューヨークを歩きながら何度も思いました。そしてその度に不思議な気持ちになったのです。ニューヨークを歩いている自分と、あの丹波に育った自分とがどうしても自分の中でひとつのまとまった像を結ばないのです。それはいくら考えても決して重なることがなく、いつまでたっても溶け切らない、水の中の氷砂糖のように不可思議なこととして残り続けるのです。自然が豊かと言うのは美化した言い方で、実は自然しか褒めるものがない丹波の山奥に十八年もいた自分が、こうしてニューヨークの摩天楼で仕事をしているという感覚は、それはそれは不思議な感覚で、そう思う程に、益々自分の中の二つの像は乖離していくのです。

私が育ったのは、丹波は氷上町の沼で、北小学校まで歩いて四キロ一時間、氷上中学まで自転車で六キロ三十分、柏原高校までは自転車で十四キロ一時間といったところです。そんなド田舎に育った高校生までの私には、ニューヨークなど別世界で、口にすることさえ殆どなかった都市でした。それがどうしたというのでしょう？　今では、「マーキースなんてオノボリさん、ミレニアムの方がヒップだね」などと業界特有の言葉を口にしながらホテルについて喋っています。「モーガンズも最近イマイチ」という言葉に相槌を打っている私は、大学二年までホテルに泊まったことさえなかった私だし、ソーホーのイタリア料理店について論じている私は、大学に入ってもナイフとフォークが怖くて、いつも和食ばかり注文していた私でした。

今、私は博報堂という広告代理店に勤めています。

博報堂と言ってもご存じない方が多いでしょうから少し紹介します。もし自慢しているようにみえたらゴメンナサイ。博報堂は社員数約四千人、売上高六千億円の広告代理店です。昨今人気も高く、今年など採用八十名のところに六千名の大学生が押しかけた程でした。業務内容を言うと、単にテレビや新聞・雑誌の広告を作るだけでなく、PRの仕込み、新製品開発、パッケージデザイン開発、イベントのプロデュースやゲームエンターテイメントの制作、映画会社との共同映画制作など、活動領域は多岐に亘ります。また経営コンサルタント的な依頼も多く、つまるところ、企業活動のあらゆるサポートを行うのが業務と言っていいでしょう。

そんな中にあって、私は戦略を立てるマーケティングセクションに所属しています。仕事柄、企業のトップと話す機会も多く、打ち合せをしながら、一方で、あんな丹波のド田舎生まれの私が、新聞によく登場するこの社長と今話し合っている、と内心驚くのです。タレントと会っている私は、二十数年前までテレビの向こう側から別次元の人としてタレントを見つめていた私だし、仕事の合間に赤坂プリンスでお茶している私は、高校卒業まで喫茶店など入ったことさえない学生服姿の私です。カットハウスでシャンプーしている私は、十八歳まで石鹸で頭を洗っていた丸坊主の私だし、リンスの存在さえも知らない小さな禿を気にしてばかりいた私です。

時代の先端を行くと人から言われる広告会社(実際はそれほどでもないのですが)、そしてそこに勤める私は、時代の最先端とは無縁のあの丹波のド田舎の、マスコミなど環境の中にあろう筈がない田舎に育った私なのです。よくぞまあ、あんな丹波育ちの私がこんな仕事をしていられるものだ、と自分でも感心してしまう程です。そして今日もまた、田舎者であることをオクビにも出さず、私は涼しい顔をして時代のトレンドについて喋っていることでしょう。

異常接近(ニアミス)

池田　忍(山南町)

「あのー、松本サリン事件は誰がやったと思いますか?」

隣の席の学生風の若い男は、突然、耳元でささやくように聞いてきた。

「……」

事件が起きたのは、この年の夏のこと、あれから何か月も経っているのに確たる犯人も浮かばない、それどころかもう忘れかけようとした事件のことだ。とっさに答えられず、口ごもっていると、相手は用意していたように、

「あれはね、国家権力が自衛隊にやらせたんですよ」
と事も無げに言った。
「えっ！？　そんなバカな」
「いや、ほんとですよ」
「じゃ動機は何なのかね？」
今度は相手が口ごもり、しばし沈黙。
「君らね、若い時は何でも国家権力の犯罪のように言うけどね……」
少々酔いにまかせて、自分の若かりし頃に思いをはせて、よけいなことを言ってしまったが、今の若者はそんな昔風の「反権力」思考もあまり通じないようだった。

見ず知らずの若者と、電車の隣合わせの座席で、こんな会話を交わすまでには少々込み入った経緯があった。
その日の東京駅始発の帰りの電車は、すでに満席であった。四人がけの席の窓側に、その若者が座り、隣に大きなバッグを置いている。だれか連れのために座席を確保しているのだろうと思い、その側に立った。やがて発車時刻になったが連れは現れず、バッグが座席を占めたまま新橋駅、品川駅へと停車して行く、そのたびに乗客がどっと乗り込み、通路は押し合いへし合いになる。その中でバッグの席だけがポカンと空いて、異様な空間を作り出している。周辺の乗客だれもがその空間に目を注ぎ始めた。だれが指示したわけでもないが、その空間に対する責任者は自分のように思えてきて、品川駅を発車したあたりでその若者に声をかけた。
「コレ、君のかい？」
「ハイ、そうです」
「じゃ、座ってもいいんだね」
「どうぞ」
とは言ったが、バッグはそのままだ。
「このカバンをどけないと座れないじゃないか」
彼は、しぶしぶ自分の膝の上にバッグを引き取った。よほど大切なものが入っているのか、網棚に載せようともしなかった。
私も少々酔っ払っていたし、衆人環視の〝正義の戦い〟でもあったので、強気に声を張り上げた。
「君、それでも人間か！」
ここまで言った以上、自分がこそこそと座るわけにはいかない。隣で立っている人に席を勧めたが、「どうぞ、どうぞ」の応酬になるばかりで、せっかくの席が立場を失うばかりになり、仕方なく当人が座ることになった。
興奮一方はこちらの方で、若者は特に悪びれた様子もない。座ったそばで、
「君は、どうして人を思う気持ちがないんだい？」

こんな非情な若者が育ってきているのかと、暗澹たる気持ちでいたので、余勢を駆って聞いてみた。その時の答えはこうだった。

「人がそういうことに、どれだけ耐えられるか、試したかったんです」

アゼンボーゼン、その答えに返す言葉はなかった。

しばらく沈黙が続いたあと、若者が突然のように話題を切り換えてきたのが、冒頭の会話となった。

私が下車するまでの小一時間の間に若者はすっかり打ち解けてきた。別れ際に「ひとり旅をするなら人情に触れて、いい旅をしろよ」と言うと、「これから宗教活動で大阪の方に向かうんです」と、こちらが勝手に思い込んでいた「若者ひとり旅」幻想にがっかりするような答えを返してきた。

それから四か月ほどした翌年の三月、地下鉄サリン事件が起きた。そして、次々に起きた奇怪な事件とともにオウム真理教の正体が浮かび上がってきた。

前年の六月二十七日に起きた松本サリン事件は、第一通報者が犯人に仕立て上げられたまま、当人の警察やマスコミに対する孤独な闘いをよそに、世間はすでに事件を過去に葬っていた。ましてや「犯人さがし」などに関心を持つものはいなかった。

そんな折、見ず知らずの者に「犯人は誰か」と聞いてきた、あの若い男はいったい何者であったのだろう。事件が迷宮入りの様相にあることに慢心して、世間をからかいたくなったのか、あるいは世間の反応を試そうとしたのか、犯罪者の心理を推理することもできる。

もちろん、あの若者がオウムだとは断定できない。しかし、混み合った車中で平然とカバンで座席を占め、「非情であることに平気」になれる心と感情は、シャバの人間をポアの対象として、悪魔の修行（マインドコントロール）？によってしか得られないものだと思える。最近の若者の行儀や礼儀は目にあまるものはあるが、普通の親に育ててもらった人間なら、あそこまで非人情・非常識にはなれないからだ。

蛇足かもしれないが、車中の男が向かった先の大阪で、間もなくしてVOXによる殺人事件が起き、それもオウムのしわざだった……。

原稿募集

本誌は、会員皆様のご寄稿により作られております。どんなテーマでもかまいません、奮ってご応募下さいますようお待ち致しております。

■原稿締切りは**平成9年8月20日**まで。

〒一〇四 東京都中央区明石町2－16－206
ホンゴー出版内『山ざる』編集部・池田

短歌

大野　すゞ子（山南町）

孫二人の結婚

母亡くして育ちし孫の婚の日のこの晴れ姿に胸あつくおり
明る日は嫁ぎゆく孫に思ほへず鯛祝くるる魚屋うれし
嫁ぎゆく孫の古靴積まれあり勤めの日日の汗に汚れて
幼名を正して呼ぶに戸惑ひぬ嫁ぐ日近くなりきし孫に
姉妹（いも）に結婚仕度気遣へば最も簡素にすと潔し
嫁ぐ子の宴の裾に身をかたく所在なく居り初老の息子
孫二人嫁がしめたるこの朝け小雨に青葉の揺らぎ止まざり
孫嫁ぎ責（せき）のごときも脱ぐ心地独り粗屋にこもる謐さ

雑詠

参道の並木に沿へる七夕の丹柵ゆらぐ小雨灯りに
梅雨深く曇りの下に清々し白百合の咲き紫陽花のさく
紫陽花の藍の露けき花毬に生まれしばかりの蟷螂歩く
老いの身の凝りほぐさむと出でたてば金色の月葉桜の上
江戸絞り紅萩と札つきたるを八幡平の土産にもらふ
忍野（おしの）なる湧水に生ふるクレソンの瑞々と匂ふ箱を開くれば
熟睡（うまい）より覚むれば夢の残像のごとく幽かに雨の降りいる
東雲の空にかかれる残月の異様に紅し心慎む

俳句

余田　功（市島町）

阪神淡路大震災調査

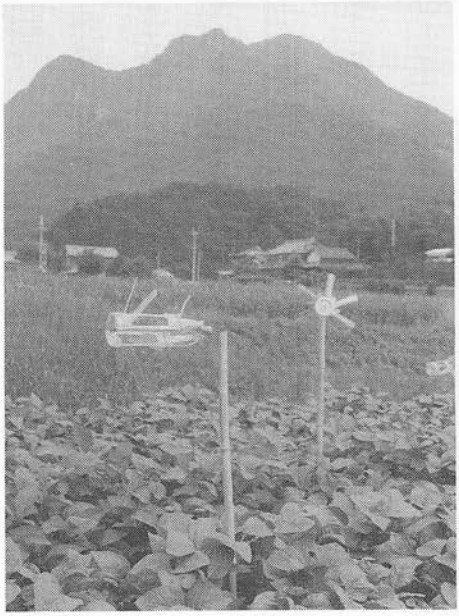
地獄図の余燼に冷雨降りしきり
寒月に余燼眠らず震災地
焼跡の冬の薄日の影法師
寒月や被災地の君どこに寝る

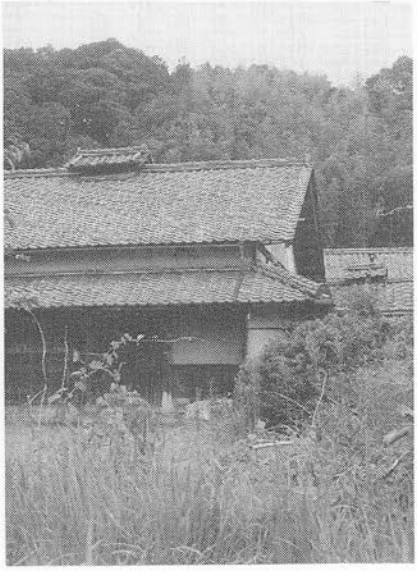
徳田　八郎衛（柏原町）

旅路

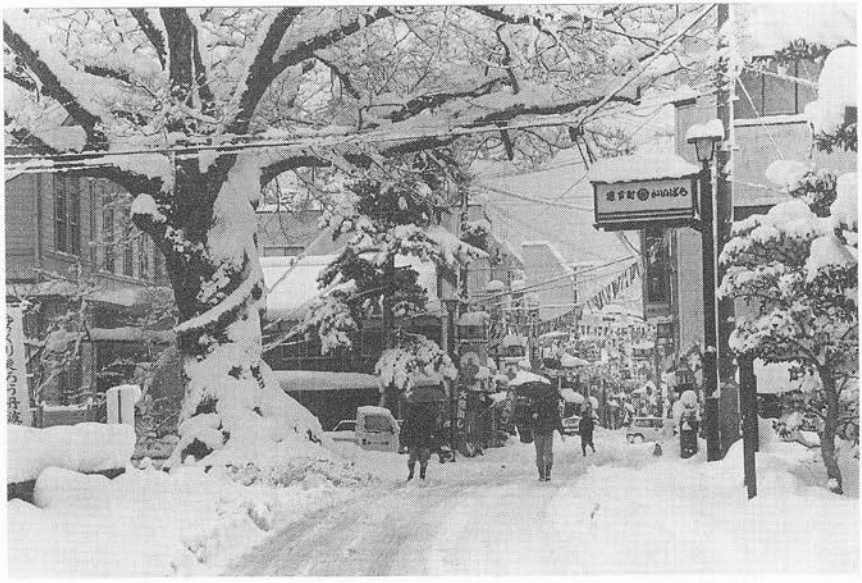
われを迎ふホワイトハウスの雪の庭
梅匂うゲティズバーグの砦にも
子も辿る道炎天のメキシコへ
われも和すここシチリアの舟唄に

丹波を撮る





（上）三つ尾山と最近のかがし
（右）柏原町北山の旧Ｔ邸〈徳田八郎衛撮影〉



丹波のホワイトクリスマス〈平成７年12月25日、丹波新聞社提供〉

昭和八年の丹波新聞

小田晋作（柏原町）

三十年間勤めた日本経済新聞社を退職し、このたび故郷の丹波新聞社の社長に就任致しました。地方のミニコミ経営は、マスコミとは違ったしんどさも面白さもあると思いますが、創刊以来七十年以上に及ぶ地域の皆さん、出身者の皆さんからの信頼を大切にし、一層面白い紙面作りに努める所存です。関東氷上郷友会の方々も叱咤激励を下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて、弊社には一九二四年（大正十三年）の創刊号以来の新聞紙面が全て保存されています。この〝資源〟を活用すべく、平成八年九月から「昭和『八』年『九』月の丹波新聞」という連載を始めることにしました。

この『山ざる』記事がお手元に届く予定の十一月には「昭和八年十一月」とタイトルが変わっているはず。つまり昭和の年月を現在の平成の年月に重ね合わせて、常に六十三年の間隔を置きながら、丹波新聞の紙面から当時の丹波の様子を探るという試みです。

いま（八月二十日）、九月分の原稿をそろえるために紙面をめくっていますが、これがなかなかに興味深い。

第一回目の平成八年九月一日号に紹介するのは「サル又が賞品の弁論大会」。昭和八年九月十日号の一面トップに掲載された弊社主催の氷上郡弁論大会の社告記事を取り上げました。

「聞け、魂の雄叫びを――（中略）こうこう昼をあざむく白熱灯と百色万様光彩陸離たる万国旗をもって飾られた柏原町氷上公会堂において、その豪華幕を切って落とさんとするのだ。（中略）来たって鉄石を通すこの大熱弁に接し、感激陶酔の三昧境を味得されんことを……」といった大仰なリードで始まる社告は、二十二人の弁士と、植木孝之助（柏原中校長）、津倉亮一（同女学校長）各氏らの審査員を紹介。賞品は一等が美術時計、四等が「シャツサル又一揃え」となっています。

翌十五日号（当時は五日おきの発行）には、十日に行われたこの弁論大会で、柏原の荻野武雄さんが「目覚めよ民衆、すべからく自己の尊さに」という演題を掲げて優勝したことをその要旨とともに伝えています。

要旨の記事は、これまたすごい美文調ですが、その割りには抽象論に終わっているというのが、私の感想。

「とは言え、それはタイムトンネルのこちらの傍聴席からこそ言えること。弁士の真ん前ではきっと特高警察が耳をとぎすませていたろう」と、書き加えながら、今は本当に良い時代になったものと、改めて思いました。

九月にはこのほか、「子牛のせり市で昨年よりすごく高値がついた」、「信用組合の貯金が、氷上郡は県下で最高額を記録した」といった景気の良い経済ニュースから、「元陸軍主計、明大卒と称する男が美人の女性を連れて国領温泉で長湯治したあげくに無銭飲食とわかり、警察につかまった。女性は高知の資産家の出身」、「ある村で、人妻に横恋慕した男が、その女性を猟銃で撃った後、自分も山に逃げ込んで無理心中」といった、派手な三面記事も登場します。

昭和⑧年⑨月の

丹波新聞

《第9回》

皆様の丹波新聞はついに光輝ある五百号刊行の喜びを実現するに至りました。昭和三年十月、旧の丹陽新聞社倒の後を受け、敢えて地方新聞界の王座をめざして躍進奮闘の火蓋を切りましてからここに五星霜、花咲き落つる世相人情の変転に処し、ひん発する経済的難関の打開を突破して、幸に健全なる四百九十九の足跡を乗り越進展の歴史の上に印し、ここにこの第五百号をあまねく世に贈ることを得ましたのは、一に愛読者各位並びに広告主各位の御後援の賜物にほかありません。（9月25日）

創刊500記念号

この日、丹波新聞は八ページ建てに増ページし、五百号の記念号を出した。あいさつ文にある「丹陽新聞」は大正十三年（一九二四年）十月、民政党自由党の両党の対立が激化し、「丹波新聞」と改称した。

丹波新聞社

当時の本社社屋（500号記念号掲載の写真）

また庫賀兼一・相談高等女学校長は「記念の祭典は種々盛中止、出来る範囲を考えたい」とのべ、「欠点も少なくない。品位の高くないゴシップ風記事も見られ、価値観を低めたニュースの扱いも、かつてあった」と、いやがられることによって高めようとするような手段はだめだ」と、率直に指摘している。

さらに、丹陽以来の社員の「梅田氏」が、「大

懐かしい当時の広告も、挿絵代わりに再現することにしました。「丹波新聞に見る昭和史」。地方ミニコミ紙としては珍しく長い歴史を持つ弊紙ならではの企画として、年配の方は勿論、若い人達にも是非ご声援を仰ぐ次第です。

澄まずの池

和田　猛（春日町）

氷上郡の春日町と市島町が境を接するところに妙高山という山がある。海抜約五百七十メートル。俗世間を離れた清爽、幽邃の地である。

春日町多利からは、山頂まで歩いて約四十分。また市島町側からは現在山道も舗装されていて、ＪＲ市島町駅から車で約二十分で登ることができる。

その山頂近くに、神池寺というお寺がある。

このお寺は、奈良朝時代、法道仙人の開基によるという名刹である。

かつての最盛期には、五十余の伽藍が建ち並び、僧坊は二百有余、それに何百何千という僧侶を擁して、天台宗の中本山として栄え、丹波の叡山とも称されるほどであった。その後、兵火、台風などの大災害に遭い、今は往時の威容を見るすべもない。しかし、寺宝も由緒も多く、広い境内や苔むした堂宇跡など、昔の栄華を偲ばせてくれる。

さて、この寺苑の一隅に小さな池がある。山頂近くにありながら、いつも水をたたえ、神池寺という名の由来にもなっている霊池である。この池にまつわる一つの伝説が現在も里人に語りつがれている。

そのむかし。ある夕方のこと。

この池に近い鐘楼へ鐘をつきに出た小坊主が、いつまでたっても帰ってこない。皆は、修行がつらいので寺を逃げ出したのだろうと思っていた。

ところが、それからしばらくして、鐘つきに出かけた小坊主がまた戻ってこない。また逃げ出したのかと思っているうちに、またもや小坊主の行方が杳として分からなくなった。これで三人目である。

さすがの和尚も、再三にわたる異変を深く憂慮し、信頼置ける僧に、鐘つきに出る小坊主の様子を、かげに隠れて見張らせることにした。

その日は雲が重く立ち篭め、一雨来そうな夕方であった。

小坊主のつき始めた鐘の音が「ゴオオーン」と重い尾を引いて大きな木立の間に吸われて行く。

そのとき、鐘楼わきの池の水面がにわかにざわめき始めたと見ると、今だかつて見たこともないような大蛇が

あらわれた。そしてあっという間もなく小坊主に襲いかかり、大きな口をあけてまたたく間に呑みこんでしまうと、どこへともなく姿を消してしまった。

見張っていた僧は、あまりの出来事に口もきけず、ほうほうの体で逃げ帰り、一部始終を和尚に話したのである。

そこで和尚は一計を案じ、小坊主のそっくりの人形を作って身代わりに鐘楼に置くことにし、撞木には長い縄をつけて、かげに隠れていて鳴らすように工夫した。

さてそれからある日のこと。

夕を告げる鐘の音が、いんいんと山にこだまし始めた。そのとき、池の面がざわめき立つと見るや大蛇が姿をあらわした。そして鐘楼に立っていた人形の小坊主を一呑みに呑みこむや水中に姿をかくしてしまった。ところが、どうしたことかしばらくすると、池の水面が大きく波立ち始め、再び大蛇があらわれ、苦しげに池の中をのたうち回り出したのである。

それというのは、実は小坊主人形の体内に猛毒が仕掛けられていたのである。それからというもの、さしも猛威をふるっていた大蛇も出なくなり、小坊主たちも安心して鐘をつくことができた——という。

またそのおり、大蛇が猛毒に苦しみ、のたうち回った時に吐き出した血で、池の水がすっかり濁ってしまい、かつては霊池といわれた清らかな池の水が、いつまでたってももとのように澄まなくなったので、澄まずの池——というようになった——ということである。

ふるさとの祭り

その1

柏原厄除祭

◆はじめに

本誌では郷土研究の一環として氷上郡の祭を歳時記風に取り上げていくことになりました。郡内の部落ごとに神社や寺、そしてそれぞれの祭があり、民俗芸能の見地からも貴重なものも少なくありません。だが本誌では少なくとも江戸時代に遡る歴史を持つとともに、かつては近隣の村からも参拝の列が続くほど賑わった祭に絞っています。というのは、無形文化財に指定されるほど由緒あるものでも、地元の人しか知らない祭では想い出を語れる本誌会員をなかなか探せないからです。

「かつては」と記しましたが、これは昭和三十年代までと言い換えても良いでしょう。この三十年代こそ戦前に通じる生活を送ってきた郷里が大きく変革した時期でした。マイカーが急増し、舗装された県道をゾロゾロ歩くのは危なくなりました。また「三種の神器」が、電気屋の店頭から茶の間や台所へ降臨し、力道山やシャボン玉ホリデー、東洋の魔女たちの活躍は参拝にブレーキをかけ、露店の氷水賞味が目的で参拝する必要もなくなりました。

電話がほぼ各戸に普及したのもこの時期です。度数料十円は今の百五十円に相当しますから、今のように無闇やたらと通話しませんが、遠路参拝のもう一つの御利益である「ふれあい」の有難味も薄くなりました。

この二十世紀半ばの文明開化によって、明治維新の文明開化でもさほど変わらなかった祭が大きく変貌していきます。過疎の進んだ地区ではタイコやダンジリは軽トラックの荷台に載って巡幸したり社前で鎮座するだけに退化しました。農家の大半が勤め人となり、当初は「地域の祭日でして…」と休ませてもらえたものの、厳しい企業競争の時代にとんでもないという風潮がすぐに到来します。戦前から十月の神嘗祭に秋祭を祝う地域が多く、戦後この日が祝日でなくなってからも生徒児童の授業を半ドンにする配慮はありましたが、勤めを持った大人の方はそうはいきません。

救いの主は東京オリンピック。これを記念して体育の日が制定されたのを好機に郡内の町々は秋祭の日をこの祝日に変更していきます。どの地区も一斉に行うので誰も自分の地区の祭だけで忙しく、「近隣の村からも参拝の列」という姿は少なくとも秋祭については消滅し、かつては近隣に知られた祭も寂しいものになりました。

ところが、昭和六十年代からまた様子が変わり始めます。村おこしが叫ばれ、瀕死の状態だった伝統ある祭には行政からもテコ入れが行われました。近畿テレビで放映されてから生き返り、参加に帰省する人さえ現われた地区もあります。一方では神事というよりはイベントに近い「〇〇まつり」も続出し、年間行事として定着してきました。だから本誌会員が持つ郷里の祭の想い

出も世代によってまちまちでしょう。

編集部では敢えて由緒あるものにこだわり、そして近隣にも知られたものとして取り敢えず次の七つを選びました。想い出の記投稿のご協力を是非お願い致します。また「これも加えよ」というご注文があれば是非お寄せ下さい。

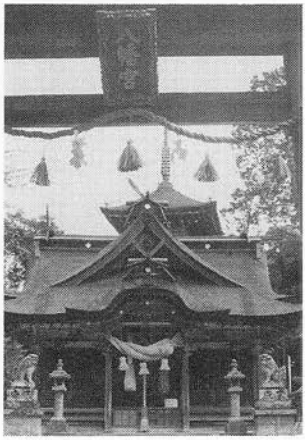
〈編集部・徳田〉

実施日	場所	名称
1月10日	市島町市島恵比寿神社	「十日恵比寿」
2月11日	山南町谷川常勝寺	「追儺式（鬼こそ）」
2月17・18日	柏原町柏原八幡神社	「厄除祭」
8月3日	氷上町本郷・石生	「川裾祭」
8月23・24日	氷上町成松愛宕神社	「愛宕祭」
10月9・10日	青垣町沢野八幡神社	「翁三番叟」
10月10日	氷上町谷村	「新発意踊」

深夜のクライマックス

徳田　八郎衛（柏原町）

「自分とこの祭しか知らへんで」といっても殆どの人が知っているのが、この厄除祭で、三丹一と称されてきたのは千年もの歴史を誇る厄除け祭が北近畿には他にないからだろう。最近の町の広報資料は、「親しみをこめて厄神さんと呼ばれてきた」と記しながらも厄除け祭、厄除け大祭、厄除け神社と表している。だが以前は厄除祭、厄除さんと当て字風に呼び、ヤクヨケマツリなどとは言わなかったし、門戸厄神のように厄神とは記さなかった。厄の神になるからだ。



一般に「山」と表すのは神社ではなく寺であるが、この八幡神社の社務所には「厄除山」と記してある。これからも想像されるように、ここは神仏混合で、一〇二四年に京都石清水八幡宮の別宮として創建された社殿（現社殿は一五八五年豊臣秀吉により再建）の背後に応仁年間に建立の三重塔（一八一五年に再建）が寄り添うように立つ。明治維新の廃仏毀釈で打ち壊された塔が多いだけに貴重な遺産で、兵庫県下に三基しか残っていない。本殿と拝殿は国指定の、三重塔は県指定の重要文化財である。

「八幡さん」と愛称される、この八幡宮の本殿横にある厄除神社がこの神事の主役である。いわばテナントだが、柏原から離れると家主の八幡さんよりも厄除さんの方が有名になる。昼間は長い参列と露店しか目に止まらないが、二月一七日の深夜に行われる「青山祭

壇の儀」こそがこの神事のクライマックスである。まず「ひもろぎ」という常磐木を立てて厄除け神の宿る場所を準備する。唐辛子や小豆、干柿といった地元で産する供物を捧げて待つほどに、二人の男神、一人の女神がご降臨あそばされ、この世の悪事災難を持ち去ってくれるという。

柏原の町中の住民にとっては盆と正月が一緒に来たようなものだ。氏子としても多忙な上に親族がドッと来訪するから、早朝より寿司を作り大変な騒ぎとなる。「青山祭壇の儀」に備えて参道には篝火が焚かれ、各町内の御輿は山頂の八幡宮に整列する。不信心な者でさえも何やら神々しい気分に包まれたという。日本がもっとも苦しかった敗戦寸前の昭和二〇年でさえも恒例通り実施された。祖先の大いなる遺産を継承してきた柏原の人々に改めて敬意を表したい。

厄除祭の深夜の儀式「青山祭壇の儀」（柏原町提供）

懐かしや〝悪徳商法〟

黒崎　宏（柏原町）

柏原の総社ともいえる八幡神社の境内社、厄除神社の例大祭は、毎年二月十七、十八日にかけて行われる。郡内外からの参詣者が街をうずめる盛況ぶりは、日頃ひと気もまばらな柏原の街が、一転東京の新宿・渋谷と化してしまう程である。当時（昭和二十年代前半）の二月といえば、おそらくは今よりもかなり寒く、雪の日も多い中での祭事だったと思う。戦後間もないこともあり、神社の階段の登り口には寒中、必ずと言っていいほど数人の傷痍軍人の姿があったのが、今も私の目に焼き付いている。

柏原の町内（本町）に住んだ、特に小学生のころの私にとって、柏原の思い出はイコール厄除大祭のそれ、と言えるほどウエイトの高いものだったように思う。少年時代に〝厄除け〟など無縁のはずだが、要は神社に参ることなどそっちのけで、あの人出と出店の多さ、だんじりや大サーカス小屋の出現、等々、毎年その日の来るのを心待ちにしたものだった。ことに印象深いのは、毎年数多く出現する、いわゆる

〝ヤシ〟とか〝でき屋〟といわれる人々（それは、今の時代ならシャレにもならぬ程単純な〝テクニシャン〟でしかないが）の存在であり、彼らをみる面白さと、同時に、自分自身もまんまと彼らに騙された苦い思い出の数々である。

一例をあげれば、〝あぶり出し〟の紙を数枚セットにして売っている業者がいた。これに「何なりと質問を書いて、あぶり出せば、たちどころに答えが出てくる」、と言って周囲の数人にサンプルを配る。つぎにそれらを回収して、彼自身が、書かれた質問と、その場であぶり出し、出てきた〝答え〟を流暢に読みあげる。それを見て、観客は皆大いに感動するのである。

私の友達も早速買って帰り、家でやってみると、何と、まるでチンプンカンプンの答えが現れる。あとから考えれば、単純なことで、始めから終わりまで、すべて業者の自作自演だったのである。また、恐らくそれはメンタームの程度の傷薬だろう。それを〝万能薬〟とふき込み、こともあろうに、目の前の客（？）をひっぱり出し、「（傷ぐすりだが）背も伸びる」といい、彼の体にぬりつけて〝実演〟までしてみせる。

そばに、毒蛇らしきもの（一向に、それに何もさせようをとしないのに）置いているだけで意味があるのか、そんな単純なインチキにも、数多くの者が〝犠牲〟になった。

またさらに劣悪な業者の例だが、あるベルト屋は、並べた商品の片隅のボール紙に、大きな字で、「一〇〇円」と書いておき、その横に、人が気付かぬぐらい小さい字で「値引きします」と書いている（一〇〇円値引きするということ）。「一〇〇円なら安い」と思い、少しでも買う素振りをすると、たちどころにベルトに穴をあけ、「〇〇千円いただきます」と来る。抗議すると「穴をあけてしまった」と強引に押しつける。この手の悪徳商法には、子供ごころながら私も見るにみかねるものがあった。

ところで、自分自身は、というと、むろん、私も色々とはめられた一人に他ならない。ある時、〝特価〟の「三菱鉛筆」を買って帰り（当時、三菱、トンボは最高級ブランド）よく見ると、「三菱」でなく「剣」三つをあしらったマーク付で、MITSUBISHIならぬ〝MITSUKEN〟と印してあるのだ。見事に引っかかったのである。今思えば、どうしてこれ程までに単純な〝手口〟に、大勢の人々が簡単にだまされたのだろうか？

それは、他ならぬ騙される者がバカだった、といえばそれまでかも知れないが、要は、そういう時代背景（情報不足等の）であったと同時に、当時の人々が皆、ことほど左様に純粋無垢であった、とも言えはしないだろうか。

あの「古き、よき時代」が今は懐かしい。

第二次世界大戦中の兵器開発

徳田八郎衛著『間に合った兵器—戦争を変えた知られざる主役—』

前作「間に合わなかった兵器」で技術戦史の分野を切りひらいた著者が、その姉妹編として第二次大戦という舞台に間に合い、重要な役割を果たした兵器の開発過程を紹介する。すなわち速戦即決の電撃戦を可能にしたドイツ快速軽戦車、新鋭機スピットファイアーの陰に隠れがちだが高い量産性で英本土とマルタ島を守り抜いたハリケーン戦闘機、零戦に匹敵する航続力で南方作戦を決意させた隼戦闘機、米軍の迅速な反攻を実現させた民需技術活用の上陸用舟艇、アングロサクソン国家同士の信頼感で生まれたレーダーとペニシリン、そして現代の間に合った兵器として湾岸戦争のペトリオット・ミサイルとサリン騒ぎに対処した化学防護衣である。

一般に、この種の開発物語は開発の時系列を追うだけで背景説明もなく、書き手ごとに異なるはずの解釈、つまり史観が見えてこない。専門の技術者やオタク族以外には退屈な記事の羅列である。ところが本書はまったく違う。英本土防空戦における英国社会の意外なタルミぶりや、海軍航空ほどには知られていない日本の陸軍航空発展の概要が随所に描かれ、そこへ著者の理念や体験に基づく評価あるいは解説が必ず加えられる。全体を貫く著者の思想は、単に技術だけではなく技術と運用の結合、開発目的の明確化が新兵器（民需なら新製品）の死命を制するというものだ。

京都大学理学部大学院から防衛庁に入り、技術研究本部での研究開発から防大教授としての技術教育に至るまで長く防衛技術に携わった著者は、戦史に興味のある読者には技術の、技術に関心のある読者には戦史の興味を深めてもらうよう書いたと記しているが、最後に郷里の大先輩、大西瀧次郎海軍中将へのコメントも忘れない。

（東洋経済新報社刊・一六〇〇円）〈宮野近〉

式辞や贈る言葉を集めて

上田吉明著『心月—感動する心を求めて』

始業式や終業式、それに卒業式、校長先生ともなれば何かにつけて「ご挨拶」をしなければならない。式辞だから内容も格調高くなければならない、さぞ大変であろうと思っていたが、この春、神奈川県立川崎北高校の校

長を最後に定年退職された上田吉明さん（柏原町出身）は、その在任中の「挨拶」の数々をまとめて本を出版された。題して『心月―感動する心を求めて』。

「心月」とは「悟りを開いた明らかな心」を月の光にたとえて言った言葉で、上田さんが若い頃から剣道修行に励むなかで会得されようとした理想の精神でもあった。三十余年間教職に就いた上田さんの担当教科は社会科であったが、剣道・居合道ともに六段の腕前、全日本スキー連盟の公認指導員の肩書きをもつスポーツマンでもある。

この本に収められた式辞の中にも「文武不岐」とか「勝負は『鞘』のうちにあり」といった武道の精神や格言が織り込まれ、上田さんの教育理念や人生観が表現されている。この本にはご自分の式辞集のほかに先輩校長や同僚の教師が卒業生にたむけた「贈る言葉」が百五十余名も収録されており、挨拶の実例集としても参考になるユニークな本である。

傘寿を記念し二冊目の本

木村つた江著『竹の秋』

木村つた江さん（市島町出身）が傘寿を記念して『竹の秋』という題の本を出版された。「竹の秋」は春の季語、竹の子が地面ににょっきり顔をもたげる頃、親竹の方は養分を吸い取られるのか、葉を黄色に染めて紅葉する様を言うのだそうだ。

木村さんの本はこれで二冊目、最初は平成三年に出された『青竹のように』で、子供の頃の思い出に始まり、昭和六年に単身上京して戦時下で結婚、戦後の生活との闘いや夫婦の葛藤を描いた、いわゆる自分史的作品。二作目の『竹の秋』は地元の同人誌に投稿した創作集と、会誌『山ざる』に投稿した随筆集からなっている。

創作集では、ふるさと丹波を舞台にして出稼ぎ（杜氏）の留守をあずかる若妻が、ふとしたことから大地主の旦那と不倫に落ち、あげくは自死に追い込まれる若妻の悲劇を描いた作品など、昔懐かしい方言など織り込んで興味深く読ませてくれる。

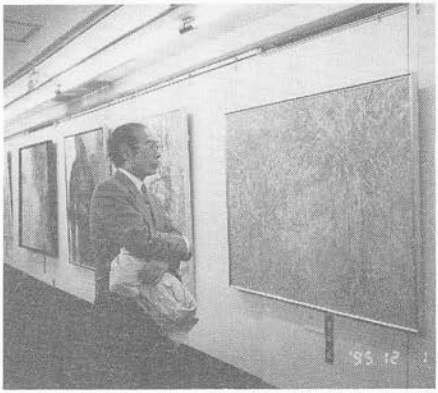
木村さんが、創作の筆を執るようになったのは、ご主人を亡くされた六十代も後半のこと、それまでの屈折した思いと才能が一気にほとばしり出て、八十になる今も創作意欲は旺盛だ。いつまでも好奇心を失わず、一日一日を大切に生きて、三冊目の本も出したいと語っている。

〈池田忍〉

展覧会

◉第九回青垣二〇〇一年日本画展

早いもので第9回を迎え内容も少しずつ充実してきた。テクニックが非常にうまいものよりも、しっかりと自分をみつめて描いたものがよいし、やはりそれは受賞作の中にあるようだ。小林司の「舟辺」、横田和枝の「日記」、山崎裕彦の「春薫る」などそれぞれ特質を感じる。（1995年11月27日～12月2日、有楽町・アートホール）



◉可部美智子さんの個展、グループ展

可部美智子さん主宰の第11回久美の会陶芸展が吉祥寺・井の頭画廊で開かれた。可部さんの焼メ「幼なじみ」「山寺の小僧さん」はあどけない一瞬の表情をとらえる。ほかに灰釉の長方皿など。可部さん門下より独立した本多久子さんの壷は丸くずんぐりとしたおおらかさ、他にしぶい「つわぶきの皿」など。20数名の出品で盛況であった。（3月30日～4月3日）

銀座アートホールでの陶彫展では「いかるがの里」に安定したフォルムを、表情から遥かなるものを感じ印象に残る。（5月6日～12日）

第6回個展が新宿小田急ハルクで開催された。「童心の世界は限りなく透明なもの―それを形にしはじめて二十年……子供たちの一人一人の笑顔に、また新しい出会いがあればと……」。この案内状にかかれた通り長年の積み重ねであろう。（8月28日～9月2日）

◉三鬼了三陶芸展

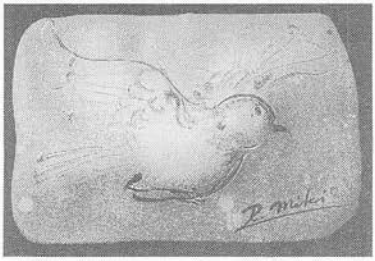
郷友会友・村岡勝美氏夫人の弟さんにあたるスウェーデン在住の陶芸家三鬼氏が東京・大丸のギャラリー〝テン〟で個展を開催される。10月24日～11月5日まで。

三鬼氏は1942年大阪生まれ、京都陶工訓練学校で谷口良三、伊藤陶山、辻普六に、又叶光夫にも師事。日展、現代工芸展、京都市展に入選。京都商

工会議所会頭賞受賞。1966年渡欧。スウェーデンにてウルフ・ヨハンソン氏と共同工房設立。69年デンマークで独立。ギャラリー〝ビエクダム〟で個展（68、70）。72年アランストーンギャラリー（ニューヨーク）買上げ。コペンハーゲン王立工芸美術館（デンマーク）より招待され個展、160点出品。76年オレブロ市に移る。85年大阪三越で個展。89、92年オレブロにて個展。

三鬼氏は「北欧生活30年、芸術の中にも東洋と西洋の違いを肌に触れて感じてきました。今回は東も西も忘れ、子供の心に帰って鳥、魚等のレリーフを作りました」と語っている。東京での初個展。乞御一覧。

〈以上、常岡幹彦・記〉



出版記念会

◉木村つた江さん『竹の秋』

木村つた江さんの二冊目の著書『竹の秋』の出版と傘寿をお祝いする会が、去る八月十八日、東京・新宿のパークハイアットで開かれた。

この会には木村さんが所属する同人誌や短歌会のほか郷友会のメンバーら四十名が出席して、フランス料理を会食しながらお祝いした。冒頭に、郷友会の渡辺隆男が「本を書くことが木村さんの若さの秘訣であり、この調子で三冊目にも挑戦してください」と祝辞を述べ、最後に木村さんも「いつまでも人を恋する気持ちを失わず、百歳をめざしてがばりたい」と謝辞を述べた。

お孫さんから花束を受ける木村さん

〈訃報〉

平成七年九月一日から同八年八月三十一日までに事務局に届いたものです。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

有田　毅殿　平成七年
植村章子殿
大地みさを殿　平成六年八月六日
荻野よ志江殿　平成七年
鴻谷正博殿
高見安亮殿　昭和六十三年七月二十五日
田　健一殿　平成七年七月三日
林谷　集殿　平成八年一月七日
福島輝子殿
松本源吉殿　平成七年
三浦成夫殿　平成七年九月二十六日
最上次郎殿　平成七年十月五日
山光美さを殿　平成七年三月十九日

柏陵同窓会東京支部 平成八年度総会開く

柏陵同窓会東京支部では去る六月十四日（金）午後六時から東京・九段会館で平成八年度総会と懇親会を開いた。本部から植田憲雄同窓会会長が出席し、いよいよ来年に迫った創立百周年記念事業の進捗状況などを説明した。

当日の総会は出席者五十四名と低調であったが、同窓の誼みで先輩後輩入り乱れての賑やかな会となった。

植田会長の指揮で校歌斉唱

柏原高女昭和23年卒同窓会

高田美佐子（柏原町）

私が同窓会に積極的に参加してみようと思い出したのは、近年になってからである。それだけ時間や気持ちに余裕ができたといえば多分にそうなのだが、本音は〝今のうちよ。動けるうちよ〟といった気持ちの方が強い。

私は昭和二十三年、兵庫県立柏原高等女学校を卒業した。多くの級友は学窓を巣立ったが、私たち一クラスほどのものは学制改革でこの年に出来た柏原高校の三年生に編入され、その第一回卒業生となった。その女学校の方の同窓会は、地元の人たちと阪神間の仲間たちが、それぞれの地域で交互に開催してきて下さった。それが四十六年も続いたが、最近は隔年でということになっていた。

二年前のことである。話題としてはあった東京開催が実現した。おそらく後にも先にもこれが一回限りになるのではないか――。その時も、関西の人たちには長年お世話になってきたことだし、東京での希望があるなら〝今のうちよ〟と力説した。東京勢は四人、八重洲の龍名館で十五、六人の集いだったが、こじんまりとゆっくりと語りあった。

今年の同窓会は四月十三日だった。柏原町・三友楼である。壮観だった。卒業生一九四名中、物故された人十二名、参加者は九二名を数えた。半数以上の人が集まったことになる。よわい六十六歳。女学生時代の面影に年輪を重ねた風格が加わって、たしかに熟年を思わせる。幹事さんたちも大変だったことだろう。しかしよくまとまっていて、献身的にお世話をして下さった。さらに感動したのは司会者の挨拶であった。心のこもった行き届いた挨拶が昨年の阪神・淡路大震災で被災された多

1996.4.13　柏陵会館前にて

くの級友たちにふれられた時は、胸が熱くなった。幸い亡くなられた方がいなかっただけでも救われた。私は乾杯の音頭をとらせていただいた。東京から行くと遠来の客扱いになるのか、光栄なことだと思った。

実は、この三友楼には胸に込み上げてくるような、懐かしさと悲しさがあるのである。ここの長女梅垣富美子さんは十年ほど前に亡くなられた（あえて旧姓で呼びたい）。富美ちゃんは、私たちが仲良くしているグループの一人だったし、バスケットボール部に一緒に入っていたので付き合いも深かった。母上（女将）が巻きずしを手際よく巻かれるのを手品でもみるようにみとれていたことを思い出す。コツも教えて下さった。その母上が私たちのグループの人が訪れると富美ちゃんを思い出されて泣かれるということを聞いていたので、どうしようか迷ったが、住居の方にご挨拶に行った。八十八歳になられていたがあの美しさは変わらずお元気だった。私はパリに八三年～八七年まで住んでいて、八七年四月頃帰国になるというので、富美ちゃんに〝帰国になりそうよ。ぜひ会いたいわ〟という年賀状を出したのである。直後に訃報が届いた。いまだに悪いことをしたような気持ちがひっかかっている。

私が同窓会に参加しようと思うもう一つの理由は、女学生時代からのグループとダベられるからである。山内寿美さんの別宅（山荘と私たちは呼んでいる）が篠山にあって、そこで自由気ままに過ごさせてもらえる。今回も前日に来て阪神方面から来た四人と合流した。東京は桜が散っていたが、篠山に降り立ったら吹雪だった。私たちは昔からよく議論をした。今も少しも衰えない。主として政治問題、社会問題である。実に楽しい。

当日は、何年ぶりかの柏原の町を懐かしみ、昔の面影を求めてほっつき歩いたが、すっかりといっていいほど変

わっていた。学校周辺がせめて昔の名残りを止めている位だった。私が住んでいた国鉄の官舎があった周辺、駅舎、駅の裏側は昔が思い出せないほど開発されていた。

来年の四月、柏原高等学校が創立一〇〇周年を迎えるため、その記念事業として同窓会館の建設が計画されている。この会館ができたらまた柏原に行くチャンスができるだろうから、それがまた楽しみである。

柏高六回生記念同窓会

柏原高校昭和二十九年卒（第六回生）の関東在住者による同窓会・柏友会では、去年今年と全員がめでたく還暦を迎えたのを記念して、六月九・十日の両日、箱根・小涌園でパーティを開いた。一行は関西から特別参加の旧友十名を含む二十五名で、彫刻の森美術館で落ち合って館内を見学（高見秀史氏の招待）した後、ホテルに到着、温泉に浸りながら旧交を温めあい、宴会でそれぞれが近況などをスピーチして賑やかに語り合ったあとも一室に集まり、修学旅行のような一夜となった。翌日は芦ノ湖方面を周遊した。

柏高七回生還暦同窓会

久保　春雄（山南町）

柏原高校第七回（昭和三十年）卒業生は、今年六十歳を迎え、それを記念して「還暦」同窓会が、去る四月二十八日、故郷山南町の円応教五法閣に於いて行われました。七回生としては、「卒業三十周年」「生誕半世紀」「GO（55）GO熟年」に続いて五年ぶりの同窓会です。前日の二十七日には、オプション行事のふるさと丹波バスツアー（又は、ゴルフ大会）及び前夜祭晩餐会、遠来の参加者は会場で一泊して翌二十八日がメイン行事の懇親会と、内容の豊富な同窓会で、たいへん盛況でした。

私は、一日目のバスツアーからフルコースに参加しました。二十七日早朝、新幹線で東京駅を発ち、特急北近畿に乗り継いで、午前十一時にはJR篠山口駅に到着。駅頭で待ち受けていた幹事の皆さんや、近隣から参加した皆さ

同窓生交歓

んの出迎えを受け、早速、田舎道には大きすぎるような豪華サロンバスでツアーに出発しました。当初、小型バスを予定していたのが、参加者が約四十人と予想を上回る人気で、急拠大型バスに変更になったとか。コースは、柏原高校…水分れ公園…石像寺…妙法寺…円通寺…達身寺…円応教と、時間が足りなくて予定の行き先が大幅にカットされたのが少々残念でしたが、新しくできた公園あり、古くからの名刹ありで、ふるさと丹波を見直す良い機会となりました。特に、すばらしい寺々が印象に残りました。

会場の円応教に着いたのが夕方六時過ぎ、我々の帰着を待ちかねてすでに乾杯を始めているゴルフ組、前夜祭参加組のみんなと久しぶりの再会を祝して早速前夜祭となりました。百人ほどが参加して賑やかな晩餐会の後、野外の特設宴会場に出て見頃の八重桜の下で酒杯を傾けながら、夜の更けるのも忘れて思い出話に花を咲かせました。

一夜明けて同窓会当日は、十時頃から続々と出席者が会場に集まり始めて、ロビーのあちこちで握手をしたり、談笑したりの光景が見られ、開会時刻の正午には参加者が百六十名余りとなりました。全員で記念写真撮影後、卒業時のクラス別にテーブルについて懇親会が始まりましたが、久しぶりに出合う顔に最初は戸惑いながら、話しているうちに、次第に昔の記憶がよみがえってきて和やかな同窓会となりました。一方近況の方では、退職して一か月の人とか、まもなく退職するという人も多く、還暦という人生の節目をひしひしと感じさせられる一面もありました。

恩師の先生方にも六名のご出席をいただきました。松本昌先生の往時を偲ばせるご挨拶や、橋本喬雄先生の歌唱ご披露等がありましたが、還暦の私たちと少しも変わらぬ先生方の元気なお姿には敬服するばかりで、君達もまだまだ頑張れと励まされている思いでし

た。

関東地区からは、これを機会にしばらく帰郷した人、当日の同窓会のみ出席した人など合わせて十五人ほどが参加しました。席上、出町京子さんのいつもながらのあでやかな祝舞が披露されて、会の雰囲気を盛り上げましたし、鶴田ゆき子さんからは、関東地区での同窓会の活動の近況報告がありました。

美酒を酌み交わし、思い出や近況を語り合い、あっというまに時が過ぎたというのが実感です。最後に改めて幹事を選出し、これからもこの会の活動をますます活発にしていこうということになりました。同窓会が終わってからも、それぞれの出身の町村別に分かれて二次会、三次会を楽しんだ人も多かったようでした。

世話人の皆さんのご苦労は大変だったと思いますが、時々雨という予報がはずれて両日とも晴天に恵まれ、還暦同窓会という名にふさわしい、充実した内容のすばらしい同窓会でした。

柏高10回生同窓会

五十嵐寛子（柏原町）

この会が発足したのは昭和の最後の年あたりである。九段会館で開催される東京支部同窓会の後に、同期の者が集って二次会を持ち語り合っているうちに案が出され、まず保尾明・千種倫幸・原田紀子氏等を中心に名簿作りから始めて、ようやく八九年に第一回同期会が銀座の「雪月花」を貸し切りで開催された。遠く仙台から山口泰男氏（東北大教授）、関西から河村憲一氏（医師）等の参加も得て、盛大にスタートを切ることが出来た。

当時はまだバブルはじけぬ前、二次会は六本木のバーを休日開業させ夜の更けるのを忘れて盛り上がっているうちに十二時近くになってしまった。千種氏の運転手付きの車で磯畑圭子氏と一緒に送ってもらい、赤坂から千代田線の終電に飛び乗った。時計を持参していなかったので一駅毎に駅の時計をチェックしながら北千住で数秒を競ってダッシュ、JRの終電に辛うじて間に合った時の安堵感は今も忘れられない。生まれて初めての終電での帰宅であった。

第二回（九〇年）は長尾幸男氏の御尽力で、東芝高輪クラブで開催。東京でも有数の近代ビルの林立する一画に、立派な塀と大木に囲まれた広大な庭の中、旧大名屋敷であった純日本建築のクラブはさすが天下の東芝の底力を感じさせるに十分であった。

第三回（九一年）は荻野正規氏の御尽力で日立目白クラブで開催。紀子（キコ）様がプロポーズを受けた場所として有名な目白駅前交差点から少し奥まった閑静な住宅地の奥に、旧学習院の寄宿舎であった建物は美しく趣きのあるたたずまいであった。クラブ手前には保存のため、道路の中央に堂々とけやきの大木が立っている不思議な光景に驚かされた。

第四回（九二年）は横浜在住の岩本

順一氏のお骨折りで、異国情緒溢れる横浜山下公園氷川丸船上レストランで開催。美しい夜景を楽しみながらのフランス料理は格別であった。男性十名・女性八名の参加であった。

日頃次世代コンピューターの研究に従事されている荻野氏が、記念撮影の時バカチョンカメラの取り扱いに苦労される、微笑ましい一幕に皆の気持ちが思わず和んだものである。

二次会のバーでは岩本氏の御厚意による御出資に預かり心ゆくまで各自の十八番を楽しんだ。ホステス嬢を相手に歌い込まれた東北弁のデュエット曲を熱唱された桑谷暁円氏の姿に、住友商事の商社マンとしての歴史を垣間みる思いがした。その後、病気療養中と聞いたが一日も早い快復をお祈りしたい。

ここでバブルがはじけ、リストラ一色の厳しい世相に突入。しばらくお休み。立ち消えかと心配されたが、第五回（九六年）は西川宣孝、杉上崇志氏の御尽力で竹芝桟橋の都の施設で再開することが出来た。日経新聞第一面に西川氏の日頃の活躍ぶりを紹介する実名入り記事が掲載された直後のことであった。至れり尽くせりのサービスで、時の過ぎるのを忘れて積もる話に花が咲いた。毎回参加の丸山紀子氏の昔変わらぬ巧みなリードで男性諸氏に禁煙させる一幕は、全く自然で微笑ましいものであった。世界中を舞台に活躍中の臼井三訓氏が、パプアニューギニアから帰国しての参加で、現地の素朴な生活ぶりを御自身の実生活として語られたエピソードは圧巻であった。

次回は、ドラマ「大地の子」の舞台にもなった新日鉄で活躍中の秋末治氏の御尽力により、社の施設で開催される予定である。

この会の短い歴史からも、同期の方々の各第一線での活躍ぶりが推測出来る。全員のお名前を紹介出来ないのが残念。毎回遠く三浦半島から出席の山本紀子氏、仕事を続けながら御協力下さった足立和子氏等女性パワーも仲々のものである。年齢を気にすることなくありのままの自分で出席出来るのが同窓会。三十年の年輪を経て、学生時代のキャラクターに思いがけない別の一面が加わった同窓生に是非会いに来て下さい。

平成８年11月23日

会　計　報　告　書

（平成７年７月１日～平成８年６月30日）

関東氷上郷友会
会計理事・足立和巳

（単位：円）

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	1,446,841	現金 65,185円 他預金 1,381,656円	出版費	1,162,240	山ざる26号発行のため
年会費収入	466,000	延 189名	通信・印刷費	127,291	役員会案内等他
総会費収入	0		総会費	0	
役員会費収入	126,000	4,000円×18名、 3,000円×18名	長寿祝費	0	
編集会費収入	0		会議費	284,673	役員会等
寄付金	75,000	延 17名	慶弔費	0	
広告料収入	1,088,000	延 99名	支払手数料	16,781	郵便振替料、送金料等
受取利息	2,082	郵便貯金 1,721円 銀行預金 361円	消耗品費他	54,640	
雑収入	0		HM資金返却	948,372	全て返済完了
100周年特別会計より	1,036,696		繰越金	1,646,622	現金 106,372円 普通預金 150,091円 振替預金 200,950円 郵便貯金 389,209円 定額貯金 800,000円
合計	4,240,619		合計	4,240,619	

監査の結果、上記の通り相違ありません。平成８年10月６日　藤田正雄　荻野　武

100周年特別会計

平成8年11月23日

会計報告書

(平成7年11月18日 於 椿山荘)

関東氷上郷友会
会計理事・足立和巳

(単位：円)

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	0		出版費	0	
参加費収入	1,822,515	231名	通信・印刷費	607,518	総会案内等他
協賛金収入	3,521,046	249名	会場費	2,098,601	百周年記念総会
雑収入	13,000	オークション	長寿祝費	0	
			会議費	192,188	百周年実行委員会他
			慶弔費	0	
			支払手数料	24,795	郵便振替料、手数料、送金料等
			消耗品費他	101,665	大会用名札等
			記念品費	745,098	百周年記念
			謝金	550,000	祝寿、ビデオ等謝礼
			一般会計へ	1,036,696	
合計	5,356,561		合計	5,356,561	

監査の結果、上記の通り相違ありません。平成8年10月6日　藤田正雄　荻野　武

丹波の動き（'95・7～'96・7）―丹波新聞の見出しから―

■95年7月

9日○車両同乗中の子供の事故が大幅増氷上郡上半期の柏原署まとめ

13日○篠山青山歴史村で藩政日記にある144年前の地震（伊賀上野大地震）の記述と篠山城石垣崩壊の損所絵図の記述が一致

○日本画家の常岡幹彦さんが円応教本部に幅7メートルの大作　作品「麗暉」は墨、朱色、金色の三色を組合せ「朝日、山、霧」の構成を雄大に描く

16日○福知山淑徳高校は調理師養成の食物科に男子受入　大正13年創立以来初めて

○氷上郡消防大会が氷上町石生の工業団地で大地震発生を想定し消化救出訓練を展開

23日○柏原赤十字病院は病棟老朽化で改築計画　奥村川北側の5千平方米の用地提供を町や郡に協力要請

27日○関心薄い参院選挙　丹波地区投票率は50％台　兵庫県選挙区で石井、鴻池氏が当選　比例区では足立良平氏が当選

30日○人気呼ぶ宅地分譲！西紀町の「せんだんの丘」と「かしの木台」の33区画に98人が殺到

○春日町に「深尾須磨子丹波の会」が文学碑を建立　須磨子の詩と晶子の歌と万葉歌を刻む

■8月

3日○氷上町議選初の無投票当選！20人の新町議決まる

○丹波の夏祭り

◆万燈流しや練り込み花火も300発「市島川裾祭」（7／29）

◆鼓笛隊演奏や踊りで氷上町石生の水分かれまつり（7／30）

◆輪投げや福もちまきの成松の川裾まつり（7／28）

◆戦後50年特別展の春日町黒井の川裾まつり（7／28）

◆灯篭流しや花火大会　氷上町の沼貫ふるさとまつり

◆春日町国領の水無月祭　夜店や灯篭流し、野外映画会で"夏の風物詩"満喫（7／21）

◆青垣町ではみたま祭り（8／4）

6日○昔懐かしい「俵編み機」健在　お歳暮は福俵でと市島町前山地区の高齢者グループが手作り

○町制40周年で花火大会など盛大にふるさと柏原夏祭り（8／13・14）

○市島町美和地区の留堀城（黒井保月城の支域）跡で落城450年を偲んで供養祭

10日○8月20日春日町で小西健二郎先生を偲ぶ会で遺徳語り合う

○各地の納涼夏まつり

◆そうめん流しや抽選会の山南納涼夏まつり（8／14）

◆ライトアップで演出の氷上町香良の滝まつり（8／14）

◆地元出身の歌手高屋さんを招いて西紀町制40周年記念のふるさとまつり

（8／15）
◆勇壮に山車八台巡行　伝統誇る篠山町の波波伯部神社の祇園祭り（8／15）
13日○氷上インターチェンジへのアクセス道路氷上町の町道27号線が開通
○柏原町で俳句愛好家が、ステ女をしのぶ忌句会を命日（8月10日）に開く
20日○〝手打ちうどん〟で歓迎　市島町鴨庄ふるさと夏まつりは26日に神池寺で
○市島町神池寺の「肩切り地蔵」肩から上の願い事かなうと評判　参拝者増加
27日○神姫バスの昨年度の赤字1億4千万円ダイヤ減の意向も
○「市島ユーキ」大好評　〝土づくり〟に最適と注文殺到
31日○神池寺の二十六夜祭「採燈護摩法要」披露　盆踊りで行く夏惜しむ

■9月
3日○ポプラの家（柏原町）に知的障害者の入所施設を創立　平成8年8月完成
○主要地方道市島和知線の上牧バイパス着工へ　全長約1・6キロ
7日○丹波地区の最高齢者は篠山町の石田豊治（106歳）さん　88歳以上は12
35人に
○9月9、10日に開く青垣町の「95もめんと草木染セミナー」に全国各地から応募者殺到
10日○氷上町議会議長に西田正敏氏、副議長に塚口彰氏を選出
○県下第1号の「大工ボランティア」で春日町の11人が被災地で活躍
14日○氷上町香良地区の町営斎場受入れ合意で20年来の反対運動に終止符
17日○柏原町文化財の土塀を城下町の景観整備として江戸時代の姿に復元
○春日町「七日市遺跡」の豊岡自動車道関連の1万1千平方メートルを調査
21日○柏原の名園「幽石軒」のシンボルの樹齢3百年の高野マキが樹勢弱まり丹波深緑の会が無償で若返り作業
24日○足立さつき、オペラ「椿姫」をたんば田園交響ホールで公演
28日○出ました！丹波マツタケ　篠山町農協村雲支所が2キロを初出荷　相場は1キロ8万円から10万円

■10月
1日○春日町栢野ー野瀬間の「栢野バイパス」が全線開通
○小規模生活ダム事業の春日町の三宝ダムが全国初の完成式
5日○着々進む複線化工事　丹南町波賀野新田の「幸橋」架け換え完成、渡り初め
8日○「青垣二〇〇一年日本画展」が3日に開幕　大作51点がズラリ
12日○柏原町議選立候補4人超だが過去最低の投票率の76％　新町議14人決まる
15日○市島町制40周年を記念して11月4日〝白鳥の湖〟でライフピアいちじま大ホールのこけら落とし
19日○山南町岩屋で小学生ら稲刈り体験赤米、古代米の収穫祭開く
22日○柏原藩の祖信雄所有の関ヶ原の戦陣にたてられたとされる4メートルを超える旗を柏原町歴史資料館が修復
○市島町の白豪寺へ神戸東灘区の仮設住宅の百人を震災復興と被災者激励で招待　松茸ごはんに舌鼓
26日○10月21、22日の丹波立杭陶器まつり好天気で15万人の人出
○〝見せる要素〟取り入れ20年ぶりに毛槍の振り付けをイメージチェンジ　29日の織田まつりで披露

■11月
2日○柏原町の織田信長サミットに15市町村

の首相らが参加し、町づくりに信長の精神生かそう
○青垣町杉谷の佐伯幸胤さんが陶芸で日展2回目の入選「晩秋の雨」と題した花器
5日○奥野々トンネル貫通　平成10年の供用めざす
○氷上町円通寺で寺宝展示やバザーなどの催し　12日にもみじ祭り
9日○市島町制40周年記念祭を多彩に祝う
○青垣町田井縄のグリーンベル青垣で「青垣もみじの里国際ハーフマラソン大会」開く　2,381人が力走
○氷上町西中の町立植野記念美術館で3日から12月3日まで「氷上の美術作家たち－氷上と深く関わった美術家たちの系譜－」開催物故作家作品14点、現存作家18点
12日○青垣町が発足40周年　19日に町民センターで盛大に記念式典
19日○主要地方道市島和知線の「上牧バイパス」着工　第一期区間は喜多北奥間の1・6キロ11年完成へ
○氷上高校で全員就職決まる　男子は9割が地元で
26日○JR福知山線の複線化促進を！東京の全国鉄道整備促進大会に参加
30日○震災の影響も薄らぎ回復傾向の丹波地方のゴルフ場
○柏原町歴史資料館は捨女が芭蕉と並び描かれている「俳人十人図」を入手

■12月
3日○山南町特産若松　新年に向け出荷開始
○市島町の「前山ふれあい農園」コシヒカリ7・5キロを詰めて〝福俵〟3百個を発送　お歳暮に人気
10日○青垣町稲土の銚子ヶ水採水場を村おこしの起爆剤にと周辺を整備
14日○きょう「丹南古市義士祭」　不破数右衛門ゆかりの宗玄寺の周辺にのぼり旗などでPR
17日○氷上町中央小児童がアルミ缶回収で車椅子を購入し2施設に贈呈
○氷上郡で猛威ふるうインフルエンザ！例年より1ヶ月早い流行
24日○柏原町下小倉の丹波林産振興センターの土場完成で1月初市
28日○丹波地方に大雪襲う　青垣、春日市島、山南の四町が豪雪対策本部を設置

■96年1月
7日○「第九」を丹波で上演をと地元の合唱愛好家を中心に丹波の音楽団体が計画長年の夢が具体化
14日○丹波地区の新成人は1771人（男子876人、女子895人）
18日○そら豆を柏原特産にと南多田で試作「お多福豆」とネーミング
21日○JR福知山線の複線化の実現に向けて氷上郡内町長らが協議会を結成
25日○春日町平松の「火山（ひやま）古墳群」を県教委が豊岡自動車道関連で発掘調査　円墳の規模解明へ
28日○春日町公民館は図書室充実に郷土資料の提供呼びかけ

■2月
1日○氷上郡の今春の入学児童生徒数20人台以下の小学校が13校
4日○市島町で「吉見汚水幹線」着工へ竹田処理区に次ぐ公共下水道
8日○柏原校の荒木謙教諭が差別と闘った旧柏原中校長「大江礒吉の生涯」を出版
○青垣二〇〇一年日本画展は十年目の記念展を9月14日～10月20日に、復興を記念して神戸で10月23日～28日に開催

東京展は12月2日～7日まで
18日○市島町は大雪による屋根損壊など27件に「災害見舞金」を支給
○〝人の波〟のにぎわい　柏原八幡神社の厄除大祭始まる

■3月
14日○春日町で第20回を記念する「春日局の里健康マラソン大会」を10日に開催　過去最高の985人が力走
17日○高校受験ゆるやかに　丹波地方の5高校、2分校の14学科のうち7学科で定員割れ　定員オーバーの学科でも2名超にとどまる公立高校離れが一因か？
24日○国土庁の平成8年度地価公示価格丹波地域は概ね横ばい　丹南、氷上町でプラス点
○西崎祥舞踊研究所が山南やまなみホールで満員の観客を前に「踊る戦後50年」戦後の歌謡曲45曲を題材にしたユニークな公演
○国道175号「竹田バイパス」着工　第1工区は上竹田地内2・3キロ

■4月
4日○丹波地域の高齢化率は平成4年に20％台に乗り氷上郡は22．1％となる
○青垣町の「高源寺もみじ公園周辺景観整備工事」第1期工事が完成
○氷上町清住で7日「かたくり祭」
7日○丹波地域環境づくり推進協議会などが「環境教育用ビデオ」制作タイトルは「きれいな水とそこに住む生き物たちへ」「ホタルの一生」など
11日○柏陵同窓会館いよいよ建設　募金約2億8千万円　創立百周年を迎える来年春の完成をめざす
○氷上職業訓練協会は若手の大工職人を養成しようと柏原町の丹波技能訓練センターで9人が入校式
14日○いろは俳句が好評　丹波の名所を俳句にと氷上町市辺の前川富佐雄さんが頭の文字がい・ろ・はで始まるユニークな俳句を楽しんでいる
○景気は徐々に回復へ　中小企業景気動向調査で各業種とも明るい見通し
25日○柏原高コーラス部が5月5日市島町のライフピア市島で定期演奏会開く
28日○丹波の森公苑29日オープン　平成2年に丹波各町が2千万円ずつ出資して財団化した文化スポーツの拠点丹波の森づくりも展開
○兵庫県雇用開発協会は平成9年卒業予定の学生を対象に丹波の企業も参加して神戸で企業合同セミナー開く

■5月
9日○12年竣工を目標に柏原町庁舎建設研究委員会が報告まとめる
○氷上町西地区で県下一の農集排施設浄化センターが完成
12日○柏原町下小倉の「ハニ遺跡」で白鳳―奈良時代初期とみられる軒丸瓦　軒平瓦が出土
○住友ゴム市島町工場完成　ゴルフボールの生産へ
16日○新緑の丹波路を快走　市島三ッ塚マラソン過去最多の2448人出場
19日○丹波の百年後提言　都市計画の全国組織が地方調査に丹波選ぶ
23日○市島町立図書館蔵書充実3万冊　会館半年で延べ2万3千人入館
○春日観光農園で豊作願ってナシの小袋かけ
26日○例年より10日程遅い丹南町一番茶摘み始まる
○〝父の日にカスミソウを〟山南町でカスミソウの栽培ピーク

30日○来春の丹波地方の高校卒業予定者地元就職希望が237人（柏原職安調べ）
○江戸末期から明治初期の古書が続々と山南町梶の山口武司さん宅から
○プロ野球戦に2日間で5千6百人春日総合運動公園盛大にオープン祝う

■6月

2日○丹波地方の県の土木事業は天引峠（篠山町）のトンネル化　青垣町に「道の駅」など
○竹田川漁業協同組合は竹田川の全域にアユの稚魚1万匹放流
○氷上町上新庄のペンション「モニカ」の支店「ばいえるん」がオープン
6日○市島の三ッ塚史跡公園で「花しょうぶまつり」9日開幕
○兵庫県高校総体で丹波勢が大活躍堂々の16連勝に輝く氷上高女子バレーボール柏原高校ワンゲル部の女子優勝、男子準優勝など
13日○春日町野上野地区のサクランボを〝特産化定着〟へとで6年目の夢
○丹波9町（篠山町を除く）町長資産を公開　関心の薄かった初日の一般閲覧
16日○春日町棚原の浄化センター完成　8月から供用開始
20日○柏原町人口近く1万人に　あと十七人で到達（14日現在）
○丹波布を後世にと青垣町で技術伝承教室が五回にわたって開かれる
23日○氷上町西中の町立植野記念美術館で絵本原画197点を展示し長新太氏（絵本画家）の魅力を紹介
○丹波史懇話会が「丹波史16号」発行
27日○青垣町で香りの文化テーマに「96植物染色ともめんセミナー」が22、23日佐治の町民センターと山垣のいきものふれあいの里で開かれた
30日○丹波県民局の調べによると昨年度の県外からの入りこみ観光客数は氷上郡で46万人多紀郡で82万5千人　主な祭りでは　丹波立杭焼陶器まつりに15万人デカンショまつりに13万5千人　柏原厄除け大祭に13万人

■7月

4日○市島町のママさんコーラス「よしみコーラス」がライフピアいちじまで〝30周年記念リサイタル〟を開いた
7日○石生駅西口緑の芝生が鮮やかにふれあい交流広場が完成した
○〝食中毒〟の防止を！氷上郡食品衛生協会は郡内7百店を巡回しキメ細かな指導を行っている
14日○氷上郡教育委員会は深刻化する不登校の児童生徒が増えているので近く対策会議を発足する
18日○春日町で北近畿自動車道豊岡線の着工記念祝賀会を8月8日に開く
21日○市島町友政に全体の面積3442平方メートルの丹波で初のグランドゴルフ場、林間学校、子ども広場の三つのゾーンに分けて年内の完成を目指す
25日○丹波産材産直住宅が阪神間で6棟完成
28日○山南町と町観光協会ではさんなん三山観光ルートを開発　足利尊氏ゆかりの石龕寺「鬼こそ」の伝統行事で知られる常勝寺　丹波禅寺の中心として栄えた慧日寺をバス会社とタイアップして観光客を誘致することにした
○「O157退散しろ」と山南町和田の狭宮神社で25日「茅（ち）の輪」くぐりが行われた
○青垣町グリーンベル青垣の利用者が10万人突破

〈片岡クミ子・鶴田ゆき子〉

建築材料販売工事
建設大臣許可第1834号

中央建材工業株式会社

専務取締役
東京支店長　荻　野　　武
（市島町出身）

本　　社　名古屋市千種区高見 1－6－1
電話　052（761）6181（代表）

東 京 支 店　東京都大田区西蒲田 8 丁目 9 番10号
電話　03（3730）1281（代表）

大阪営業所　大阪市西区江戸堀 1－8－15
電話　06（443）6665

豊田営業所　愛知県西加茂郡三好町大字三始西田 3－4
電話　05613（4）3121

仙台出張所　仙台市青葉区高松 2－11－15
電話　022（273）5724

札幌出張所　札幌市中央区南一条西 7－12
電話　011（271）3961

新潟出張所　新潟市米山 5－1－25
電話　0252（245）1705

松本出張所　松本市野溝木工 1－6－58
電話　0263（25）0351

広島出張所　広島市西区中広町 1－4－16
電話　082（291）3780

株式会社 **三　葉　水　道**

代表取締役　橋　爪　　忠
（氷上町黒田出身）

〒276　千葉県八千代市八千代台西 7－5－29
電 話　0474－84－7121　　FAX　0474－82－9626

エクステリア専門商社
株式会社 **エ　プ　コ　ス**

代表取締役　松 下　文 雄　（柏原町）
専務取締役　岡　　吉 明　（柏原町）
専務取締役　広 瀬　寿 和　（山南町）

〒351　埼玉県朝霞市膝折 3－7－5
TEL　(048) 466－1551（代表）

調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木　村　つ　た　江

東京都調布市東つつじヶ丘2－39－5
電話　03－3300－6895

消費税・法人税・所得税・相続税・贈与税
の相談・代理申告

船越税理士事務所

税理士　船　越　祥　郎
（春日町多田出身）

〒196　東京都昭島市郷地町2－17－9　電話 0425－44－5997

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状　第2-319号
技術士（電気部門）登録証　第15810号
エネルギー管理士（電気）免状　第 2857号
エネルギー管理士（熱）　免状　第 5191号

若森技術士事務所

所長　若森敏郎

〒302　茨城県取手市白山5－4－13
TEL 0297－72－0907

丹波茶・宇治茶の御進物 御贈答に 明日香園の健康銘茶を！

《明日香園のオリジナルブランド》ウーロン茶の缶ドリンクがただいま大好評です。各種御注文は本社工場にて直接承ります

創業明治四年 伝 統 銘 茶

株式会社 **明日香園**

代表取締役社長　池畑　豪士郎

本社：東京都豊島区南池袋2－26－5　電話（03）3980－4722
本社工場（御注文承り先）　兵庫県氷上郡柏原町南多田 3146
電話（0795）72－3588　**フリーダイヤル** 0120-163588
直販店：西武百貨店池袋本店Ｂ１　電話 5952－5076（直通）

◆本誌発行にご協力有難うございました

書く・読む・調べる—役立つ歴史年表

記入式 同時代年表 '98年版

■自分史・社史・記念誌づくりにお役立てください。
A5判・144頁／定価 1,500円（税込み）／平成8年12月1日書店発売

〈還暦記念〉に贈る

同時代シリーズ 昭和12年生まれ

■60歳からの〈充実人生〉に備え、生きがい情報を満載して贈る。
A5判・280頁／上製本・ケース入り／定価 3,500円（送料・消費税込み）
平成9年1月1日発行／この本は書店販売は致しません。直接下記へ

株式会社ホンゴー出版　東京都中央区明石町 2-16-206
〒104 ☎03（3248）6625
代表取締役　池田　忍　郵便振替 00130－5－144071

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力をお願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますよう願い上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、〝丹波のきずな〟の強さを思います。

（山ざる編集部）

本誌発行にご協力有難うございました◆

足立和巳
自宅 〒183 東京都府中市栄町一―一五―二七
電話 〇四二三―六四―七二二七
FAX 〇四二三―三六―〇五七六

足立かをる

足立勲平
〒251 藤沢市鵠沼藤ヶ谷一―七―四
電話 〇四六六―二二―六四六一

ミワ電気工事株式会社
代表取締役 足立謙悟
〒235 横浜市磯子区杉田五―二二―九
電話 〇四五―七七二―一二六一
FAX 〇四五―七七二―一二六四

足立静雄

株式会社 トレンタ
足立真一
〒211 川崎市中原区新丸子町七〇一
電話 〇四四―七二二―六二七一
自宅電話 〇四四―八五四―六三四〇

◆本誌発行にご協力有難うございました

足立誠一

〒248 鎌倉市鎌倉山四－八－一一五
電話 〇四六七－三一－三六〇〇

日本損害保険協会特級（一般）資格 第特一三五八六号
飯田保険事務所
飯田光雄

〒285 千葉県佐倉市白銀四－十四－五
電話 〇四三－四八五－〇五〇三
FAX 〇四三－四八五－〇二九一

生田清弘

〒157 東京都世田谷区成城一－七－七
電話 〇三－三四一五－一八九三

井本義一

上田脩

〒112 東京都文京区小石川五－一七－六

上山顯

〒106 東京都港区元麻布二－一－三六－五〇三

本誌発行にご協力有難うございました◆

日製産業株式会社
相談役　大木正徳

大野善三
自宅　〒228 相模原市相模台七―二五―八
電話　〇四二七―四六―八七九〇

小田富士夫

梶原清
〒152 目黒区東が丘二―一三―二八
アルカサーノ東が丘302
電話　〇三―三四一八―一二二五

株式会社 アイ・ケイ・アイ
代表取締役　岸田勇
〒103 東京都中央区日本橋人形町二―三四―一一
SEED日本橋3F
電話　〇三―三二四九―五二六二

木呂子恵美子
〒204 東京都清瀬市中清戸二―七五〇―八
電話　〇四二四―九一―三〇三三

◆本誌発行にご協力有難うございました

久保春雄
〒300 土浦市東崎町十三―二―六〇四
電話 〇二九八―二二―二九七八

久保豊
株式会社 アン
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷三―六―三
電話 〇三―三四七八―七四一一(代)

栗田功

社団法人 日本ロボット工業会
理事 事務局長 小森康宏
〒105 東京都港区芝公園三―五―八 機械振興会館213号
電話 〇三―三四三四―二九一九(代)

株式会社 近藤写真製版所
取締役社長 近藤勇夫
〒162 東京都新宿区下宮比町二番一七号
電話 〇三―三二六〇―六二八一(代)

坂上明

本誌発行にご協力有難うございました◆

近藤　勇
〒272 市川市市川南三―一四―三九―一〇六
電話 〇四七三―二六―一九三七

坂上勝朗

坂上　豊

坂本重雄
〒193 東京都八王子市大楽寺町三八七―二〇
電話 〇四二六―二六―七〇八六

佐々木盛雄
〒161 東京都新宿区中井二―十一―十八

コア・ライター
笹倉　強
〒352 新座市栄四―五―二五
電話 〇四八―四七七―五六四〇

◆本誌発行にご協力有難うございました

塩見　みつゑ

エディトリアル デザインワーク
鈴木事務所
アート・ディレクター　鈴木大助
〒162
東京都新宿区天神町六三ライオンズマンション神楽坂第五・302
TEL・FAX〇三―五二二八―三五七四

勢川武彦
〒164
東京都中野区東中野二―一七―二〇
電話　〇三―三三六一―八六七六

コスモファッション
高橋世志子
〒289―13
千葉県山武郡成東町島二六四―一
電話　〇四七五八―二―七二七一

高見嘉都司
〒173
東京都板橋区能野町四〇番十一号
電話　〇三―三九五六―〇六〇〇

田中篤郎

本誌発行にご協力有難うございました◆

大菱印刷有限会社

田中　寛

〒110 東京都台東区台東一―二七―五
大塚ビル
電話 〇三―三八三三―一五九五

谷垣正雄

常岡幹彦

鶴田　宏

田　英夫

〒100 東京都千代田区永田町二―一―一
参議院議員会館229号室
電話 〇三―三五八一―三一一一 内線五二二九

日本舞踊　西崎　祥

端唄　根岸　妙

〒224 横浜市都筑区大棚町五〇〇―八
電話 〇四五―五九一―六六五五

◆本誌発行にご協力有難うございました

新田浩迪
〒222 横浜市港北区師岡町四一八
グリーンヒル大倉山C－106
電話 〇四五－五四一－三四二九

野村豊
〒156 東京都世田谷区船橋七－四－一二
電話 〇三－三四八一－九九三〇

波多洋三
〒112 東京都文京区春日二－一七－二
電話 〇三－三八一一－二八六〇

宗教法人 青葉山 真照寺
八王子 青葉霊苑 許可・管理
（都営八王子霊園となり）
墓地分譲案内中
住職 堀井隆川
〒193 東京都八王子市元八王子町三－一三九七
電話 〇四二六－六三－八四〇三

瑞豊産業株式会社
代表取締役社長 水船隆昌
〒102 東京都千代田区五番町六
グレイス五番町ビル7F
電話 〇三－三二二一－一七三五

国際行政書士協会会員
東京都行政書士会会員
行政書士 宮野近
〒192 東京都八王子市打越町一二三－三
電話 〇四二六－三五－四三八五

本誌発行にご協力有難うございました◆

ウエディングドレス専門創作卸
株式会社 シャルム商会
常務取締役
東京店店長 村上昇
東京店 〒164 東京都中野区弥生三－五－三
電話 〇三－三三七四－〇二一五(代)
本社 〒604 京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話 〇七五－二二二－〇二一一五(代)

村上久夫
〒168 東京都杉並区高井戸東三－四－十二
電話 〇三－三三三二－七一三四

山口和久
〒196 東京都昭島市二－一〇－二七
電話 〇四二－五四四－八八六一

PHP文化フォーラム 埴生の宿
代表 吉住自由造
〒216 川崎市宮前区宮崎五－五－三五
電話 〇四四－八六六－三六二一

コスモ海運株式会社
代表取締役
社長 義積保
〒110 東京都台東区東上野三丁目十八番七号
（上野駅前ビル）
電話 〇三－三八三二－〇七〇一
FAX 〇三－三八三二－五二〇五

渡邊隆男

編集後記

★この度思いがけず『山ざる』の編集委員の一人として郷友会の活動に参加させていただくこととなりました。会誌を通じて郷里の近況やこれまで知らずにいた数々のこと懐かしく楽しく拝読させていただいておりました。会員の皆様方のご活躍ぶりにふれ丹波人であることを誇りに思っています。

郷友会一〇〇年の歴史ある当会の発展の一助として微力ではありますが、私なりに頑張りたいと思っております。

（片岡）

★今年の夏は、予定外の仕事が多く入り、暑かったのか、涼しかったのか、わからないうちに過ぎ去ってしまいました。ということであの懐かしい丹波の空気や水に触れることは、出来ませんでした。でもがっかりせずに本誌『山ざる』次号発行に向けてがんばりたいと意気込んでいます。

（本城）

★永年『やまざる』の編集にいろいろ注文をつけてきた者が、はからずも注文をつけられる立場になりました。本誌の基本的な目的である会員の親睦と郷土に関する情報交換を図りつつ、他に類なき郷土研究誌としての学術性もぜひ維持したいのですが、娯楽性と教養性の二兎を追う雑誌がバタバタと廃刊に追い込まれているのを見ると、まさに言うは易く行うは難し。使う側の必要性を製作する側の技術的可能性、そして経済性と妥協させるのを業としてきた経験がお役に立てるかどうか……。

（徳田）

★夏が終わったばかりなのに、もう早くも年末感がただよいはじめた。今さら時の流れの早さを嘆いてもせんないことではあるが、今年は住専、薬害エイズ、総選挙と主に政官界のプロブレムに耳目を奪われているうちに過ぎ去ろうとしている。一昨年の阪神大震災、オウム真理教事件とあれほど驚愕した事件も忘却の彼方に霞みつつある。近い過去より遠い過去、思い出というものも時間の試練を経て確固とした意識になる。幼少期から味わったふるさとの自然や生活は意識の底に鮮やかに定着して、おそらく今、郷友となっている年代の人が一番美しい思い出を紡いでいるのかもしれない。人間は「未来」のみにて生きるにあらず、「過去」もまた値打ちがある。「現在」を生きる知恵と情報が氾濫する中で、ノスタルジー溢れる本誌の存在もまたよし。（池田）

山ざる　第27号

平成八年十一月一日発行

〈編集委員〉
足立静雄　池田　忍　木呂子恵美子
足立和巳　大野善三　小田富士夫
片岡クミ子　坂上勝朗　常岡幹彦
鶴田ゆき子　徳田八郎衛　本城英明
宮野　近　渡邊隆男

発行者　関東氷上郷友会会長・村上末吉
〒102　東京都千代田区神田小川町一ノ二
DMSビル内・関東氷上郷友会・事務局
☎〇三（三二九三）〇七〇七
振替〇〇一一〇－三－一一三一三〇

製作　株式会社二玄社
編集協力　株式会社ホンゴー出版

二玄社の図書

宮沢賢治 シーズン・オブ・イーハトーブ

原文：宮沢賢治　写真：瀬川 強

A5判変型・上製・総カラー・80頁
各巻とも定価1800円（税込）

イーハトーブの地に根づき、その自然の魅力を知り尽くしたカメラマン瀬川強氏の写真に、宮沢賢治の言葉を重ねあわせ、四季別全4巻にまとめたポエティック写真集。

中川一政 いのち弾(はじ)ける！

中川一政著　紅野敏郎・入江観編

B5判変型・上製・128頁
定価2884円（税込）

ひとつの画文集が人生のバイブルになることもある！　中川一政の永遠に自由奔放な魂の軌跡を一冊に凝縮した本書は、ページを繰るごとに、弾ける生命力が溢れ出る。

新訂 故宮博物院物語

古屋奎二著

B6判・並製・272頁
定価2000円（税込）

中国文化の精髄を集めた60余万点の文物が動乱のさなか、如何にして無傷で海を越え台湾に辿り着いたのか。その歴史秘話を明らかにし、また故宮文物の精華を紹介する。

會津八一と奈良 歌と書の世界

西世古柳平著　入江泰吉写真

A5判・並製・240頁
定価2000円（税込）

奈良の風光と美術を愛し、高らかに歌いあげた八一は、書においても独自の世界を築いた。本書は絶好の八一案内書であるとともに、奈良古寺巡礼の新しい伴侶でもある。

良寛 詩歌と書の世界

谷川敏朗著　小林新一写真

A5判・並製・240頁
定価2060円（税込）

良寛の書の作品百十余点を、漢詩、和歌、書簡、諸・雑の四部門に分けて構成。全作品に釈文と平易な解説を付すが、特に漢詩には「読み下し」と大意を併載する。また各作品を見開き構成とし、その内容に相応した写真を添えて良寛の魅力に迫る。

二玄社の定期刊行誌

CG
月刊 毎1日発売
定価1010円（税込）

NAVI
月刊 毎26日発売
定価780円（税込）

INTERNATIONAL AUTO WATCH
季刊 3／6／9／12月発売
定価1300円（税込）

二玄社　〒101 東京都千代田区神田神保町2-2
電話03-5395-0511 Fax.03-5395-0515　代表取締役社長　渡邊隆男

設計・施工　桂建築計画工房